

501
53



始



26.10.12

3596
L

50/53



大正
10 5.18
内交

千家元麿兄に捧ぐ

序

此の本は今日の自分としては代表的な作だ。

此本一冊を本當によく味つて読んでくれた人は自分の今迄の他の凡ての作を読んでくれた人よりなほよく自分を理解してくれるであらう。

自分の今迄の他の凡ての作を読んでくれても此作を読まないなら自分の作を読んだとは云へないであらう。

此作を読んで猶ほ何かしら自分と交通を感じる事のない人とは恐らく今後も永久に自分は無縁であらう。

自分は此作の中に自分の凡てをそ、ぎ込んだと思つてゐる。とに角一年二ヶ月の間全力を盡して打ち込んだのだ。そして自分はそれだけの報酬を既に得た。

何と云つても此作の中には新しいもの、動かせないものがある。

自分の慾望はなほ、大きい。しかしたとへ自分が今死んだとしても此作は後に残るであらう。自分は今さう思ふ事を自惚だとは思へない。

此作は重い。投ぜられた世間の表面からは直ぐ姿をかくすだらう。此作は深い處に沈み、そして

其處で生きる。

二

縁の無い人には縁はなくとも、縁のある人には深い縁を結ぶであらう。

それらの縁ある人の凡てに、——自分は特に此著を一人の知己に捧げるが——自分は此著を捧げる。此世の柱となるそれらの人々に。

毎も乍ら美事な装幀をして貰へた事をもう一人の知己岸田兄に深く感謝する。

一九二〇年五月

著者



篇

清野
或る人々

或る歳暮の事であつた。
信生は廣い大道を歩いてゐた。

前夜の雪が道端や、軒の上に厚くつもつてゐた。ぬかるみの道路や、家々の屋根からは眼に見えて水蒸気が立ち昇つてゐた。冬の空は吐き出すものを残らず吐き出して了つたやうに、すがくしく晴れ渡つて、いかにも氣持ちよけに、満足らしく、せい／＼として見えた。かう云ふ風に自然が上機嫌でゐる時は人間やいろ／＼の動植物も亦その影響をうけて、愉快な氣分になるものである。樹木は欣ばしい生命の蠢動を内に感じて、微風も無いのに戦慄ぎ、丁度水を浴びた鳥が心地よけに羽ばたきをし、身を顛はすやうに枝を顛はせて雪を拂ひ落し、拂はれた雪の粉末は遮る物を拭はれた日光のうちに飛び散つて、それ自身が光體であるやうに輝いてゐた。

往來を通る女子供や、車を挽く男や、雀も、犬も、木も、皆何となくいそ／＼として憂苦を忘れ、生活を樂しむでゐるやうに見える。

信生も此愉快な氣持ちに交り乍ら一人で泥濘の道を歩いてゐた。彼は寒がりであつたが、冬も

雪も好きであつた。で、今更に冬の美しさ、雪の美しさに感心して、い、ものだと思つた。が、此様に彼の機嫌がよかつたのは矢張り毎も彼の氣分の背景をなしてゐる「仕事」、次ぎの「仕事」に對する希望」が意識の底に潜在してゐた爲めであつた。その潜在意識が彼の心と胸とのうちに朝日のやうに赫灼と輝いてゐる時程彼にとつて幸福な時はないので、その幸福な心で世界を見ると、世界はまるで新面目を以て美しく輝いてゐる。が、此輝いた外界と、内部の光りとが今日のやうに溶け合つてゐる時の幸福は又一倍であつた。

「自然は吐き出すものを吐き出した。今度は特に聖い感情を吐き度くて雪を吐いた。そして地上に一尺も積らせて幸福相には、笑むでゐる。あ、俺も吐き出さう。確かりした本當なものを。何處もかも自分になりきつたものを。深淵の底から湧き出たやうなものを。」かう彼は思つた。

ふと彼の眼にとまつた一人の男があつた。その男は道端に立つて、掴みとつた雪の塊を齧りながらつくねんと物騒がしい往來を眺めてゐた。彼の着物はボロではなかつたが處々ほころびて汚なく、足袋にはひどく穴があいてゐた。髪の毛は延びて、寂し氣にその襟元にくつ、いてゐた。彼は背が高かつた。

信生は此男の感じに何となく牽きつけられた。憐愍の爲めか、見覚えの爲めかよくは分らかなかつた。とに角寂しさには人の心を牽きつける或る物がある。信生はそれとなく彼に近づいてその前

に廻つた。

「宮崎君？」と彼は聲をかけて見た。

その男は驚いたらしく彼の方を振り向いて神経質らしい眼付きで信生の顔をじつと見た。其眼には臆病と、不信と、傲慢と、熱情的な冷たさとが光つてゐた。が、信生にはその男が既に彼信生を覺つてゐるのだが、工合ひが悪いので態と分らないやうな、白ぼくれをしてゐるのだと云ふ事は分つてゐた。で、彼は臆せずもう一步近よつては、笑みながら又云つた。

「暫らく。僕だよ。」と。

其男の頑な、表情は急に溶けた。彼はその食べかけの雪をそつと後に捨て、赤面し乍ら冷たく微笑んで云つた。

「飯島君なのか。餘り暫く目なのでお見それして了つた。——よく僕だと云ふ事が分つたね。」

「何處か君らしいと思つたのだ。しかし驚いた。何しろ随分暫くだつたからね。」

「本當に暫くだつた。」

二人の會話はとぎれた。

信生は宮崎の變り方から一種の驚異と壓迫とを感じた。「こんなになつて了つたのか。」と思つた。彼は自分が上等な駱駝の毛の襟巻をして、温かいトンビを着てゐる事が氣になつた。(駱駝の毛の襟

巻は彼が鼻風邪を引き易く、それに寒い風に當ると屢々ひどい顔面神経痛を起すので、母が自分のを彼に呉れたものである。で、彼はそれを大袈裟に首に巻いて外へ出るのを餘り好かなかつたが、病氣になるのを怖れてそれを巻いてゐた。)彼は今も直ぐ此自分よりも更に虚弱でゐて、薄い着物を着、勿論襟巻もしてゐない男の前で、それを意識しないわけには行かなかつた。

が、宮崎も彼から壓迫を感じてゐる事、それは宮崎が數年前に彼から袴と金とを借りてそれきりになつてゐるからである事、を信生は感じてゐた。その事は宮崎にとつては工合の悪い事に違ひない。五年も経つた今更それを信生に辯解するのも變な事にちがひない。で、かう云ふ——生活と、運命とが甚だしくかけ隔つた二人が邂逅する場合に、不幸な境遇にゐる者は相手に言葉をかけ易いが、より幸運な地位にゐる者の方は却て或るヒケ目を感じて口の切り様に窮するものであるに拘らず、此場合では信生の方から口を切らなくてはならなくなつた。

「君は此頃體はどう。丈夫？」

「有り難う。餘り丈夫でもないが、——背に腹は代へられずで……。」

宮崎はかう云つて淋し氣にほ、笑み乍ら側を向いた。信生には云ふ事がなくなつた。彼は久しぶりに此知人に會つた事を此時の氣分から實際喜びもし、又いろ／＼の事を訊ね度くも思ひ乍ら、どの質問にも遠慮をしなければならなかつた。宮崎が以前にも増して悪い境遇の方に落ちこみつ、あ

る事はその姿を一見すれば分り過ぎてゐた。

「何處へ？」と宮崎は訊いた。

五年振りで逢つたのに、此冷やかな、何の用もない質問は、信生には「左様なら。又何れ。」と云ふ意味にしかとれなかつた。確に宮崎は彼との邂逅を喜ばないのだ。知つてゐる者に——殊に古くから知つてゐる者には逢ひ度くないのだ。それも無理はない。と彼は思つた。で、彼は此久しぶりの邂逅を通り一ペンの空々しい挨拶だけで逃がして了はずに、よかつたら此雪を食ふ人と一緒に何處かで茶でも飲み度いと思つてゐたのであるが、今日は之で別れる方がよさ相だと思つた。

「僕は矢張り元の家にゐる。よかつたらやつて来ないか、大抵家にゐるから。」

此の言葉は意外に宮崎を喜ばせた。むしろ彼は驚いたらしく眼を見睜いて云つた。

「え？有り難う。僕は君にはお詫をしなければならぬ事があるんで。君や清澤君には逢ひ度いとよく思つたけれど、暇がないし、それにどうも氣がヒケて……」

宮崎は冷た相な緒い大きな手を擦り乍らかう云つて横眼で彼の方を一寸見た。その小心な眼付きが信生に彼に對する憐れみの情を強くさせた。

「何をそんなことが……」と彼は合點が行かないらしく云つて笑つた。

「君が許してくれるなら、厚かましいが、では又何時かお邪魔に上らせて貰ふかも知れないよ。」

「是非。僕は實は今日は之だけで君と別れるのは少し本意ないんだが。——」

「今日は少し此處に用があるんで……」と宮崎は傍にある或る婦人雜誌社を指して「一寸待つてゐる人があるんだ。」と云つた。

信生にはそれは少し疑はしい氣がした。宮崎の顔は途方に暮れて爲す處を知らない者の顔であつた。或は彼はこの婦人雜誌社に職を求めて獲られなかつたのではないのか。

併し二人は別れた。信生が暫くして振り返つた時宮崎は下駄で雪の塊りを蹴り乍ら猶ほ其處にくねんと立つてゐた。

二

それから一週間たつた朝、信生は宮崎から手紙をうけとつた。恐ろしく長い手紙で六錢貼つてあつた。彼はその手紙を二三枚の端書の間に見出した時「来たな」と思つた。そして夫を開かない中から或る餘り快からぬ壓迫を感じた。少し閉口だなと思つた。

宮崎は別に彼の親友ではなかつた。唯清澤を通じて知り合ひとなつた數年來の知人に過ぎなかつた。

信生は一週間前に神田で宮崎と逢つた時とは氣分が違つてゐた。「あの時は彼奴に厚意を見せ過ぎ

た。早速つけ込まれた。」と彼は思つた。「彼奴が俺に又こんな長い手紙をよこす。その用事は終の方の二三行にあるので、其處には相變らず金の無心が書いてあるに定まつてゐる。」で、母に又いやな顔をさせて金を請求する事、或は賣り度くない本を賣らなければならぬ事の不快が早くも聯想として頭に浮んだ。

彼はその手紙を開かず其處に放つておいて新聞を読んだ。そして讀み乍らこんな事を考へた。「金を借りられるものは、借りる者の方の困窮や、途方に暮れた心持ちを察しないものだ。そして借りる者は又借りられる者の方の迷惑や、複雑な心遣ひを察しないものだ。兩者は同情の錘りをより多く引く理由に於て固より同等とは云へない。併し兩者の間には今少し互の斟酌と、情愛と、禮儀とがあるべきである。如何なる親密の間であれ、不作法はいけない。かゝる物質的の交渉は愛の微妙な接觸を亂す性質のものであるが故に一層の細心を要するのである。然るに宮崎には此細心が足りない。彼はもつと人心の機微に通じてゐる筈のくせに、貧者の權利を多く見過ぎる餘りに、富者に對して、先天的な反感から、無理な要求を持ち過ぎてゐる。それは未だ彼の境遇として尤もであるとしても、その主張を友人の間に迄下シ／＼實行するのは少し無神經である。餘りに物質的な不作法である。彼は實際その不作法を構つてゐられないと云ふ處まで困窮しきつてゐるのであらうか。此間の様子では或はさうかも知れない。併し彼がそれ程迄に困窮するやうになつた原因には、

彼のルーズさと蟲のよさがあつたにちがひない。一體俺は今迄彼奴にいくら位金をやつたらう。」彼はその嵩を考へて、袴の他に、七八十圓はあると思つた。人にいか程物を與へたかを勘定する心。それは高尚な心ではないと彼は思つた。併し實は彼は少し失望したのである。少くとも百圓位は宮崎に遣つたと彼は思つてゐたからである。そして未だ忘れてゐるのが他にありはしないかと考へたが、思ひ出せなかつた。併し何だかもつと彼に餘計に與へたやうな氣がするのは、宮崎がそれに對して毎も禮を云ふ事を物質に頭を下げる事と思ひ過ぎて、もつとそれを當然の權利と思はうと意識的に努めてゐるからである。彼に物質である處のものは此方にも亦物質で、「物質」に對する評價に於ては、彼奴も俺も同じなのに。つまり彼奴は物質から超然としやうとして、却つて物質に囚はれてゐるのだ。貧の爲めの癖み。尤もでもあり、氣の毒でもあり、又そんな事に日本人式に恬淡でない處が、宮崎のいゝ處でもある。併し事實はそれとも違つてゐるかも知れぬ。或る程度以上の貧は人間をルーズになし、ズボラにしてしまふ。彼は最早そんな事を俺が思ふ程にも、念頭にかけてゐないのかも知れない。念頭にかけても始まらないので、もうそんな處を通り越して只管忘却を求めてゐるのかも知れない。そして實際もう半分以上忘れてゐるのであらう。

信生はかう考へた。併し宮崎に對する曖昧な不快は去りきらなかつた。「要するに彼奴の不幸は己れを知らない處から來てゐるのだ。そのくせ困つた時に丈け人を利用しやうとしてゐる。あんな奴

等とは金の事位で交渉してゐれば澤山だ、くらゐに俺の事を思つてゐるらしい。信生はかう呟いて起ち上つた。實際信生は宮崎が平常は自分に通信せず、かう云ふ物質上の必要に迫られた時にのみ自分に手紙を寄來す事を侮辱と考へた。併し其處には明かに宮崎に對する誇張があつたのである。確に彼はもつと宮崎の自分に對する敬愛と、友情と、感謝との表明を要求してはゐたけれど、宮崎が自分に對して「さう云ふ感情を多少持つてゐる事は知つてゐた。寧ろ宮崎の無沙汰は却つてその爲めの遠慮であり、自分に氣がヒケてゐるからであり、そのくせどうにもかうにも生活に動きがとれなくなる事が折々あつて、さうなると百計盡きて止むなく「もう今度こそは」と云ふ誓ひを自ら破り、彼や清澤の處に無心をせざるを得なくなるのであらう。たとへ其處には多少のズボラがあるにしても、それは恕すべきである事も知らないではなかつた。故に彼はその事情を聞くと、毎も之はやらないわけに行かないと思ひ無頓着らしく彼に金を與へるのであつた。併し金を與へても、與へないでも、何方にしろかゝる事は決して快い事ではなかつた。と云ふのは、其最も卑近な理由から云へば、かゝる事は、何よりも先づ彼に自分がわりに物質的な、冷淡な、人を助ける事に純粹に喜びを感じ得ない、吝嗇？な男である事を思はしめるからであつた。

併し乍ら未だ一家を持たない獨身の若者が、自分の吝嗇——と云ふのが誇張になるならば、物質に對する「惜む心」——を意識すると云ふ事は、よく／＼物質的な俗物の場合のみである。信生は自

を吝であるとは微塵も思はなかつた。そして或る不明瞭な不快の爲めに、知らず／＼宮崎の非？を誇張してゐた事には氣がつかなかつた。併しその手紙を持つて書齋に來た時にはもう氣分は變つてゐた。變な云ひ方ではあるが、温かい飲み物の代りに雪の塊を受け入れなければならぬ空虚な胃袋を持つた宮崎の姿を彼は思ひ出した。その臆病な横眼や、瘦せてゐる背頸にまつた埃っぽい髪の毛や、勢のない咳や、彼が振返つた時下駄で雪を蹴り乍らつくねんと立つてゐた頼りないわびしい姿を思ひ出した。彼奴は一體どんなにして暮してゐるのか。彼奴の二度目の細君は死んださうだ。そして彼奴には子供があると云ふ事だ。とその歸り電車の中で思つた事を又思つた。かくて信生の心はもう暗く頑なではなくなつてゐた。その表面にかさばつてゐる氷が軟かい水になるのには、大した経過は要らない。心の中が少し動けば足りるのだ。事は小さな事である。

三

併し事は小さな事ではなかつた。

手紙には下の如き事が書いてあつた。

「飯島兄

先日は失禮した。あの時僕は面喰つたのだ。逢ひ度く思つてゐる乍ら、自分の腑甲斐ない、いろ／＼

或る人々

の無能に氣がヒケて逢ふのを避けてゐた君に、數年ぶりで出會はした事と、その君から意外にも懇な言葉をかけられた嬉しさで、僕は面喰つたのだ。君が「近頃體はどう。丈夫？」と訊いてくれた時僕の干乾びた眼には、何年ぶりの涙さへ浮んだ。僕の瘦せた胸のまわりに氷結してゐる頑な、氷は、一時に他愛なく溶けるやうな氣もした。——だが書く事が有り過ぎる。僕は何かから書いてよいか分らない。否、そんな事は皆書いても始まらない事のみだ。僕が今どんな風であるかと云ふ事は、君は一見して大凡見抜いてくれたにちがひない。僕は要するにあんな風なのだ。僕の體には温い植物質も、柔い脂肪質も無くなつて了つて、只礦物質のみが残つてゐるのかと思はれるが、こゝんなに骨と皮ばかりになつて了ふと、却つて病氣の發生し處がないのかも知れない。即ち運命は僕を生活難から免疫させてくれる代りに、病氣の感染區域から免除してくれたのであらう。それで僕は健康であるが故にのらくら者、生活の當然な敗殘者とされてゐる。

けれども其實、僕は所謂病氣をしないと云ふ丈けで健康ではないのだ。殊に冬になると例のキズが痛んで、右の腕は肩迄しびれてゐる。夜はその爲に安眠が出来ない。何しろいやが上に運悪く右の腕がやられたのだから、書き物をするにも手が顫へて不自由上ない。

あ、せめて僕の精神の内に植物質や、脂肪質のやうな有機物が残つてゐてくれたら。昔は之でも一廉の文士として「貴方が日本にゐて下さる事は吾々の力であり、希望であります。」と云ふやうな

熱烈な讃辭を青年から受けとつた事も一度や二度ではなかつたものだ。又自分では氣がヒケながら戀人から蔑まれるのが怖さに、しやれた身装をしたり、頭の毛を分けたりしたものだ。彼女と醉ふやうな氣持ちで荒川堤に櫻を見に行つた事などもある。それが今の僕と來たら。水氣のない土からは草木は生へない。愛も、幸福も、文學も水氣のある心に生へる植物だ。あ、文學の「ブ」の字さへ、今の僕の「カチ」な心からは生じ得ない。然らば僕のやうな無能な偏屈者は何うしたらよからう。

或る人は僕が就職難の途方に暮れてゐた頃、僕の一見丈夫な體を見て、何か勞働でもするといひと人に云つた相だ。勿論別に氣にかける程の事ではない。併し他人の怠惰を——それがどう云ふ餘儀ない譯のものであつても——いやに不快に思ふ人々があるものだ。さう云ふ人々は自分達が先天的に勞働から免除されてゐる、怠けてゐても差支のない資格を持つた者と信じてゐる。そしてつるはしのやうなもの、存在を遙に祝福してゐる怠け者だ。處でさう云ふ人間と僕と何れが勞働免除のハンディキャップを國家からつけられてゐて、譯なのだらうか。國家は僕にそれだけの借りが十分あるのだ。僕に生涯の保養金をくれてゐて、わけなのだ。然るに事實はその反對で、僕は前よりも活動力を減退させられた爲めに前よりも一層食ふために働かなくてはならない事になつたのだ。

人々は僕を怠惰だと云ふ。僕が腕をまくつて、紫色の怖ろしい疵痕を見せて、その一風變つた深

刻な禍の云はれを話した處で人々はそれを僕の怠惰の辯解としか解釋しないだらう。又僕もそんな深刻な悪の記念を人に見せびらかすのは嫌だ。實際僕は怠惰と云はれても仕方がなかつたかも知れない。する仕事に興味が持てず、只生活に強ひられてする仕事に勤勉である事は樂ではないからね。自分の氣に入つた仕事を恵まれてゐる者の幸福な怠惰と、厭々ながら止むを得ず不得手な仕事にかざるを得ない不幸な怠惰とを同一に責める事は公平ではあるまい。併し國家は僕を見捨てた。従つて社會も僕を見捨てやうとしてゐる。そして僕の内の水氣は涸れてゐる。僕には才能がない。只空虚な自尊心と、困陋な氣位丈けが残つてゐる。

之丈け云へば僕が今どんな境涯にゐるか云ふ事は君に察して貰へる事と思ふ。清澤君にも偶に夢の中で逢ふ外は久しく逢はない。もう君達に會ふと云ふ生涯の部分は昔に通り過ぎて了つたやうな氣さへする。(君達に散々借金をして世話になつておき乍らこんな謔言のやうな呑氣な事を云ふのを悪く取らないでくれ給へ。之は只僕の中に残つてゐる詩情の殘骸に過ぎないのだ。)何しろ親父にさへ同じ東京にゐる乍ら、三年以上も全で會はない位なのだ。それでも夢の中で昔の知己と逢ふ。あの感じは樂園で戀人と落ち會うやうに幸福で、地上を遙に離れてゐて美しい。君と此間逢つた時は實際自分にはもう會ふべからざる過去の人と逢つたやうな氣がした。恐らく君にとつては僕から過去の友と思はれてゐる方が幸だつたかも知れない。併し君は親切にも優しい言葉をかけてくれた。

で、僕は又昔に歸つた氣になつて、君の親切に甘へ、敢てこんな手紙を書く氣になつたのだ。變に聞こえるかも知れないが、賢い人間は人を捨てないものだ。凡ての人間が自分を捨て去る時に猶一人の人間が自分を捨てずにくれる、變らぬ愛を持つてゐてくれると云ふ信念は人間を救ひ得るものである事をあの時僕はしみじみと感じた。

併し僕は清澤君にも矢張り捨てられてゐないと云ふ信念を持つてゐる。たとへ君達の方からは何と目されてゐるやうとも、僕の方から云へば此世で君と、清澤君と、僕の妹との三人丈けが僕を知つてゐてくれ、捨てずにくれる。併し清澤君にも世話になり過ぎてゐる。妻の葬式の費用も殆ど清澤君に出して貰つたやうな始末だ。それ丈に今では顔が出しにくい。

あれの死については君にお知らせしなかつたが、もう三年前の事だ。あれがある晩風邪をひいた時に、その晩に限つて通常は溫和しい、よく物の解つた子供が腹が痛いと言つて泣き狂つて、母に抱かれて寝たいと云ふのだ。僕らはその時ある家の二階を借りてゐたが、子供の泣き聲は安眠しなければならない人々に迷惑をかけ、ひどく嫌はれるので、あれは僕が止めるのも聞かずにそれらの人の思はくを憚つて——と云ふのは僕らは其家に大分借金がたまつてゐて餘りうけがよくなかつたわけもあるので——僕が夜中に藥を買ひに行つた間に子供を温めに抱いて寝たのだ。あれは元から心臓が悪かつたが、勿論僕らは此時あれの病氣をさう大したものとも思はず、體温器もないので熱

を計つても見なかつたのだ。處が子供はあれの病氣に感染したので、あれは僕丈けに子供の看護を任せざる事が出来なかつた。併しかう云ふ事はつい書き過ぎ度くなるものだから僕はあれは無理をしたのが障つて、大病になり、十分な手當ても受ける事が出来ずに亡くなつて了つたのだと書くに止めておかう。

子供は八重と云ふのだが、其時はもう六つになつてゐたので、自分が駄々をこねた爲めに、餘りに母を慕ひ過ぎた爲めに、母を死に到らしめたのだと深く信じて了つて、感じも、表情も、性質さへも前とは全で違つた陰氣な、寂しい子になつて了つた。始終朦朧たる心の奥に取り返しのつかない、不治の悔恨を刻み込まれて了つたかの如く、何かの逃れ難い罪に深く氣を咎めてゐる顔をしてゐる。六つの子供の絶望的な悔恨と、魔のやうな苛責。一切の原因は親——と云ふよりも、只僕の不注意にあるのだが。僕はそれから三年間、此子供を見乍ら、育て乍ら、夜具をかけてやり、風呂へ連れて行つてやり、菓子を食べせ、着物を買ひ、友達を作つてやり、そして暮してゐる。僕から云ふと變だが、母親よりも美しい子だ。

打ちあけて云へば、僕が此廻りくどい長い手紙を書く理由は實は此子供の身の上についてなのだ。又か。と君は思ふだらう。今度は珍しく無難な手紙を寄來したかと思へば終りに來ると矢張りお定まりの無心かと君は思ふだらう。僕は君の額に又も不快の皺を寄せさせるのに忍びない。併し餘り

に悪くとらなしてくれ給へ。僕は今君に或る相談をしてほしいので、お頼みをするのではない。と云つてもその「相談」は毎も「間接に物を頼む」と云ふ事の代名詞に他ならないと君は思ふだらう。さう思はれても僕は實に一言ない。僕の相談は毎も下から上を向いてする相談で、對等の地位に立つての相談ではなかつた。併し依然として僕は君達より一段下にゐるとは云へ、今度こそは文字通りの相談で、御依頼ではないと云ふ事を信じて貰ひ度いのだ。

實際の處、僕は今別にひどく困つてゐるのではない。現在は少し都合が悪い事があるのだが、併しさう心配して貰ふにも及ばないのだ。正直に云ふと、僕は此間迄三年間或る婦人教育雑誌の編輯をやつてゐた。(その前には他の雑誌の訪問記者をやつてゐた。)編輯の仕事は面白くはないが、今の僕としては體の関係からも最も適當な仕事なのだ。併し僕は一方それだけでは治まりきらずに、少し無理をして或る小さい雑誌に論文を寄稿してゐるところ、其雑誌は當局者の嫌疑をうけて先々月發行停止を喰はされた。僕ともう一人の仲間とは一度警察へ呼ばれて簡単な忠告をうけた。別に僕は危険な思想を書いた譯ではない。處がそれが婦人雑誌の方へ知れて僕は此間免職されたのだ。

問題は僕にはない。僕一人の生活の始末はどうにでもつく。もう少し家を長く明かしてよいのなら就職口の他に見當らない事はないと思ふのだ。併し厄介なのは子供だ。父の所に預ける事が出来れば一番よいのだが、父には僕と同じ齡の後妻がある。此の後妻と僕との折り合ひはどうもよくな

いので、僕は一つは其爲めにも父の家に寄りつく氣になれないのだ。僕の妹は其處にゐるが、矢張り思はしくないので、よく僕に愚痴をこぼして来る。よくある事で、何方がい、とも悪いとも云へない事だらうが、度々泣かされるらしい。そして父は元より裕福では無い。僕を愛してゐるし、僕も父を愛してゐるが、一旦家を飛び出して、父の意志にも逆つてあ、云ふ再度の結婚をしたりした以上、僕はおめおめ此儘で父の許へ世話になり歸つて行く氣にもなれず、又子供を預ける氣にもなれない。今なら預かつてくれと頼めば、預からない事もあるまいが、且又父は八重を可愛がりもすると思ふが、何分後妻がゐるては面白く行かない。加之後妻には小さい子供もあるし、狭い家にギョウ／＼なのだ。そして元々私生兒であつた僕の妻には歸るべき郷と云ふものがない。

今の處では八重は毎日僕の歸るのを煙草屋の二階で待つてゐる。偶まには下の子供と遊んだりしてゐるが、それよりも一人で物を考へたり、空想の人物に話しかけたりしてゐる方を好むらしい。夕方僕が歸つて行くと、家の角迄出迎へてゐる。そして僕の腕に抱き上げられて、家迄歸つて来るのを唯一の樂みにしてゐる。

聞く處によると、子供が物を破壊して樂む性質は、彼の智識の啓發にとつて有益な事で、従つて必要な事であるさうだ。併し貧しい子は物を毀す事を怖れる。それを毀せば次のを買つて貰へない事を知つてゐるから。八重は去年の正月に僕が買つてやつた四十五錢の人形を未だに大事にしてと

つてゐる。勿論其人形の鼻は既にかけて、頭髮は半分以上ぬけてもゐるし、顔はまつ黒になつてゐる。それでも未だにあれの友達役を立派に務めてゐる。贅澤な貧しさだ！半日位は彼女は、實はもう飽き／＼してゐる此相坊に自分の知つてゐるあらゆる言葉を遣つて話しかけて暮してゐる。人のゐない處で、彼女はさう云ふ自分の持て餘す大人の言葉を矢鱈に繋ぎ合はせて饒舌る事に得意と、満足とを感じてゐる。實は自然から言葉の練習をさせられてゐるのだが、此得意と、満足とは、實に彼女を寂しさから一時的に救つてゐる恵みなのだ。一方では大人の眞似をして、譯の分らないませた口を利き度がる本能を満足させ、他方では「女の運命を語つてゐる本能」即ち自分よりも劣つた小さい者に世話をやき度い要求を氣儘に満足させてくれる相手、此故に女の子は他の何の玩具よりも先天的に人形を好むのだ。人形は彼女にとつて實際の生ける人物であり、未來の子の象徴である。併し流石に一つの玩具では彼女も遂には言葉と、空想の種子が盡きて、飽きて了ふ。そして退屈する。彼女は他に氣を晴らす何かを求める。併し何物もない。其處に怖ろしい空虚の寂寞がやつて来る。そして彼女は疊の上に轉がつて一人突つ伏して了ふ。始めにはシク／＼泣きじやくつてゐる。併し何時の間にか寢入つてゐる。

これらの事は僕は實際に見たのではない。けれども夕方、殆ど走りつゞけて歸つて来て、灯りも點けなければ火の氣もない、薄ら寒い、暗い室の中に、あれが一人で、外まへに眠る小犬のやうに時々

體をビク／＼と顫はせながら寝轉んでゐる姿を見出す時に、そして或は留守の間に淋しさと、飢ゑと、寒さと、不意の病氣との爲めに死んでゐるのではないかと思つて、おの、きながらその靜かな寢息をうかゞつて安心する時に、長い留守の間の凡ての一部始終が眼に見る如く僕に分るのだ。

僕は直ぐあれを起す。(直ぐ起さないとあれは僕を恨む。)それから僕は八重を風呂へ連れて行つてやつたり、一緒に貧しい夕飯を濟ませると、夜の九時迄は一生懸命にお相手をする。二三時間の間に長い晝間の留守の取り返しをつけるのだ。父親たる僕の義務は、小さい彼女のふさいだ心から、癒し難い間違つた悔恨や、絶望的な暗い苛責の魔を追つ拂つて、子供らしい、健全な、うら、かな、明るい、快活さを植ゑつけてやる事だ。病的に顫へてゐるそのいたいけな心臓をよろこびと、太陽と、温かさ、光りとの中に浴びさせてやる事だ。自分自身何等のよろこびも、日光も、幸福や、運命に對する信念も健全さも持たない僕がだ。云は、虚無を以て虚無に打ち勝たうと云ふのだ。それにも拘らず、僕は何かにつけて、彼女を笑はせる事に殆ど全力を盡してゐる。一寸した事に大袈裟に驚いて見せたり、可笑しくもない事に笑つて見せたり、右のものは左と云ひ、雨が降ればい、天氣だと云ひ、態と間違へて着物を裏返へしに着て見たり、慌て、帽子をあべこべにかぶつたり、態と物に躓いで轉んで見せたり、のそ／＼と匂つたり、何かにつけて間違つたり、仕損つたり、出鱈目や、あべこべを云つたりして、或は彼女を怒らせ、或は僕を叱らせ、或は笑はせ、或は焦らせ、

或は訂正させたりする。子供は人の間違ひを訂正する事の好きなものだ。一舉一動、一言一句滑稽に見えるやうに我れ知らず本能的に努めてゐる。彼女を僕に甘へさせてゐるのか、僕が彼女に甘へてゐるのか、それは分らない。子供は親に甘へ、親は子に甘へる。そして何方かと云へば先きに泣き出す者は子供よりも父親の方だ。それで彼女は僕の事を「仕様のないお馬鹿さん」と名づけて、僕が何かやると「ソラ又、お馬鹿さん！」などと、自分の子供に云ふやうな口ぶりで云ふやうになつた。そして仲間に「自家の阿父さんはこんな事が解らないのよ。」と云ひ乍ら、人がそれに合槌を打つとムキになつて辯解してゐる。「それでも妾の阿父さんはえらいのよ。」と云ふ。そして人が自分や僕の事を何か云つてゐるはしないかと疑つてゐる。そんなわけで僕も此頃は頓才が發達させられた位だ。勿論そんな風に滑稽を演じ乍らもふと何處かで「あれ」が見てゐるやうな氣がして四邊を見廻したり、急に心が眞暗になつて、ビタリと止めて了つたりする事もあるが、とに角子供の悲壯な笑顔を見てゐる瞬間だけは、僕の心は或る幸福な魔酔にか、つてゐるのだ。

かくて漸く彼女を寢つかせた後で、やつと机に向いて靜かに書き物をする。が、書き物をし乍らふと思考の絲が途切れて筆を休めると、一寸の間後を向いてゐた恐ろしい淋しさと絶望との潜在意識は、まさ／＼と僕の眼前に立ち塞がつて、僕は呆然と四邊を見廻し、八重の寂し氣な寢顔を夢見るやうに眺め入つて了ふ。

只、其處には一人の天使がある。墓場のやうな僕の室の中には、一筋の光明がさして来る。それは君も知つてゐる僕の妹の道子だ。妹は八重を母親の如く哀れみ、可愛がつて閑さへあれば訪ねて来る事に天使らしい喜びを感じてゐる。妹の處からは随分遠いのだが、彼女は二日来ないと、もう八重の事を案じ切つてゐる。そして三日目には必ずやつて来る。全て僕らを救ひにだ。それで八重の方でも直覺的に此「天使」が来る日と、時刻とを當てる事が出来るやうになつた。子供は人ゐる處、明りを追つて歩くものだ。そして彼等が一番敏感になるのは淋しさに對して、ある事を僕は實驗した。幼な兒は「恐怖」から最も強く感動をうけはしない。暗闇の中で氣味悪さを感じるのは淋しさの爲に心細くなつてから後の事だ。しかし彼女の周圍から凡ての人々を去らして見よ。二歳の子供も淋しさを感じて泣き出すだらう。淋しさが最初だ。恐れや、喜びや、氣味悪さや、悲しみはその後に来る。八重が僕の妹を待つ熱心の激しさは、飢ゑたる兒が乳房を慕ふ激しさにも譬へる事が出来る。そして又妹が八重を訪ねて来て、八重の喜ぶ顔を見る時の喜びと満足との深さは、飢ゑたる兒の口に自分の乳房を押し込む時の母親の狂的な満足にも似てゐる。彼女のお蔭で、僕の乾燥した、陰暗な寒い室の中はうるほひ、温まり、明るくなる。

妹が来るべき日に雨が降ると、八重は鬱ぎ込んで、碌に飯さへも食はない。天氣だと朝から小鳥のやうに喜んでゐる。そして前日から翌日の天模様を案じてゐる。母を失つた八重は、此一人の叔

母を母とも思ひ、姉とも思ひ、友達とも思つてゐる。そして此叔母と僕と丈けに笑顔を見せる。云ふ迄もなく、八重の着物は一切妹が祕密に繕つてくれるのだ。

けれども、之はどうもセンチメンタルな生活だ。僕は未だ一人の子の忠實な父親としてのみ生き畢るべき齡でもない。もう少しどうにかしなくては、これ丈けで終つては餘りに腐甲斐がなさ過ぎる次第だ。僕は此生活に一大改革をやらなくてはならない。丸三年はかくして僕は自分として出来る丈け子の爲めに盡した。併し妹にもその繼母に對する心勞をかけ過ぎてゐる。素より自分の生んだ運命の實である子供の身の身に對しては飽迄も自分の手で育てる事を僕は責任とさへも感じない程だし且又彼女を自分の手許から手離す事にも忍びない事は云ふ迄もないが、こゝで今僕が一大決心をしなければ、親子共倒れと云ふ事にもなり兼ねないのだ。僕は免職されて、今一寸金の入り處がない。之から早速就職の口を求めにしても、それが定まるのには、立ち處にと云ふわけには行かない。

それで、僕は八重と當分の間一と月なり、二た月なり、離れる事にして、生活をつゞめ、いろ／＼の始末をつけ、其の間に何か口を見出し度いと思ふのだ。僕一人なら如何程にも簡略になし得る。併しあれがなくては、僕は何事にも臆病になり、引つ込み思案になり、コワレ物を抱へて活動が出来ないやうに、殆ど手も足も出せない事になつて了ふ。親の借金がたまつてゐると云ふので、あれが

此處の家の小さい子供達から虐待されてゐるのを見てゐるのも随分辛い。で、却つて今此處で思ひ切つて自分一人になつた方が先へ行つてい、と思ふし、今の負債は先へ行つていくらも賠償をなし得ると信ずる。

僕の相談と云ふのは即ち此事で、何處か君の知つてゐる範圍で、八重を預つて貰へるやうな處がありはしないだらうかとお尋ねするのだ。到つて蟲のい、相談ではあるが、境遇次第では五つか、六つの子供でも、赤ん坊の守役を務めるのを思へば、八重は九つになつてゐて、齡の割には人の世話にならずに済むと思ふから、小さな子供の遊び相手位は務まるかと思ふのだ。

ひどい親父だと僕は思はれるかも知れない。併し僕が此様な境涯に居る限り、僕はどうせ朝から晩迄家を明けて外で働き、吾々親子は顔を見る事が出来ないのだ。もう此の上くだくしく僕の心中を明かさなくも、君には察して貰へるかと思ふ。僕は今のま、でやつて行けば、いよく滅亡に行くよりない氣がする。精神的にも肉體的にも、此の荷は僕のエネルギーに餘つてゐる。僕が眠りに就くのは毎も大抵二時か三時だ。そんな事位仕方がない。下には下がある、と人は云ふかも知れない。勿論だ。だから僕は人に自分の運命の愚痴をこぼし度がる口をどの位努めて塞いだであらう。僕は随分辛抱した。併し僕とても生きて行かなければならない。落伍者と云ふ意識には堪へられない。そして此の惨めな境涯を切り抜けなければならぬ。併し今は全く途方に暮れてゐるのだ。

勿論僕は決して君に此事で迷惑をかけ度くはない。だからもし心當りの處がなかつたら遠慮なく断つてくれ給へ。いよく預ける處が他になければ、僕はあれを父の處に預けやう。さうすればいかにあれは虐待されやうとも、其處にはあれの母とも頼む僕の妹がある。そしてその爲めに妹がよく窮するやうな場合には、僕はあれを背負ひ乍らでも働くだらう。そして飽く迄もペンを執る覺悟でゐる。僕が斃れたら——誰か、どうかにかしてくれらう。

相變らず僕の手紙はかう云ふ結末にはなつたが、返へすくも君の迷惑にならないやうに、此の話が只相談であつて、決して依頼でないやうに、僕は祈つて此手紙を書いたのだ。

口では咄辯な僕も、筆では勝手が云へるので、つひ一氣にこんな長い、冗漫な手紙を書いて了つた。君の貴重な時間をこの手紙が邪魔したら許してくれ玉へ。そして唯此手紙をすらくと讀んだなりで紙屑籠に放り込んで、それ切り一切の文意を忘れて了つてくれても、僕は恨みなど思ひはしない。キタナイ紙に亂筆で、嚙ぞ讀みづらかつた事とお察しする。萬事大目に見て、容赦してくれ玉へ。

四

手紙は之で終つて居た。

實際それはキタナイ原稿紙の裏表にギッシリと小さな字で書いてあるので、信生は封筒からそれを取り出した時、ウンザリしていきなり溜息を吐いた程であつた。で、彼は一日の中で一番頭のよい、従つて忙しい朝の時間にこんな手紙を読んで少しでも貴重なエネルギーを「浪費」する事を避け、一寸始めの二三行を読むと、そのま、放つておいて仕事にかゝつた。それで彼が此手紙を読み畢つたのは午後二時頃、午飯を食つてからの後であつた。その時でさへ、彼は自分が此一仕事である手紙を果して終り迄忠實に読み了ほせ得るか否やについて疑ひを持つてゐた。併し飛びくんに拾ひ讀みをする位の氣持で讀み始めた彼は、讀み出すと案外に引き込まれて行つた。そして始めにぞんざいに讀んだ爲めに、二度讀み直さなければならぬやうな處が方々にあつた。まつたくの處、殊に終りの方は亂暴に書きなぐつてあるので、一層讀みづらかつたに拘らず、彼は此手紙に感動させられたのであつた。

彼は此手紙に書いてある事を直覺的に信じた。此手紙に書いてある事は凡て嘘ではない、皆本當の事であると信じた。併し今度は自分が彼に對して冷淡であつた、もう少し彼に親切で、厚意を持つてゐてもよかつた事に氣がついても、少しも不快は感じなかつた。不快は愛のない時に、或は愛の隠れた時に起る感情である。

彼は清澤の處へ出掛けた。

清澤の家は矢張り郊外の閑靜な高臺にあつた。彼は伯爵の頭主であると云ふ名前のわりには金持ちではなかつたが、何分に家の名が大きいので、彼は實際よりも人から金持ちと思はれ、又實際少費澤と云へば費澤でない事もなかつた。彼は實際に自分の理性で、獨立的に、その事を「悪い」と思ひ込む迄は、わりに何事も自由にやる質であつた。

「何事に於ても形が内容より先へ出しやばる事は恐るべき事である。生活に於ても同じである。唯必然と、眞實とのみが生長する。蛹になつた蠶は最早桑の葉を食はうとはしない。蝶々になつた蛹は自然に繭を捨てる。蠶が蛹の眞似をし、蛹が蝶の眞似をしたら、直ぐ死んで了ふであらう。」

彼はかう云つてゐた。併しその爲めに彼は或る種の人々から悪く云はれた。「費澤である。」そのわりに人に施す事に吝である。「言ふ事が行ふ事と一致しない。」「正しき生活に對して、本當の憧れを持つてゐないらしい。」「偽善者である。」「エゴイストである。」「温かみとか、愛とかを口にしてゐる乍ら、實は冷たい、無感覺な人間である。」とかと。

又或る者は云つた。「彼は甘い幸福論者である。彼は「喜び」の讚美者であると云ふが、併しその喜びは甘いもので、女子供の持つてゐる如き、人間の單なる快樂的本能に哲學的な勿體を被せ、藝術的な美服を被せたものに他ならない。要するにそれはありふれた快樂主義のえらさうな變名であつて、何等の深みも、權威もないものである。」

或る者は又云つた。「何しろ伯爵様なんだから、あの位の贅澤はまあ質素な方さ。吾々とても金があれば、何も好んでこんな貧乏くさい暮しをしちやるまいよ。出来る身分ならせいく御幸福にお暮しなさるがいゝさ。」

清澤はそれらの譏りを知つてゐた。又如何なる理由からそれが云はれるかも知つてゐた。併し彼は別にそれを氣にかけてはゐないらしかつた。むしろかゝる人道主義的概念が、兎や角云はれながら、何時の間にか一般に流布して來た事を他の概念の流行よりは「悪くない」現象だと云つてゐた。そして自分についてはかう云つてゐた。「自分の徳の實際よりも善く思はれるのよりは未だいゝ。自分の徳が實際よりも善く思はれるのを恐れ過ぎて引つ込み思案になるのは、道徳的頽廢である。併しその點では何方にせよ、俺は安心だ。自分の徳の實際よりも善く人に思はせないと安心の出來ない質の人間とはまづ反對の性質に生れついてもゐるし、と云つて又愆の太い事は商人の成金慾に負けないから。いかなる場合にも俺はうまく平衡をとつて、自由に進んで行く事を妨げられるやうな事はない。」

彼の書齋にはゲーテ、ユーゴー、ドストエフスキー、トルストイの肖像がかゝつてゐる處を見ると、彼は文學者の中で殊に此四人を特別に敬愛してゐるらしい。次の室にはベートオヴェン、ストリンドベルヒ、ロダン、メーテルリンク、シエークスピア等の額が懸けてあつた。又彼は畫が好き

で澤山の畫を殆ど「室中」にかけてゐた。之等の顔は殆ど彼の「家族」と同様で、恰度ある人々の室に祖先の位牌が必要であるやうなものであつた。

信生が訪ねて行つた時、清澤は机に向つてゐた。信生は朝寢坊であつたが、清澤はわりに早起きであつた。そして机を東向きの窓に押しあて、「眞正面から登る朝日の光りを浴びながら」仕事をすることを久しい習慣としてゐた。こんな事は多少彼の子供らしい御幣を示してゐるものである。自分の原稿と頭の上に、昇る日光を浴びると云ふ事は、彼には自分の仕事に對する或る祕かな祝福と思はれてゐるらしかつた。かくして物を書く時には、自然に自分の姿が太陽に向つての禮拜の形になるのを、彼は好んでゐるのであらう。彼は毎朝机に向ふ時には、一種の齋戒沐浴を心の中に人知れず行つた。そして一二分間位は何かに對して黙禱を捧げてゐるやうに見えた。殊に満身の力を注いで善き物を書かうとする時には、一層彼は筆を執る前に、或る黙禱によつて心を清め、純一に、深く、敬虔になさうとした。そして實際彼は敬虔な心持ちになつて、胸の中に勇躍する力を自在に制御しつゝ、寒い程の緊張を以て筆を執つた。此の端嚴な緊張なくして、彼には筆を執る事は出來なかつた。「筆を執る」事は、彼には僧侶が祭壇に於て行ふ莊嚴な儀式に等しかつた。そして此儀式には最も朝が適してゐた。

勿論彼には全く物が書けない時があつた。さう云ふ時には、彼は無理に書かうとはしなかつた。

併しその時にも、彼は毎朝の勤行としての「儀式」は必ず缺かさなかつた。そして其書き物をする時間を或は冥想に費し、或は神聖な書物を讀む事に費した。何れにせよ、一日の中少くとも一二時間は端嚴な、深い心持ちになつて、己れの心靈に或る敬虔な供物を捧げ、又常に「光りを慕ふ」その心靈に、一分間なりとも「無限なるもの、閃き」を拜せしめる事に心を傾けないでは、彼は一日を満足に送る事は出来なかつた。

此の満足には、——その日の頭の工合のよき次第によつて、いろいろの程度はあつたけれども、とに角此の勤めの満足を味はつた後の時間は、彼は至つて氣嫌よく、冗談を云つたり、子供らと巫山戯て遊んだり、娛樂をしたりした。そして彼は人には重もにさう云ふ時の自分を見せた。彼にとつての最も神聖な儀式の時間は、彼は人に見られる事を餘り好まなかつたし、又それは外から見ても分るものでもなかつた。其處には彼と、彼の「神」とのみが居るべきであつた。

要するに彼は仕事から離れてゐる時の自分には餘り自信は持てなかつたであらうが、仕事の中にゐる時の自身には自信を持つてゐた。とは云へ、他の時間の「自由」にもおのづから或る制限は立てられてゐた。彼はわりに勉強家で、殆ど斷えず何かの仕事にか、つてゐるのを常としたが、仕事の間、彼は殊に房事をつ、しむだ。自分の勤行の中に善き成果を授かる爲めには、身の清淨を持してゐなければならぬ。仕事の——即ち精神の祝福は、彼が自己の淫詞に事ふる時彼を見離し、彼

に悪しき成果と、失敗を下す事に依つて靦面な罰を玉ふ。「隠れたるに見玉ふ」者の眞正なる恩に恵あづからむが爲めには、二た心を持たず、肉慾をつ、しみ、遠ざけ、心と共に身の淨戒を保たなければならぬ。之が彼の祕密な迷信であるらしかつた。

彼は本當に「仕事の神」を畏れた。仕事の神は欺き、胡麻化す事は出来ない。此神に愛され、それに依つて善き成果を授からむが爲めには敬虔な眞心をこめて其神にのみ事へなければならぬ。彼は人には云はなかつたが、獨りで堅くそれを信じてゐた。

それでも時々其處には、彼の子供が侵入して來た。四つと三つとになる二人の子供はその母親からお父様の「お仕事」の時間に、お書齋に入る事を厳しく誠められてはゐたけれど、父の甘さを知つてゐる彼等は、一寸した襖の間からよちよち其處へ入つて來ては、赤い小さな指をくはへては父の顔を覗き込むのであつた。「此事はしてはならない。併し此人は多分自分を可愛がつて、それを許して呉れるだらう」と思ふ時に、幼兒は相手の心を試す躊躇の印として指を口に啣へながら、其人の顔を覗き込む。或る時には父は其方を振向きもしない。父が振り向かないと、子供は當てが外れて悪戯を始める。背延びをして父の机の上からインキ壺を取つたり、本を引つくり返したりする。すると父は叱つた。幼な子は父の小言を怖れない。小言の裏には愛撫がある事を知つてゐるからである。父は其方を見る。と、子供は又指を口に啣へて、此の自分を本當には怒り得ない人を見る。そ

の眼には甘へと、天心な媚びと、信頼と、疑惑と、擲擲ひの挑みとがある。「ソラ、此人の額からはあの怖わい八の字が消えるよ。そして御覽、屹度私を抱いて呉れるから。」と云つてゐるかのやうに、可愛い眼付きの奥で笑ひながら。此世での最も清らかな誘惑である。聖なる勤めを行つてゐる僧侶も、此誘惑には一時勤めを忘れる事がある。父は最初には叱る。一度は追ひ退ける。併しその額の六ヶしい八の字は既に消えて、幸福さうに晴々としてゐる。そして二度目にはむづ痒い苛立ちを感じながら、此の誘惑に負ける。彼は一種の粗野を現し乍ら、此小さな邪魔物、天上からの侵寇者を抱き上げる、と云ふよりも掴み上げる。そして硬い鬚の生えた頬を押しつけながら虎が其子を舐め廻すやうに、顔中に荒々しい接吻を浴びせかける。それが復讐である。子供は此愛の復讐に閉口し、且満足する。父は「此奴、仕様のない奴だ。」と云ひ乍ら、小悪魔を扉の外に放り投げるやうに、襖の彼方に押しやつてビシヤリと襖を締める。併し目的を果して満足してゐる子供は、追ひ出されても機嫌よく隣の室で、今度は母親を襲撃してはしやいでゐる。

父は其聲を聞いてにこ／＼笑ひ乍ら何とか口の中で獨り言を云つて再び心を勤行に向け、端嚴を恢復して机に向ふ。

かくの如きが此幸福なる家庭の一つの場景であつた。

五

彼の仕事は大抵毎日午後の一時期には終つてゐたから、人の訪問をうける時分には彼は先づ閑で、大抵どんな人の訪問にも、彼は快く玄關にその人を出迎へるのであつた。併し信生が訪ねた時には、彼は机に釘付けにされたやうにどうしても起つ事が出来なかつた。が、彼の家庭には慣れきつてゐる信生はづか／＼と上つて細君のゐる次の室に通つた。

「どうか遠慮なくやつて来てくれ玉へ。僕は此方で光ちやんと遊んでゐるから。」と信生は襖越しに言葉をかけた。光ちやんと云ふのは四つになる清澤の上の女の子であつた。

「どうも失敬。やつと油が乗つて来たので今日は何時になく長くかゝつたのだ。それに昨夜は寝られなかつたので、今朝は珍しく遅く始めたのだ。」と清澤は次の室から答へた。そしてペンの早く走る音が聞こえた。

實際清澤が善い作を書くのは眠れない夜が幾晩もつゞく事に依つてゐあつた。彼には不眠の夜が度々来るやうでないと仕事が思はしくなかつた。不眠は創作家の祝福であり、幽冥と天界との交通である。そは白晝の中に於けるよりも一層瞭然と幻像を視る事である。眞夜中の祝祭の切ない歡喜。知れぬ恍惚。其處には見えざる黄金の雨がダナエの上に降りそ、ぐやうに、彼の心靈の上に降り

来る。彼はその輝ける雨を浴びながら戀に悩む者の如く、一人床の上に坐り、頭を抱かへ、或は枕の上によつ伏し、或は轉がり、或は呻り、われとわが身を持て餘して、蒸せ返へる如き己が幻想に酔ひながら、悶えながら、明け方迄の幾時間を熱病的な恍惚の中に悩み過すのである。

「猛烈な創作的衝動の湧く時、人は眠らうとしても眠れるものぢやない。火が噴き出やうとしている時、火山は静かである事が出来ないやうなものだ。」と彼は云つてゐた。

彼の精力は別に強いといふ程ではなかつたけれど、かゝる最上の状態に在る時、彼は連夜の寢不足にも拘らず、全く自己以上の不思議な力に驅られてゐる者の如く、不斷に仕事にかじりついて、疲れる事をも忘れてゐた。

暫くして清澤は出て来た。

二人は元氣であつたので、自づと仕事の話に實が入つた。二人の會話は二つの齒車の齒が互に噛み合ふやうに、ピッタリ／＼と噛み合つた。二人はもう何年さう云ふ會話をして来た事であらう。併し話の種子は盡きなかつた。二人が進歩するにつれて、會話も亦生長するに過ぎなかつた。二人は自づから自分の經驗し、感じた事ばかりを云つた。だからそれは平凡なやうな言葉でも、澄澗として居て陳腐な言葉は一つもなかつた。知らず／＼二人は新しい言葉を自ら發し合ひ、又相手から引き出し合つた。そして二人は互に同感し合つても、合槌を打ち合ふのではなかつた。お互に此

の相手になら、自分の思想や、實感を「上等な料理を犬に喰はせる勿體なさを恐れる必要もなく、又自分の言葉が餘りに先走りをし過ぎてゐて相手の頭の上を通り越して了ふので、相手と調子を合はせる爲めには一々「十歩も廿歩も後戻りをして物を云はなければならぬやうな間のぬけた齒痒ゆさ」を感じる必要もなく、思ひ切つて語る事が出来た。答へは常に先方に在つて、後方にはなかつた。それで會話は氣持ちよく互ひ違ひに噛み合つて前へ進んだ。會話の微妙な興味は「前へ進む」處にある。そしてそれは只對當な話し相手の間に於てのみ味はれるのである。實際自分の言葉に對して返答をなす事が出来ず、只反響を返すのみの相手と語る齒痒ゆさを知つてゐる者のみ、わが思ふ壺に嵌つた返答をうける事の満足を知つてゐる。二人は互に自分の言葉の微妙さと、價值とを相手が適當な深さに理解し、十分に味ひ、自分の言葉の不足は深い理解によつて相手が補つてくれる事を信じながら、又相手の言葉が氣に入り、又それがいかにも其人の言葉らしい處に感心し合ひ乍ら、そしてその會話に一種創作的な感興と満足とを感じながら、且又それに依つて互に友情と、愛との悦びを深め、「此人間がゐてくれる事は本當に自分の仕合せであり、必要である」と心に思ひながら、油に乗つて話し合つた。で、信生は宮崎の事を彼に話さうと思つて来たのであるが、一寸それを云ひ出す機會が見出せない程であつた。殊に彼は清澤よりも若かつたので、一層仕事の話の方を多くし度かつた。

清澤は卅三歳で、信生は廿六歳であつた。併し丁度其處に清澤の細君と子供とが出て來たので話は自づと方角を變へる事になつた。

彼は袂から宮崎の手紙を出してその内容をかひつまむで話した。そして宮崎に同情した事や、自分をもつと宮崎に同情を持つて親切にしてゐてもよかつた氣がした事などを語つた。

清澤はその「一仕事」である恐ろしく長い手紙を讀まうとはせず、信生の話に黙つて聞いてゐた。「夢でよく君に逢つてなつかしく思ふが、餘り君には世話になり過ぎて、顔が出しにくいと云つてゐた。併し此世で君と、僕と、自分の妹との三人丈けが自分を捨てずにくれると書いてあつたよ——細君が死んでからの事を書いてある處には感動されたつけ。」

信生はかう云つた。

「金がありさへしたら助かつたのかも知れないがね。金が無いと云ふ事は同時に便宜なツテがないと云ふ事だから。本當に貧乏人が病氣をしたら助かる方が不思議だからね。」

「一體どうして彼奴はあんなになつたんだらうね。頭も悪いわけではないし、カナリ善い處のある面白い人間なんだが。もう少しどうにかならぬものだつたのかね。」

「打撃が強すぎたのだね。落雷に遭つた大木が、生きてはゐても、再び元の勢ひを盛り返すことが出来ないやうなもので。彼奴の生命には不運が大き過ぎたのだね。僕らだつてあんな目に遭つたら、

どうなつてゐるか分らないからね。假令まゐりきるやうな事はないにしても、健全に、素直に育つて來る事はとても出来なかつたにちがひない。運が悪いのにも程度があるし、人間がそれに抵抗出來る範圍にも程度があるからね。」

「しかもそれが人間の力で避ける事の出来る人爲的な不運なのだからね。つまり個人の罪と云ふ事にはなるけれど、個人には抵抗出來ないんだから。」

「尤も未だ宮崎だつて全く廢れた譯ではないのだから……さう云つて了ふのは氣の毒だがね。」

「さうだとも。僕は未だ彼奴に生命がある事を信じてゐる。それも案外に多くありさうな氣もする。そしてあれ程ひどい打撃をうけて、半分以上體を埋められてる乍ら未だあの痺れた手で飽く迄も筆を執つて仕事をして行かうと云ふ健氣な心に感動をうけた。男の内に植ゑつけられてゐる「仕事」に對する意志、それは女がどんな運命に遭つてもその子供を育て、行かうとする意志と同じで、全く人間以上の不思議な、怖るべきものだと思ふね。」

「前の奥さんの方は確かに再縁なさつたのでせうか。」

子供を膝の上にのせながら少しも遠慮のない様子で宮崎の手紙を讀んでゐた細君が突然かう云つた。

宮崎には「死んだ妻」の他に、その以前に、他の妻、そしてそれこそ彼の正妻であつた女があつた。

のであつた。

「さあ、確か、どうかは知らないが、そんな話は話だね。」

清澤は頭を撫でながら云つた。

「それぢやあもうその人とはどうしてもよ、を戻す譯には行かないのね。」

「それや駄目だらう。」

「何だかいやな人らしいわね。蟲が好かないわ。」

「誰を。」

「その女の人よ！」細君は焦れつたさうに夫の顔を睨むやうな眼をして云つた。「随分不貞腐れぢやありませんか。宮崎さんが戦死したつて評判があつた頃にはもう何かいやな噂を作つてゐたんでせう？そして第一宮崎さんと夫婦になつたのだつて……」

清澤と、信生とはチラリと顔を見合はせてほ、笑むだ。

「そんな事はありませんよ。それは誤解です。」信生は云つた。かう云つた彼の語調は柔かではあつたが一種の力があつた。

「僕はその人を知つてゐましたが、決してそんな人ではありません。わりにいゝ人でしたよ。もし宮崎と別れた事で責められるならそりやむしろ宮崎の方に罪があつたのです。」

「お前は少し感違ひをしてゐるんだよ。随分氣の毒な人だ。宮崎も氣の毒だが、清澤もかう云つた。「貴方々男はあ、云ふあばずれの感じのする不幸な女にはいやに同情を持つものよ。女にはそれは出来ないわ。——尤もそんな人の事どうだつて妾の知つた事ではないけれど、只せめて宮崎さん丈けでもね。何處かい、再縁の口でもおありにならないのでせうかね。再縁だか、三縁だか知らないけれど。少しお金の方の融通が利いて、その上に性質の善い奥さんでもお貰ひになる事が出来たら御自分もお子さんも救はれるでせうにね。」

「さううまは行くまい。宮崎の處にそんな女が來つこは先づないからね。」

「そんな事分るもんですか。口で云つて見れば善過ぎるやうに聞こえても、實際ではその位の資格を備へてゐる者はさう珍らしくはないものよ。其他に何かの缺點はあつてもね。織子を本當に可愛がる婦人、しかも綺麗な人で。妾はさう云ふ人をわりに知つてゐてよ。」細君は云つた。

「さうだ。境遇が割りによければ。貧乏世帯で織子を本當に可愛がるのは苦しい事——と云ふより無理な事と云つてもいゝだらう。彼奴の運がよければ何方にしろ道は開けるんだが。今では再縁の口よりは、生活の口の方が先きだ。」

「彼奴の事だからどんな事が又起るか分らないが、多分今ではそんな氣はないだらう。それよりも彼奴は妹と一緒にゐる方を望んでゐるのだらう。」信生はかう云つた。

「道子さん。」

細君は意味あり氣に力をこめてかう云ひ乍ら夫と、信生との顔をじつと視やり、そして笑ひ出した。清澤と、信生とは又顔を見合はせて笑つた。

「飯島さん。貴方も道子さんとお會ひになつた事があるの？」

細君は又かう訊いた。

「い、え、一度も。噂ばかりで。」信生は清澤の顔を見ては、笑み乍ら答へた。

「いやーよ、飯島さん。そんな人を好きになつちや。それこそ大變だわ。貴方なら屹度振られなくつてよ。だから三つ巴が出来て了ふわ。さうなつたら變なものでせうね。ほつほつほ。妾は高みの見物でもして、上げるわ。」

「何を一人で云つてるんだ、馬鹿。」清澤は笑つた。「心配になつて來たらう。」

「誰が心配なんぞするもんですか。自分で浮は氣をしちや、誰も心配も、愷氣もしちやるまいのに、氣が咎めるもんだから、勝手に人をそんな風に書いて、自分の事つて云ふと悪いやうに書き乍らきつと善い子にして了ふものが小説家なんだわ。あ、あ。小説家の女房になる女は災なるかな——。自分を清廉な冤罪者にする爲めには、妻の顔にも平氣で泥を塗する者が小説家なんだから。善ささつてゐて、いやな鏡を抽くものは、毎も細君に定まつてゐるのだから。」

「は、變な話になつて了ひましたね。僕はもし結婚をしたら、一番先きに妻にかう云つてやる心算ですよ。俺は小説家なんで、寫眞屋ぢやないんだと。女は何でも寫實的にしか物を見ないものですからね。」

信生がかう云つた。

「まあ、よく人を選ぶんだね。あんまり名譽心の強過ぎる女房は考へもんだよ。人一倍愷氣を起し易くて、愷氣者のやうに云はれると又人一倍腹を立てるやうな女房はね。さうかと思へば愷氣を超越してゐるやうに書くと、妾はそんなボンツクぢやない、と云ふし。誰もお前の事を書いてゐるんぢやないと云つたつて聞きはしない。女房を持つた小説家も亦災なるかな、——だ。」

「まあ、喧嘩も餘り深入りをしなければたまには却つて味があつてい、でせう。喧嘩は甘え過ぎる處に起るんだから。そんな仲の善い夫婦喧嘩の話聞かされる奴は體のい、惚ろけを聞かされてゐるやうなもんで、い、面の皮だ。」

信生がかう云つたので三人は又笑つた。

「さうよ。仲さへ善けれや、災もまあ、福の中ですわ。だから今度は飯島さんが妾達に喧嘩のおのろけを聞かせて下さればい、わ。ねえ、飯島さん、貴方なら屹度お貰ひになれてよ、どんな人だつて。だけど、もしその人だつたらお貰ひになつても自家に連れて入らしつちやいけませんよ。」

「だつて俺の方から飯島君の家に行つて會へば同じぢやないか。清澤が云つた。」

「でも飯島さんは貴方より眼が肥えて居らつゝやるから大丈夫よ。貴方の眼と來たらそれは變な者を好いと見るんだから。」

「だからお前のやうなものを貰つて了つたのさ。」

「何しろ屁理窟が商賣なんだから迎も減らず口では叶はないわ。」

「は、大丈夫ですよ。僕はまあ女から好かれる方にはあべこべに自信があり過ぎるんだから。」信生がかう云つた。

「まあ腹にもない事を！どうして貴方方若い男の人は女から好かれる事をそんなに不名譽にお思ひになるんでせう。そんな事名譽な事でなくつたつてちつとも不名譽な事ぢやありませんわ。ゲーテはあんなに女から取り巻かれてゐたぢやありませんか。」

「ぢや俺も一つ女から取り巻かれてやるかな。」清澤が笑ひながら云つた。

「貴方なんぞ、頼んだつて誰も取り巻いてくれ手はないから安心よ。夢の中で鼠にとりまかれてヒヒ／＼悲鳴を擧げる位が關の山だわ。」

「油断するなよ。」

三人は笑つた。清澤が病的に鼠を嫌ひな事は有名なものであつた。

「だけど、それはさうとして、あの人には叔父さんとか、叔母さんとか、誰かさう云ふ親戚の人はないのでせうか。」

「宮崎にかい。」

「え、そのお千さんを預かるやうな。」

「あつても交渉が斷たれてゐるのだらう。もしさう云ふ處があれば彼奴はそんな事を俺達に交渉はしないだらう。」

「それなら妾——引きとつて上げませうか。自家に置いて上げやうぢやありませんか。ねえ、此處の家だつてい、のでせう？」

細君はかう云ひながら手紙を再び封筒に入れ、其處に置いて、夫と信生との顔を見た。

二人は顔を見合はせた。そして黙つてゐた。

六

女は細々した事には、男よりも吝なものである。しかし一旦同情を動かされると慈善にかけては、大抵の良人よりも先きに決心をするものである。良人は前後の事情を考へる。先きの事を、結果を慮る。併し女は感情で動く。處で、もう一層重大な事になると、女は又たじろぐ。そして良人

の大膽な決心を怖れるものである。

もしか、る三段の階梯があるものとすれば、細君は今第二の階梯に立つてゐた。

清澤は窓の外を眺めてゐた。

「勿論さうすれはい、どころではなくて、宮崎は随分喜ぶでせうが、併しさうでなくても、宮崎は君達には世話になり過ぎてゐると云つて、恐縮してゐるのですから。」信生がかう云つた。

「さう喜ぶかどうかそれ分らない。僕の方では變らない同情を持つてゐるつもりだけれど、此頃の宮崎は蔭では、僕の事を餘り善く云つてゐないさうだから。」

「本當でせうか。」と細君が云つた。

「本當だらう。それが當り前だから。彼奴には矢張り俺が人生の明るい方面許りを見てゐるやうに思はれて、それが不服なんだ。あ、云ふ人間から見れば俺は眞實の人生を知らない理想家で、甘い幸福論者なんだ。——それも些しは當つてゐるかも知れないが。」

清澤はかう云つた。そして附け加へた。「そんな事は勿論何でもない事だし、殊に彼奴の場合には同情をもつて許せる事だけれど。」

「さう云ふ人は實に多い、ね。けれども——子供は可哀相だ。」

「何しろ彼奴は酒を飲む事を止めなくちやいけない。彼奴が酒を飲む氣持も分るけれど、あの癖を

止めないうちは彼奴は助からない。」

「本當に困るわね。貴方に實際厚意がないのなら、妾はその人の子を置く氣にはなれませんわ。だけれど、此手紙の様子ではそんな事は信じられませんわね。飯島さん。」

「只拘泥してゐるんですよ。自分が明るい氣持になれないので、光明的なものや、明るい氣持のものに感心はしてもつい反感を持ち度くなるんですよ。決して心からさう思つてゐるのぢやありません。彼奴は自分の深い本心を知らないのです。本心の要求を知らないのです。そして自分の氣持を本心だと思つてゐるんです。要するに彼奴が不幸過ぎたのがいけないんです。まあ、あ、云ふ不幸な人間には寛大にしてやるんですね。」

信生は少し顔を赭らめてかう云つた。

「それは勿論だ。だから宮崎がそれを望みさへするなら、此方は決してそれを斷るんぢやない。」

清澤はかう云つた。

「とに角僕が近い中に行つて見て来るよ。彼奴の家に。そして宮崎とも逢つて話して見やう。まあ、今から定める必要はない。そしてどんな子供だかも見て来るよ。何しろ人の子を預かると云ふ事はうっかりは出来ない事だからね。」

「本當にさうですわ。お頼みしますわ。」

「僕の家においたつて構やしません。友達の子供一人位。そんな事は相談して見た上の事としませう。」

信生は猶暫く清澤の處で話した後で歸つて行つた。

其晩床に就いてから、細君は清澤にかう云つた。

「妾は此頃本當に幸福よ。餘り幸福過ぎて怖ろしい氣がよくしてよ。子供は二人共丈夫で、益々可愛くなつて行くし。貴方は此幸福が怖い氣がなさらなくなつて？」

「怖いと思へば怖いには定まつてゐるさ。始めから。」と夫が煩ささうに答へた。

二人の子供は、彼等夫婦の傍らに眠つてゐた。夜は静かだつた。

「でもね、妾はあんまり貴方にすがり過ぎて、貴方に全身で頼りきつてゐるもんで、自分の幸福や、何もかも餘んまり凡て貴方一人に任せきつて、安心してゐるもんで、ふつと萬一の事を思ふと、不意に自分が頼りなくなつて、ゾツとして了ふ事がよくあつてよ。かうして居られるのが仕合せなんですけれど、矢つ張りこれではいけないと思ひますわ。」

「それやまあさうだ。」夫はかう云つて黙つた。彼には妻の言葉が興味を牽いたらしかつた。

「それはかう云ふわけだ。」暫くして彼は又云ひ出した。「妾はその幸福を獲る努力を夫一人に任せて

ゐる。自分の生命や、運命や、幸福を造る方の仕事は、一切夫に任せて安心して、それに頼つて生きてゐる。そして夫が死ねば成長した子供に頼る。その「頼り」は美しいものだ。美しいと云ふ點がらいへば、妻は夫が造つてやる幸福の中で、自分の職分を盡して、不幸に備へるとか、幸福を迎へるとかの仕事は、凡て夫に任せきつてゐると云ふ事が美しいだらう。もし妻が夫と並んで、さう云ふ精神上の労働にその時間を費し、夫から獨立して、その幸福を築かうとしたら、その夫婦の間には愛の微妙な味や、奥味しさは缺けて來るかも知れない。信頼と云ふ處に女性の第一の美德があるのだからな。實際思案してゐる女や、思想上の議論をしてゐる女よりは、子供の爲めに働いたり、病人の看護をしたり、跪いてゐる女の方が美しいからね。だが、實は、矢張りそれだけでもないのだ。女は自分の美を保ち乍らそれを深いものに爲す義務を持つてゐる。自分で自分の運命を背負へる丈けの力は持つてゐなくてはならない。始終自分の運命の中に於ける地位を正視する丈けの眼を持つてゐなくてはならない。夫の言葉に耳を傾けながら、泣く兒に乳を飲ませながら、着物を縫ひ乍ら、そして一人で靜かに考へながら、又子供の枕許で閑があれば本も讀みながら、自分で自分の幸福を造らなくちやいけない。全身の愛を以て夫に頼り乍ら、子供の上にこゝみ乍ら自分の脚で立つてゐなくちやならない。何處迄も女らしい信頼の美德を失はずに、そして信頼の幸福を吸へる丈け吸ひ乍ら、しかも一朝不運が來て、その支へ棒をもぎ去つた時にも、再び起き上つて、自分

が幸福の中に見た本道を見失はない丈けの準備と、秘密な修養は持つてゐなくちやならない。さうすればその美は前のよりは一層深いものである事は勿論だ。——だが實は、萬一そんな時が来て見たら、自分が案外しつかりしてゐる事にお前は氣がつくだらう。」

「本當にね。妾も之からちつとえらくなりますわ。」

實際を云へば、清澤はかう思つてゐたのである。「自分の人生觀の母は自分の妻である。」と。

それは何人の心にも過去と未來と、希望と、淋しさと、祈りと、悔みと、夜と、曙との混合から異様な感慨の涌く大晦日の晩の事であつた。

七

讀者はもつとさつさと事件の進捗する事を望むであらうが、此處で自分は此小説の中で重要な人物の一人である宮崎についてさつと語つておかうと思ふ。でない、彼の手紙の中にある腕の傷や、彼の「落ちぶれ」たわけについても一向分らない事になるから。

宮崎の父は元と小學校の校長であつた。清澤の父が其小學校に金を寄附した時、清澤の父と知り合つた。宮崎は彼の次男であつたが、長男が死んだので、彼は甘やかされて育つた。父は他人にも自分にも厳格であつたが、「誰か一人の女性なしには暮らされな」人間であつたと見えて、三度妻を

迎へた。宮崎は最初の妻の子であつたが、彼が八つの時に彼を甘やかした母が死んだ。數年の後父は又妻を迎へた。その女は彼を可愛がらなかつた。併し一人の女の子が甘になつた時死んだ。父は其後更に六十三才にして三度目の妻を迎へた。父とは廿幾つ歳がちがつてゐた。そして數人の子を産んだ。かくて最初の妻の子である宮崎と二度目の妻の子である妹とは、初めには仲が悪かつたが、共通の繼母と、腹違ひの弟妹を持つ事によつて仲が善くなつた。

家は貧しかつた。彼は幼くして愛と憎みとの味を知つた。彼は小學校にゐた時人の本を盗んだ。其本は相手の子供にはもう全く不用なものであり、自分には非常に欲しいものであるのに、買難いものである事を知つてゐたからである。彼は見つかつて罰せられた。父は彼に二日絶食させた。四つになる妹が彼の處に菓子を持つて來た。併し饑ゑてゐた彼はその菓子に唾を吐きかけて父の室に放り込んだ。

彼は成長して卜學に入つた。同級に清澤がゐた。清澤は美しい利口な子で多勢の友を持つてゐた。併し宮崎はいつも一人で太馬の革をむしつてゐた。

或る時他の學生が或る人の好い習字の教師を虐めた事があつた。その教師は風采が極めて貧相で、見すばらしかつたので生徒から輕蔑されてゐた。そしてどの級も此「瘦せ馬」と稱名のついた教師を虐待する事が習慣となつてゐた。彼等の級に此教師が現れた時、級の者は初めから此教師

を虐める工風をし合つた。かう云ふ小さな生徒は大人は常に自分等よりも強者であつて、自分等の集合は、一人の大人よりも強い事、大人を泣かせる事が出来る事を信じない。それでその悪戯に一種の勇氣さへあると感ずるのである。かゝる大きな強い相手には決して憐愍は不要である。たとへそれが「瘦せ馬」であつても。と、彼等は思つてゐる。

併し心ある者は、實はさうぢやないのだと云ふ事を胸に感ずる。教師も亦憐れむべき弱い者である事を感じる。それは矢張り弱い者虐めである事を感じる。宮崎は一人で教師の味方になつた。そして或るひどい悪戯の計畫をその教師に密告した。それで彼は撲られた。「おべつか使ひ」と云はれ、「支那探」であると云はれ「教師の犬」であると云はれた。

彼は退學し、轉校した。

後に彼は此時の事を人に語つてかう云つた。

「あんな事で人間が分るもんぢやない。殊に少年の未來を知る事は難かしい。あの時僕はつまり小さな正義派だつた。子供らしいものではあるが、とに角正義に従つたのだ。だからあの時丈で云へば僕は級中の誰よりも優れてゐた。處があゝの教師の虐待事件で僕が撲られて、退學した事の爲めに深い刺戟をうけて悩み、悔い改め、そしてそれから深い自意識と勇氣とを覺された學生が一人ある。其學生は他の者と一緒に裏切り者の僕の腰を蹴つた。併し自家に歸つてから自分で自分の意氣

地のない頭と卑怯な足とを猶ひどく撲り、蹴つた。そして僕を追ひ越した。それは清澤だ。だから人間は神の眞似なんぞはしないこつた。(向ち輕率な豫言などはせぬものだと言ふ意味)」

彼がかう云つた時其處には別に皮肉はなかつた。其頃彼は未だ元氣で、仕事に希望を持ち、若い少數の讀者から、「貴方が日本にゐて下さる事は……云々」などと云はれてゐた時であつたからである。

彼は清澤と同級ではあつたが、二つ年長であつた。素質の豊富は必ずしも未來の豊富を豫言しない。豊富な未來が期待される爲めには、豊富な素質に加ふるに著しい光熱を持つた中樞意識を要する。さもない時は豊富は混沌となり、混沌は暗黒となる。

宮崎は自分の素質に自惚を持つてゐた。自分の中の「無意識」に、未だ盲目にして道を見出し得ずにある雑多な「自然」に、自惚を持つてゐた。日本で自分位豊富な資質を即ち未來を藏してゐる文士はないと思つてゐた。そして自分の中にあるあらゆる混沌たる無意識が、眼を開き、道を見出し、光明の世界へ現れた時を想像してはほ、笑んでゐた。

尤も彼の「自惚」はさう間違つてはゐなかつた。彼は確に自分にすら知られない多くの秘密な寶を宿してゐた。併し彼はこの混沌の中に直覺的に自分の本道を認識して行く中樞意識、即ち燈明にいくらか缺けてゐた。云ふ迄もなく、かゝる運命の仕事に於ては、自己の裡に「闇と共に光りをもち有

する」と云ふ位では足りない。その光りは萬人の胸裡に深く射し込む如きものであり、宇宙に向つて卓抜な力を有するものでなければならぬ。が、相當に優秀な光力も、一方それに相應した盲目を伴ふ時には自己の正道にはつきりありつく迄にかなり長い間の暗中摸索や、彷徨や、錯覺を経べき運命を持つてゐる。殊にその天性の本質が外部の境遇や、年齢や、地位の爲めに或は虐けられ、或は惑はされ、又は阻まれて、自由に現れ得ない痛ましい現象はまゝある事である。過度の不遇や、孤獨や、窮迫は餘りに神経質な、弱い、純潔な徳性を素直には延びさせない。それはその芽を踏みつけ、蔓を宙に迷はせる。時として自分の一時的な反動的現象や、病的な錯覺や、氣むかしい反抗心や、憎悪や、猜疑心や、快樂慾や、その他いろいろの暗黒な本能の分子を自己の本質と誤つたりする。それですらも思ひがけない處に自己の善き本質の閃きは露はれる。併し、其處で善き知己や、親切な指導者や、鼓舞や、慰安の道伴を持たない者は悔めである。彼は自分の探してゐるものにぶつかりながらそれに氣がつかず、丁度眼の前に現れた兎を見逃して又叢へ入つて行く血迷つた獵師のやうに、側の暗中へさぐり込んで行く。かくて再び自己を眞實な明るみの中に見出す迄には、長い間の迂廻と、執拗と、忍耐とを要するのである。

宮崎はかゝる聰明ではないが、馬鹿でもなく、賢いと云ふではないが、淺薄でもなく、不器用でもあきらめのわるい獵師の一人であつた。

彼が文學熱に驅られた當時日本の文壇には既に外國から輸入された多くのイズムはあつたけれど、それはイズムと云ふに過ぎなかつた。いろいろの道についての議論は喧ましかつたけれど、ささやかではあるが胸の深奥から湧き出づる聲の持ち主は一人もないと云つていゝ位であつた。小さな本物は出かけても、それは道を切り開き、道を啓ききる力はなかつた。小さな創業は大なる成就と共に貴い。其處では未だ凡てのものが皮屑と、微温と、淺薄と、持て餘しと、附和雷同との上でふわふわと群つてゐた。多くの文士はそれらの香氣な趣味や、浮薄な概念や、手先の小器用を小さな燈明にして此低級な混沌と、無權威な闇夜の中をうろつき廻り、飲み廻つてゐた。

宮崎は此貧しい闇黒の中で先づ快樂主義に牽かれた。彼は快樂主義者ではなかつた。併し禁欲主義に疑惑と反感を持つてゐた。彼は快樂の淋しさと、空虚とを知つてゐた。併しその「罪」を本當には認め得なかつた。彼は快樂に浸つても不満足であり、浸らないでも落ちつかなかつた。彼の心は少々すさんでゐた。

八

「僕は快樂主義者だ。」

ある春の日の午後新しい友達が集まつてゐる處で宮崎は何かの話のキツカケからかう云つた。彼

の蒼い顔の筋肉は興奮してゐるらしくビク／＼顫えてゐた。

其處に居た一同は少し驚いたらしく互に顔を見合せて黙つた。然しさう云つた者が宮崎であるので彼等の顔には別に不快の色は浮ばなかつた。

「だつて君はクリスチャンぢやないか。」一人の友がほ、笑み乍らかう云つた。

「僕が？僕はクリスチャンではない。一度もクリスチャンであつた事はないと云ふ方が本當だ。僕は邪教徒だ。」

「さうだ。君は叛旗を翻したんだね。そして此處にやつて來たんだね。」

「姦淫する勿れ。凡て女を見て……と云ふ言葉に堪へられなくなつたんだらう。青年のクリスチャンで此言葉で落第しない者は稀らしい。そして退校された時には文士になつてゐる。大抵定つてゐら。」

Bと云ふ一人の友がかう云つて笑つた。

「退校されたんではない。始めから入學したんではないんだ。只見學したに過ぎない。その事を僕は深く恥ぢる。僕は恥知らずのなまくらだ！」宮崎は云つた。

「併し君は少くともその恥を知つたんだ。知らずに文士になつたのなら君はデカダんだ。デカダンは吾々も破門する。」

「快樂主義か。ふむ。偽善者やバリサイよりは罪が少いといふ事が何になるんだ。君は俺達をバリサイだと思ひ違へて態とそんな事を云つたのかね。でなければ、吾々をデカダンと間違へてお世辭を云つたつもりかね。そんな事は云ふもんぢやないよ。吾々は禁慾派ではないからと云つて快樂派でもないんだ。」Aと云ふ友がかう云つた。

「僕は只自然に歸らうと思つたのだ。それで自分に歸らうと思つたのだ。全人間的な意味で。僕は自分の現實を肯定せずには生きてゐられない男なんだ。」宮崎は云つた。

「自分に歸る？では君は今迄自分を欺いてゐたのか。」

「自分を欺くといふより「自分」が解らなかつたのだ。」

「それで解る爲めに快樂主義になつたのか。先づ本能を解放する事から始めやうと云ふのだね。」

「だが不潔主義だけは止めて貰ひ度いね。」とCが云つた。「蝶が花を慕ふが如く、糞蠅は糞を慕ふ。糞蠅は蝶より深刻なりアーティストだと君も思ふ一人かね。そんな奴には痰でも吐きかけて喜ばせてやつてさつさと掃出しちまふんだ！」

「快樂がどんなものか知らうと思ふなら酔つばらひの感じを思ひ出すがい、淫慾に負けた後の感じを思ひ出すがい。」Dがかう云つた。

「なに、快樂の淋しさの美味を解しないものは藝術家に非ず。——と糞蠅主義者は云ふ。人間は兩つ

の中何れかを慕ふ。花か、糞か。兩方共臭ひを持つてゐるからである。花を慕はない事は何物をも慕はない事にはならない。何物をも慕はない勇者とほめられたいならば又糞を慕ふ事も止めなければならぬ。併し花を慕ひそこなつた者は多く糞を慕ふものだ。花を慕ふ事は常人にも出来る。糞を慕ふ事は常人には出来ない。かくて今の世では糞蠅主義者も立派な天才だ。何故なら實は糞を慕ふ者が俗人であるからだ。一種の俗人は花を愛しない。」

「僕の快樂主義はその花を愛するんだ。勿論！」宮崎が云つた。一同は笑つた。

「なに快樂主義大いによしだ。」今度はEと云ふ青年が云つた。「凡ての動物と植物との間に接吻があり、有機物と無機物との間には抱擁がある。霞は花に酔ひ、空氣は樹木の緑を抱き、風は原野を撫で、萬物の褥である青草は風に撫でられ、光りは影と溶け合ひ、波を抱き、泡沫に戯れ、獅子は麒麟を追ひ駈けて樂み、嵐は自分の威力を樂み、雷は自分の力に笑ふ。快樂は自然と自然との同化だ。溶け合ひだ。抱擁だ。其處に何の不潔がある。希臘人は此健全な快樂をよく理解してゐたらしい。其處から人類の成長力が生れた。」

「交ぜ返してはいけない。僕は眞面目に云つて居るんだ。」と宮崎が云つた。

「僕は猶ほ眞面目だ。」Eはつゞけた。「健全な快樂は罪を犯さない快樂だ。そして生の力を昂進させるものだ。風は女の裾を煽る。併しそれを罪と思ふのは人間の罪のみだ。風は自分の爲度い事を

する。楽しむ。しかし罪は犯さない。僕に云はせればかうだ。快樂は他のものと同じく、幸福の一つの重要な要素だ。幸福を建築して行く事は一つの快樂でなければならぬ。——」

「嘘だ。」とBが遮切つた。「それは只生物の生存にとつて必要なものだ。その幸福にとつては無い。吾等の體が鹽分と共に鹽分を必要とする如く、吾等の心身は多少の苦勞と共に、多少の快樂をも必要とする。併しそれが吾等の幸福であるか否かは惡魔としての自然が知つてゐる。吾等が快樂をあまり乍ら生存して行くのば畢竟只勢ひだ。盲目な勢ひだ。幸福の爲めではない。思ふに人類の動搖は或る目的、例へば至上の幸福に向つての前進ではない。それは只動くのだ。流れるのだ。或る盲目な「生」の勢ひによつて動かすにはゐられずして動くのだ。それに過ぎない。川が流れるのは海に注がうと思つてゐる。只流れざるを得ないのだ。」

「之は面白い。要するに君は此流動には變化はあるが、變化はないと云ふ意見なのだね。生物の進化、萬有の進化を君は全然認めないと云ふのだね。え？」かう云つてAは高笑ひをした。

「Bの議論は半分からは馬鹿な邪道にはいつて了つたよ。」と中途から入つて來た清澤が嘲笑の氣味を帯びた大きな聲で云つた。「吾々はもつと人間だ！僕等は川の水でもなければ、又川の底で屁理窟をこねてゐる石でもない。現に幸福に向つて明かに進化しつゝ、ある眼のあいた立派な生物だ！だがE、先きをつゞけろよ。」

「快樂と幸福との差は運と運命との差の如しだ。快樂は點であり、幸福は線である。前者は一時的、後者は持久的だ。併し線は點の集合に依らなければ造られない。――」

「否、幸福は線ではない、青空だ。そして快樂は花だ。」とDが云つた。「苦痛は決して快樂ではない。しかし幸福は快樂のみで造られるものではない。如何にそれが健全なものであつても。快樂は一時的だと人は云ふ。如何にもさうだ。何故ならそれは一時的であれば澤山だからだ。」

「又一時的でなければ人間は氣違ひになつて了ふ。吾々にちよい／＼觸れる快樂が束の間の煙のやうに他愛なく消え去つて了ふものでなく、一々僕等の心に執念深く喰ひついてゐるものであつて見玉へ。せめてそれが束の間のものであるのが自然のお慈悲で、又僕等には重苦しい飯の他にさう云ふ軽い菓子も生活の上にもちよい／＼は必要なのさ。腹を悪くしさへしなけれやね。」と機嫌のいいAが云つた。

「だが僕は快樂といふよりも寧ろ『よろこび』と云ひ度いね。快樂と云ふ言葉には、自己中心の意味が多く含まれ過ぎてゐる。少しも他愛的な處、調和的な感じが無い。釋迦や孔子にもよろこびはあつたに相違ないが、快樂があつたとは一寸思はれない。そこがよろこびと違ふ處で、又僕に飽き足らない處だ。」眞面目なDが云つた。

「勿論だ。併し他愛的な事に依つて自己の幸福を増さうとする事は一つの快樂ではないか。僕は人

間のその意志を調和的なものと認める事が自然に許されてゐると思ふ。勿論吾々には智慧が高まる事によつて下らなく見えて来るやうな快樂は問題ではない。――」

「同時に智慧が高まれば快樂は問題ではなくなるだらう。」Aが云つた。

「併し智慧は健全な快樂を排斥はしないだらう。花を造る事や、野山を散歩する事や、夏の樹陰けで編み物をする健康で質朴な女を眺める事や、太陽の光りの中に子供を遊ばせる事や、海水浴を。」

「感謝して神の與へ給ふ愉樂を享けよ」だ。それは僕等の精神を健かにし、心を朗かにする。僕に云はせれば、冥想も一つの快樂であり、地を耕す事も、貧しき者に施す事も亦皆快樂である。吾々はそれを自然の快樂と云つてよい。吾々は未だ淺間しい。だから快樂は屢々罪になる。人間がもつと高尚に、純潔に、健全になれば、快樂は罪とはならない。何處迄も快であり、樂である。それが本當の快樂だ。眞の快樂は何時迄たつても、又何時想ひ出して見ても人の心を爽かにし、明快にし、素朴になし、純良になし、楽しいものになすものでなければならぬ。其處には多少贅澤な氣味が残つてゐるにしても、それは今時の吾々が想ふ事に過ぎない。快樂を咎めるのは自己を咎める事に他ならない。人は自己の淺間しさを咎むべし。自然の恵みである快樂を咎めてはならない。それはD君が云つた通り青空ではない迄も少くとも花である。吾々は花に罪を感じる程の情狂ではない者だ。」

「E君、大いに同感です。」と宮崎が云つた。

「吾輩も同感だ。但し、悲しい哉、吾々は罪なくして女の裾に手をかける事が出来ない。吾々は色情狂でない如く、又風でもない。だから吾々は風の眞を似してはならない。」

一同は笑つた。

「要するにかうだ。清澤が重い調子で云つた。」

「此頃では或る表面上の傾向から、吾々の周囲の多くの人々が快樂と云ふと、何でも一概に罪惡的なものであると概念的に、自ら偽つて認めて居る事は事實だ。先づ善き快樂と、悪しき快樂との別を明かにする事が大事だ。次ぎには快樂と享樂との相違を知る事が大事だ。それを間違へてはいけない。僕等はE君の所謂快樂を斥ける者では決してない。要するに快樂以上のものを眞に知つてゐる人にとつては、それは決して害を及ぼすやうな事はない。併し乍ら享樂と云ふものは、何處迄も快樂の追及であつて、進歩的な性質のないものであるから僕は之れをどうしても是認するわけには往かない。それも解釋のつけやうではあるが。吾々が快樂を怖れるのは此二つが、つい妥協し易く、雷同し易いからだ。又快樂の慾を正しく御するといふ事は實際に於て決して易しい事ではないからだ。寧ろ吾々は人間の五欲が未だ此やうな盲目な状態に在る世に於て、一方禁慾主義の正しい事を認めざるを得ないものだ。清い禁慾主義者の存在は吾々にはよき刺戟劑であり、頼みである。吾々

は彼等と同じ道を通らうとは思はない。もつと調和的な、自由な、自然な、自己の活かし方を吾々は望んでゐる。併し享樂主義とも吾々は素より一致し難い者だ。吾々は劇樂を取らない如く、又阿片をも斥ける。自然から許されて與へられるのと、自分免許でそれに耽るのとは大に違ふ。淫蕩はいけない。たとへ夫婦の間でも。一夫多妻もよくない。人間は一夫一婦で十分過ぎると僕は思ふ。僕等の心臓と、身命と、職分との大事な事を本當に吾等が知つたら、僕等は凡て自墮落の悪い事を知るだらう。人間はそんな事に多くの時間と、精力とを浪費してゐるべきではない。僕は怠け者の所謂眞面目な戀愛にさへも必ずしも好意は持てない。戀愛も起つた以上は十分に深くその神祕を噛みしめるがよい。しかしそれもなるべく早く卒業して、更に先へ進まなくてはならない。本當に心を打ち込んで書物を読む者は、自分が讀んだ頁數の層を計つてなどはゐないものだ。適宜に、殊に勤勞の後には相當の時間を健康に、無邪氣に娛樂に費すのはよい。勤勞があつてこそ快樂が生きるんだ。快樂許り追つてゐる者には快樂は快樂とならず、自然あくとい快樂を段々追つて行かなくてはならない事になる。嚴格に許りも云つてゐられないが、とに角僕等は出来るだけ生き々々、明るく、充實して、健に生活すべきである。併し人類と、此世との全體的向上や、幸福にとつて損害になる事、つまり不經濟な事はしてはならない。凡て不幸の種子を蒔く事は不經濟な事だ。もつと生産的な善い樂みや、嚴肅な喜びや徳の中の幸福を愛するやうにならなくてはならない。僕等はそれに向

つて努力する處に事實生き甲斐が得られるのだ。自分で盲目な生き方をしてゐて、何で此の世の光や、目的が分らう。此世では蟲のいゝといふ事が何よりも悪い事なのだと思つてゐるが、たとへ人生が盲目で、無目的なものであらうと——それが何だといふのだ。——人間は盲目と、無目的の中に生きてゐられるものではない。一切の問題は人間、即ち吾等自身の存在から出發する。人間の本性を見ず、人間と云ふものを考へずに徒らに人生を知らうとするのは生れる事のない子供の着物の寸法を計り、その幸福を問題にするやうなものだ。生れるといふ事實があつて始めてその幸福が問題になるのだ。併し夜は暗いものだからと云つて僕等は灯りを燈さずに闇の中にじつとしてゐやうか。馬は別に行く先きを定めてはゐないものだと云つて、それに乗つた者は只茫然と馬の行くがま、に任せてゐるやうか。よし人類の動搖に目的も、秩序もないと假定した處で、吾々はそれを造らうではないか。吾等がそれを造る事は吾等の自由であり、又吾等はそれを造らさずにはゐられないではないか。吾等の前に在る者が幸福ではないにした處で、吾等此世に生れた者が生き甲斐を求めるのは事實であり、又吾等の生き方次第によつてそれが求め得られる事が事實である以上は、人生に光りがあり、幸福があると云ふ事も亦事實ではないか。何の必要があつて吾等は強てそれを否定しやうとするのか。吾等の生命や運命に交渉のない事を何の爲めに強て問題にするのだ。吾等にとつての問題は、土星や木星の中に住む者の生活の方法や、習慣ではなく、現に此の地上に生れ、又

生きてゐるといふ吾等の事實を幸福なものにする事であれば足りるではないか。何にせよ、否定し得ない事實は聖人や賢者が必ず或る意味で幸福であるといふ事だ。そして凡ての人間がもしそれを理解し得るならば、彼等が幸福である事を信するのに必ず一致すると云ふ事だ。此事實は果して盲目であらうか。——」

「勿論。貴方の云ふ事には賛成だ。だが僕は——」

「何だ。」

「空想と煩惱とに苦んでゐる。書く丈けでは満足が出来ないのだ。僕は正義や平和を愛する。しかし僕は未だ若い。」

「美しい人が欲しいのだらう。」

「僕は野山を歩き廻り、森に入つて木を抱き、太陽に敬禮し、花に接吻する。しかしそれ丈けでは足りない。僕は愛する者に飢ゑてゐる。一人の人間に。」

「誰か宮崎に見つけてやれ。飯を。戀人を。餘りに逢はないのは悪いこつた。餘りに苦しむのは悪いこつた。」Aが云つた。

「そしてもし吾々が結婚を許されれば僕は中庸を獲る。」

「伯爵の娘でもい、かね。」

「金持ちの子は大抵物質に誇りを持つてゐる。「馬鹿」に自信を持つやうに慣らされてゐる。それは醜い。僕は醜くない者がほしい。何と云つても僕は今の貴族には餘り好意は持てない。ケチ臭いやうだが。」

「しかし清澤は伯爵だよ。」

「彼奴は別だ。溝の中に蓮が咲いたやうなものだ。」

「うむ。なるべくなら貴族の娘でない方がいいよ。何方かと云へば僕も貴族よりは平民の方にすとファミリアを感じる。」清澤が云つた。

「君の妹は？」と訊いた。

「性質が餘り面白くないのだ。兄弟の事を悪く云ひ度くはないが。友達を不幸にさせ度くはない。」

「い、よ。今のは冗談だ。」と宮崎が云つた。「僕には知己があれば足りる。戀人などは實はどうでもい、んだ。強ひて欲しくはない。」

「さうだ。さう思つてゐるが、い、よ。すべき事さへしてゐれば、い、よ。運命はなるべく秘密の方が面白い。あんまりほじくると却つてその事に疲れてそれを臺なしにしてしまふものだ。」

「全くだ。僕は只自分に許された正しい安全な道を一心に踏んで行けば、い、よ。その他には何事も望んでゐない。」

「いや、屹度思はぬ音づれがあらうよ。君がそれを全て忘れてゐる時に。それ迄はまあ女の事は餘り考へ過ぎないが、い、ね。體も大事にした方がいい。」

「宮崎の運命の爲めに。幸福の爲めに！」

一同はかう云つて宮崎の爲めに冷えた茶の盃を上げて飲み、そして菓子を食べた。

九

宮崎はどうして清澤やその仲間と知るやうになつたか。

それはかうである。

彼は中學を止める頃から、U氏の著書に牽かれた。U氏の著書には少くとも眞面目な心を牽きつける丈けの誠と、熱とがあつた。U氏は牧師であつた。それが苟も自分の認める光りに向つてゐるものであるならばその高低を問はず自分に觸れて来る何にでも心を牽かれる青年の熱情から、彼はU氏を尊敬してゐた。彼は自分がクリスチャンになれる人間ではないと云ふ事を知つてゐた。又縦令善きクリスチャンになつたとて、自分は満足が獲られない事も知つてゐた。「善良な正しい人間になるよりは、天才になり度い」慾望が彼の内には燃えてゐた。「お前は聖者になつておさまり度いか、帝王になつて血を流し度いか」と訊かれたら彼は「帝王に」と答へたであらう。而も彼はそれがどん

な小さな弱々しいものであつても、善良と、正義との前には直に帽子を脱いで燃えるやうな愛を眼にた、へながら飛びついて行く青年であつた。

「君にUさんを紹介したいのだ。是非。君があの人に逢はないのは嘘だ。」或る友が言つた。

「何故。」

「だつて僕にあの人に會ふ事を初めにす、めたのは君ぢやないか。」

「君はあの人の従順なお弟子になれる質だからね。」

「之は性格の問題ぢやない。生命の問題だ。」

「生命とは何だ。は、まあい、お弟子になれよ。羊君。左様なら。」

併し三日後に友は又彼にす、めた。

「僕はクリスチャンになれる程簡單ではないんだよ。自分を偽つて何が出来る。嘘の上に生命も糞もあるものか。」宮崎が云つた。

「ではUさんも自分を偽つてゐるのか。」

「偽つてゐない處が好きなのさ。併し僕はUさんではないからね。」

「先づ君のそのかたくな、傲慢なエゴイズムを叩き潰すことからはじめなければ君は救はれない。」

「何の爲めに？そんな事を人に云ふ君は傲慢ではないのか。」

「まあ自然に直るだらう。僕も初めにはさうだつた。だから僕の心は始終不安だつた。逢つて見給へ。逢つて損はない。吃度善かつたと思ふ事があるよ。」

「僕は今「解決」を望むではゐない。「やつて見る」事を欲してゐるんだ。今解決を得る事は芽が花薺の眞似して散る事だ。安心して散るよりは不安の中に伸びる方がい。」

「では又逢はう。」

併し彼は逢つてゐた。U氏に逢つて見度くもあつた。U氏と親しく話してゐる夢を見た事もあつた。殊にU氏が文學を愛してゐる點がファミリアに感じられた。U氏は自分の氣持ちを理解してくれるであらう。案外自分は善いクリスチャンになれるかも知れない。自分を偽らずにクリスチャンになれるならなつて見たい。こんな氣もした。

彼は又一方自分の心に刺戟を與へる事を好みもした。いろ／＼の事で自分の心を鞭打ち、いろいろの撞着や、矛盾や、衝突の煩悶や、懊惱の中に自分の心を投げ込んで見度いやうな祕密な要求を青年は一方持つてゐるものである。恰かも若い駿馬が靜かに歩むよりは、汗をかいて奔馳する事を好むやうに、彼は自ら知らずして平安よりは動搖を、單調よりは嵐を好んだ。彼の内に漲つてゐた抗的な眼と、粗野な力とは方の出しやうのない不快な運命と、淋しい平穩の中に自らを持て餘し

て苦しむでゐた。

或る日彼は例の友を訪れた。

「俺は淋しいと云ふよりは苦しい。生活が空虚なのではなく、毒の中にすまむでゐるのだ。俺は自分が悪い事は知つてゐる。そして親父に同情もしてゐる。俺は親父を愛し、憐れむでゐる。併し子供の運命よりは自分の情慾を重んじてゐる親父を苦しめずにはゐられない。親父はその慾情を俺の中に植ゑつけたからだ。俺は父と口を利かず、繼母に笑顔を見せない。可哀相なのは妹だ。俺、父を赦し、そして平和に自分の爲すべき事をして行き度い。併し俺は何をやつてい、のか。俺は混沌としてゐる。いろ／＼のものに情熱があこがれる。俺の生活には統一がなく、中心もない。學校をやめてから殊に落ちつきがなくなつた。徒らに闇の中に俺はあせり、もがいてゐる。此空漠は堪へられない。此混沌は怖ろしい。」

「信仰がないからだ。人間は何かを信ぜずには生きてゐられるものではない。又生きてはならない。」彼は内心友の簡單を輕蔑し乍ら友の元氣が羨ましかつた。

「信ずる位なら正しいものを信じなくてはならない。永久不滅な光りを。君はそれを信じ度いと思はないのか。」

「思ふさ。出来る事なら。併し動機が何より大事だ。」宮崎が答へた。

「さう。併し本當に精進の心を持つてゐると云ふ事、欣求の心が強いと云ふ事は猶大事な事ではなからうかね。欲求が生ぬるで動機が大事だと云つてゐるのは一つの怠惰ではなからうかね。」

「自己に信頼するのもし、と友はつゞけた。しかしそれは自己の内にもつと神が眼覺めてからの事だ。何しろ自己丈では弱過ぎる。頼りがなさ過ぎる。君が本當に眞剣で、自分の危険を覺り、自分を救ひ度いと思ふなら君は頼るべきものを頼らなくてはならないと思ふよ。確乎した、自己以上の無限な力に自分を捧けて其處から生きて行く力を得なければならぬ。僕は本當に君の事を案じてゐるのだ。君が信仰を持つ事は君丈の幸ではない。君の妹さんにとつても幸な事だ。君等を不信と、暗黒の中に置く事は僕にはつらい。實は此間も僕は先生に一寸君の事を話した。僕に先生のお弟子になる事を勧めたのは君で、君は一寸クリステヤンにはなりにくい質だが、一旦信者になつたら僕なぞよりはすつと頼もしい信者になれる質だと云ふ事も。先生はさう云ふ人に逢つて自分の力を試して見度いと云つて居られた。」

「どうもクリステヤンは俺の柄に合ふとは思へない。——だが散歩をしないか。」

「うむ。丁度い、月夜だ。」

二人はいろ／＼の話をし乍ら歩いた。宮崎の心は昂奮してゐた。そして何となく、今迄知らなかつた靜かな柔かい涙が自分の内からこ

み上げて来るのを感じた。そして變に自分の罪をいろ／＼意識して悔い、何かの前に謝罪し度いやうなハムブルな氣持になつた。彼は自分の事を考へず、妹の事を考へてゐた。そして妹の爲めに何かを祈り度い氣がした。自分がクリスチャンになつたら妹はさぞ喜ぶだらう。實際自分は今危険な瀬戸際にゐる。荒みかけてゐる。妹は心配してゐる。どうにかしなくてはならない。彼はU氏に牽かれる事を感じた。

「君の内には君が思つてゐるよりも實はもつとクリスチャンがゐるんだと僕は思ふよ。君はもつと其自分を信じなくてはいけないと思ふよ。」

友は云つた。

宮崎は友の言葉には多くの受け賣りがあると思つた。併し彼はもつと友を批評的に見る心はなかつた。彼は自分の氣持ちのリズムに強く牽かれてゐたので、其の動機の必然と深さが未だ足りない事をはつきり反省する事が出来なくなつてゐた。

多くの青年は鐵重のやうでも未だ輕卒さを持つてゐる。翌朝彼は友と一緒にU氏を尋ねた。

U氏の人物と、其印象とは彼の期待に背かなかつた。只U氏が後で例の友に「大變善き相な人だ」と彼のことを話したのを聞いた時は「U氏は自分を見抜いてゐないナ」と思つた。併しその事は自分に羞恥を感じる事になつても、U氏に對する尊敬を減する事にはならなかつた。彼は實際喜んだ。

新しい力が自分に加へられた事を感じた。そしてそれを明言した譯ではないが、何時の間にかU氏のお弟子の一人として毎日曜の朝缺かさずU氏の家にその講演を聴きに出かけた。

自分は其の後約一年間の彼については餘り書く事を好まない。只凡て「不眞面目なのではないが、必然さの足りない者」が或る事を爲す時に當然起る馬鹿氣た事を彼はやつてゐた。即ち彼の内に在つて闇の中に光りを求め、喘いでゐた迷見は、彼として基督教の中には直にその光りを求め得べからざるものであり、その光りと彼の内の必然との間には未だ餘りに多くの逕庭があり、その求め方は無意味ではなかつた迄も、方角違ひであり、淺慮であり、従つて彼が純粹な信者にならうと欲すれば欲する程彼は自分が信者になれる人間でない事を感じて情けなく思つた事、彼の内には信者になり度い心と、なり度くない心とがあつた事、そして彼の内の純眞な自我と、U氏を通じての基督教との間に横はる渡り難い溝を彼が強て渡らうとすれば彼は常に自分に虚偽を感じなければならなかつた事、従つて又もしそれが必然であつたならば、當然感すべき筈である晴朗な悦びや、感謝や、力を感じる代りに、常に自己を偽つてゐる意識に責められ、そのくせ不快な矛盾と、曖昧と、怯懦と、空虚と、不満とを感じ乍らも家にゐる事が面白くなく、又他に適當な生活の道も見出せないで、何時かは或る時が来るかと云ふ覺束ない希望を抱き乍らする／＼べつたに其處に通ふ事を止め得なかつた事、又勿論其處に通ふ事に依つて彼の心は清くも善くもならず、却つて自分の周圍に對

する優越を感じて不遜になる許りであつた事を書くに止めておかう。

之は凡て、柿は甘いと云ふのでその遊い未熟な實を無理に食はうとするやうなものであり、書く事がないのに強て書かうとするやうなものであつた。併しそのやうな愚を——それは寛大に見れば未だ無理もない事ではあつたが——自らしてゐる時でも「人の眼のうちの塵」には彼は氣がつかないわけには行かなかつた。

「基督はマリアと混同されてゐる。基督は生まやさしくされ過ぎてゐる。基督は愛であると彼等は云ふ。然り基督は愛である。併し何よりも先きに基督は義でなければならぬ。義の後に愛が生きる。昔の教會では基督の義が人々の心を形式的に嚇かし過ぎた。今時ではその愛が人々の心を放縱にし過ぎてゐる。彼等は基督を愛のみと見て、義である事を忘れてゐる。そして彼等は基督を彼等に都合のいゝレベルに引き下げ、悔い改めると否とに拘らず、何者をも赦す恵比壽や、大黒と大差のないものにした。

「汝の敵を愛せよ。」と云ふ言葉を彼等は好む。敵を眞に愛する事が出来ればそれは理想的である。しかし敵の内の悪を愛する事は悪である。何故なら、それは敵を愛する事の本質である。此世の最大の平和や、人類の幸福を犯すものであるからである。敵を愛するとは敵の中の善、正義、運命、基督、神聖なるものを愛する事ではなければならぬ。愚な彼等は此事を考へない。何事も考へない。」

「彼等は又ハムブルと云ふ事を何より大事なクリスチャンの要件であるとしてゐる。何故ならそれは「如才ない」と云ふ事と一致するからである。俗人の武器は謙遜である。それは卑しい利害打算から来る悪、不正との妥協である。正義から逃げ、不正の前に媚び、頭を下げる事である。良心ある者、即ち所謂傲慢なる者にはそれは出来ない。それは羊の假面を被つた悪事であり、冒瀆である。」

彼はかうも感じた。

彼はよく友から不遜の態度を責められた。

「櫻は自分を草であると思ふ事が出来るか。君等は猿の仲間に入つて自分も猿であると思ふ事が出来るか。然り。君等は自分が猿である事を知つてゐる。だから自分を人間だと思ひ得ない丈けの事だ。」宮崎は答へた。

併し彼は人の非を責めてのみゐる事は出来なかつた。もし人が彼に「君は神を信じるか。或は神に相當する者を信じるか。」と訊いたら彼は「否」と答へる事外出来なかつた。——其處に彼の一切の不徹底と虚偽とがあつた。——「然らば何故君は僕等と共に祈るのか。少くとも祈つた眞似をするのか。」と訊かれたら彼は窮するより他はなかつた。「俺は只形丈けで頭を下けてゐるのだ。」ともし彼が答へたとする。「それなら君は何故そんな空々しい眞似をしに態々こんな處に来るのか。」「俺はU氏を尊敬してゐない事はない。そして話が聞き度いから。」「智識慾の爲めに?」しかしU氏は君を信者

だと認めてゐる。それはU氏を欺いてゐる事にはならないか。こんな風に彼はやり込められ得るからである。何たる辱知らずであらう。

「私には祈る事がどうしても出来ないのです。」
と或る時彼はU氏に云つた。

「君は此處に、此室に、神が居給ふのを感じないか。」とU氏が反問した。

彼は黙つた。そんな事は彼には到底感じ得ぬ處であつた。「もう此處へ來る事は止めるより外ない。」と彼は其時思つた。

「汝、人の眼の梁ばかりを氣にする者よ。依然として女に情慾を起す事を恥ぢず、手淫する者よ。醜惡なる偽善者よ。」と彼は日記に書いた。

彼は其處でHと云ふ一人の女に戀を感じかけた。それはある信者の許嫁で、白粉を濃く塗つた、黒眼勝ちの仇つばい快活な女であつた。彼はその女の後に座つてU氏の講演を聞きながら其女の白い背頸を見、情慾を感じた。その女は誰にも愛想がよく、彼にも愛想がよかつた。

彼女には矢張りU氏のお弟子である兄があつた。其兄が或る夕任地へ立つ事になつた。彼はその兄とは餘り交渉はなかつたが、彼女に逢へる事を想つて停車場に送りに行つた。そして多くの見送り人の中に銀杏返しに髪を結つて、赤い櫛を挿してゐる彼女の姿を見た時彼の心は躍つた。彼女は

自分で入場切符を幾枚も買つてそれを彼の處にも持つて來た。そして彼を自分の父に紹介した。

「お、有り難う。」彼は切符を彼女から受けとり乍ら口籠つた。「一人は一寸眼を見交したが、彼女は直ぐ忙し氣に他の人の處へ行つた。

「事によつたら彼女を横取りする事も出来なくはあるまい？ 確にあの人は俺を好いてゐる。」彼は思つた。そして汽車が發車した時、彼女と駆け落ちしてパツカスのやうに春の野山を歩く事を空想さへした。

「U氏の處へ行けば少くとも彼女に逢へる。——無頼漢。」

彼は苦しむと云ふよりは悶へてゐた。そして元氣と云ふよりはやゝ荒んでゐた。

しかし其後彼女には遭へなかつた。

「K君は此頃來ませんか。」

或る時彼はHの許嫁の男の事をかう人に訊いた。

「K君？ あ、一週間許り前に此處で結婚式を舉げて、たしか一昨日大阪へ立つた筈ですよ。」
「夫婦で。」

「え、勿論。」

「丁度い、んだ。」彼は歸りに電車の中で自分にかう云つた。「助かつたのだ。あの人も。お前も。ユ

「ダ！」

彼は途中で電車を飛び降りて五月の麥畑の中を歩いた。

「お、愛する太陽よ。永遠なる帝王の火よ。汝こそわが神である。」

彼は歸つて来てかう書いた。そしてその日の夜中からある小説を書き出した。「恥知らず」と云ふ題で。そして一氣に三十五六枚を書き、二日目には四十枚を書いた。

彼は文學の創作に益々熱中した。未だ五里霧中ではあるが、漸く自分の生きる道を見出した氣がした。「創作こそ吾が信仰の道である。」と彼は書いた。そして傍らニイチエを読み、イブセンを読み、ホイットマンを読み、又オスカー・ワイルドや、ダヌンチオや、デカダンのものも讀んだ。そして彼には餘り善くない友達が出来た。

10

それらの友達の間ではアルツイパーセフの「サニン」が必讀の書のやうに愛讀されてゐた。

宮崎は髪を分け、金もないのに安い香水を買ひ、唯美派の本の上にそれをふりかけて祕かに其香を嗅ぎながら讀んだりしたこともある。そして机の上には獨逸の「ユーゲンド」派の畫いたバッカンの畫を飾つた。その畫は彼がある汚ない夜店で三錢で買つたものである。

彼は女を慕つてゐた。美しい女に道で逢ふと、厚かましくその女を凝視した。

「唯美派、自然派、末流の人間は皆名を辱しめるばかりだ。何と云ふ馬鹿だ。俺は何もあんなものを心から良いと感服してゐたわけではないんだ。云は、あ、云ふものを「好くと云ふ事を好いてゐた」と云ふ位が事實だらう。悪趣味の毒たるや恐るべしだ。何、僕が書いてゐたもの？ 尨大な野心を以て下らないものばかり書いてゐたものさ。だが、馬鹿なりに燃えてはゐたよ。「此脚本を書く。日本の文壇が征服されるのは朝飯前だ。そして翻譯されて、西洋の天才が讀む。西洋から僕に熱誠な稱讚と、懇請的な招待状が来る。勿論十分な旅費を添へて。で、僕は西洋へ乗込む。停車場に着くと、二三日の天才が、彼地の文壇の群衆を引きつけて迎へに来てゐる。直ぐ様それから劇場へ乗り込む。其處では僕のものゝ演つてゐる。大喝采がある。見物人の中には有頂天になつて泣いてゐるものもある。僕は起つて一場の挨拶をする。——」こんな事迄を考へたものさ。ハツ／＼／＼。それでこんなひどい罰が當つたわけだ。」

彼は後になつてから飯島信生にかう云つた。

が、それはとに角其後數箇月の後であつた。宮崎が、清澤やその仲間が「青空」と云ふ雜誌を出し始めてゐる事を知つたのは。

「ふむ。坊つちやんや、小僧が又開つぶしに印刷屋の肺病患者をふやすのか。文藝の神の暢氣さに

も少し呆れて了ふ。」と宮崎は冷笑した。併し内心では或、羨望に似た異様な刺戟、即ち不快を感じた。「あんな玩具仕事に負てゐられるものか。」と思つた。

或る時彼は本屋の店で「青空」を一寸とつて擴げた。

「彼の太陽が東にあるならば彼をして東に行かしめよ。もしそれが西にあるならば彼をして西に行かしめよ。」

吾等はそれ／＼の天性に従ひ、それに依つて自己が最も純粹になりきれ、本氣になりきれ、充實しきれぬ仕事によつて飽く迄も自己を活かし抜くより他に生き往く道を考へる事が出来ない。その事を吾等は命ぜられてゐるか否か、それは未だ未明である。しかし此事は吾等の義務であると云ふよりは權利である。吾等が此權利を活かしきつた時、吾等は吾等の義務に従つた事を、自分にも他人にも首肯させる事が出来るであらう。」

かう書いてゐたのは清澤であつた。

「吾等は自分の最も深き愛と理性とによつて人類の中なる眞、善、美や、神祕に對して信仰を持つ。それ故に吾等は人類に信仰を持ち、従つて人生に信仰を持ち、又藝術に信仰を持つ。

藝術に對する信仰は人類に對する信仰である。此信仰の中に吾等の生命はある。人類は自信なくして存在する事は出来ない。而して藝術は人類の自信である。」

吾等は如何に疑はうとも人間の裡に貴きものが存し、神祕なるもの、美なるもの、存する事を疑ふ事は出来ない。何となればそれは吾等各自の裡に存する事を吾等は感じるからである。こは吾等の感謝であり、悦びであり、力であり、生命である。

併し吾等がそれに觸れ、それを體得して吾等の生命を完からしめ此世にとつて眞に有益なるものとなさんが爲めには、吾等は先づ自己の裡なる未知の貴きもの、深きもの、無限なるものを掘り出し、掘みきらなくてはならない。創作的仕事とは、深き神祕なる意志によつて此神祕の無限を掘り出し、認識して行く事である。隠れたる神祕の主觀を、て不朽なる客觀的實在たらしめる事である。吾等はその爲には彌が上に自己に忠實であり、限りなく誠實でなければならぬ。只誠によつてのみ吾等は生きて行く事が出来る。

吾等は一切の虛無主義に挑戦する。吾等を最も深く悩まし、悲しめる處の畢生の敵は凡ゆる虛無思想の根である。虛無思想が此世に存する限り、而してその事が一方無理ならぬ限り、吾等は眞に幸福である事は出来ない。

此事は只吾等の肯定力によつて、即ち吾等の光輝力によつてのみ克服し能ふ事である。此故に吾等は何はさておき、吾等自らの徳を養ひ、高める事を吾等の第一義務と感ずる。

但し吾等は「空虚なる外面」を蔑む事に依つて「充實せる外面」を蔑む程愚であつてはならない。

凡ては畢竟内容と、動機との如何の問題ではあるが、吾等は如何なる場合にもより一層の深き思慮と、必然とを尊ぶと共に、又より一層の眞摯さと、勇氣と、忠實さとの要せられる活動に向つて常に公明な敬意を拂ふ者でなければならぬ。徳は靜肅であらうとも、活動的なものであり、凡ゆる光明的活動の原動力であるから、それあるが故に吾等の活動的要求が吾等の内面に於けると共に、外面の上にも現れる事を内から強られ、形の上の或る道德的行爲や、活動となる時、吾等はかゝる道德的行動を殊に尊敬するものである。吾等は深き内面的活動の尊さを知ると共に、又充實せる「必然なる外面」の尊さを知つてゐる。人間に個性の別があるやうに、徳にも亦個性の別がある。兩者の美にはそれ／＼の特色があり、而してその特色は互に他を尊重して、助け合ふなければならぬ。しかし乍ら、何れにせよ、吾等に良心があり、而して吾等の徳が不足である限りは吾等は如何なる善き實行の中に在つても常に空虚と、不満足とを免れないと云ふ事實を吾等は本常に知り、信じてゐなければならぬ。

吾等は先づ生きやう。此道に依つて力の及ぶ限りを盡して見やう。自己の裡なる貴きものを活かしきつて見やう。そして自己を美しくし、深くし、偉大になし、威力ある者となさう。吾等は藝術家だ。かくて吾等に追々徳が添ひ來るにつれて吾等は又それ／＼吾等に相應したる未知の運命を呼び寄せ、より高き苦しみと、悦びとを閱するであらう。吾等々未だ幼稚だ、併し此道を信じやう。

此道はミケランジェロを造り、レオナルドを造り、チントレットを造り、レムブランを造り、ゲーテを造り、ユーゴーを造り、ベートヴェンを造り、ドストエフスキー、トルストイ、ロダンを造る道である。そは人類の公道を避けたる日蔭の道には非ずして、實に人間全體が赫灼たる青空に向つて進み昇り行く正々堂々たる大道である。吾等は此右に自然を控へ、左に人類を控へたる自由の公道を歩むと云ふ丈けで氣持ちがよい。幸福でさへある。

「只吾等は飽く迄も進めばよい。信じきつて進めばよい。——」

清澤は更にかう書いてゐた。宮崎は變な氣がした。今迄見た事のない世界を垣間見るやうな氣がした。併しそれは愉快な氣持ちと云ふよりは重苦しい異様な氣持ちであつた。彼はそれを買ふ誘惑を感じた。併し買ふ事は厭であつた。自分がそれを買つた事を自分の仲間知られる事を憚りもした。彼の友は皆「青空」にこだはり乍ら冷笑し、輕蔑しやうとしてゐた。

「ふむ。幸な奴等だ。」彼は本屋の店を出ると獨り言つた。「簡單なお坊つちやん連の甘い理想主義。此位お易い事はない。此位お芽出度い事はない。」

事實彼には清澤の信仰と云ふ言葉が殊に氣に入らなかつた。此苦痛と、不幸との混亂の世で何をさう信仰出来るのだ。此暗黒と感傷との人生に何でさう容易く信仰が出来るのだ。併し信仰と云ふ事はのぼせた心理状態になれば誰にでも出来る事だ。信仰は易く、懷疑は苦しい。迷信は樂だ。リ

アルは苦しい。要するにそれは彼等が實際の人間性や、人生を知らず、又それを如實に知る勇氣のない弱點から来る現實の簡單な理想化であり、自分の逆上を信仰と思ふ甘い自己迷信に過ぎない、と宮崎は思つた。彼は憎惡に近い不快を感じて云つた。「金で冤罪符を購ふ者よ。結構な天國で浮かれてゐるがいゝ！」

併し其處には多少の誇張があつたのである。彼は最初に受けた重苦しい不快を他の意味の不快に知らず、轉じてゐたのである。彼は内心清澤にこだわつてゐた。何故なら彼は「自分と違ふ者は何でも自分より劣つた者、以下の者としか思ひ得ない」一人ではなかつたから。

「日本で俺の對手になる奴は事によると清澤かも知れない。簡單は簡單だが。」
彼は妹にさう云つた。

「さう？ 妾その人のものを讀んで見度いわ。」

「だがわざわざ買つて讀む程の事は無論ないよ。」彼は答へた。

彼は妹が自分よりも清澤を尊敬するやうになりはしないかと怖れた。

翌日彼は又本屋の店に行つた。内心の何處かで感じるある恐怖に似た感じを嘲笑ひながら。そして積んである雜誌の下の方から一と月前の「青空」を引き出した。そして擴げた。其處には清澤の詩があつた。

「君は知らないか

生の悦びと云ふものを知らないか。

人間の美しさ

神祕な善にふれた時の涙ぐむやうな感謝の味を。

もう生命はないと思つたものゝうちに

思ひがけなくもその生命を見出し得た時のうれしさ、有り難さを。

平凡な出來事のうちの

美談を聞いた時の快よさを。

ああ人間は美談を生むものだ！

君はじつと見た事があるか。

子供の眼を。

人間の眼を。

俺にとつて生き甲斐が感じられるには

それを一見した丈けで足りるのだ。

人間の中に人知れずひそむ神の美しさ

世にこれ程神祕にして有り難きものがあらうか。

たとへ此世がどれ程不浄と暗黒に充ちやうともこの小さき天の光りがあちらこちらにまた、く限り

俺は人間の奥底の生命に

かじりつき度い程の信仰をもつ！

物質的には此上なく不幸であつた偉大なる畫家が云つたやうに此少數の光りは千の闇を償つて餘りある！

あ、俺は生を讚美し

此世のよろこびを愛する意志其物だ。

人に知れない處にあらはれる地上の星。

人間が「こんな處に」と思ふやうな處に

さし込む日の光り。

その光りにふれる度毎の祈り度いやうな心持ち

その法悦の瞬間に榮あれ！

その光りに榮あれ！

宮崎はその雑誌を下においた。そして他の雑誌を取つた。しかし其處へ小僧が來た時彼は我れ知らずふつと——彼の財布にとつては決して安いものではなかつた——その「青空」を買つて了つた。

一一

「妾あの人の詩を讀んだわ。あれでも詩なんでせうか。妾にだつてあの位の詩なら作れさうだわ。」
其晩妹はかう云つた。そして兄の淋し氣な顔をじつと見た。

兄は妹の此言葉に満足した。そして其心を疑ひ乍らも其小さい額に接吻してやり度い衝動をさへ感じた。

「あの詩がつまらないのはその幼稚な思想や、現はし方の餘韻のない、つまり詩になつてゐないまづさにあるのぢやないよ。狡猾なセンチメンタリズムにあるんだ。あれはヒロイックな顔をした一種の理想派的センチメンタリズムだ。現實の或る怖ろしさを回避してゐる事を、誇張された卑怯な熱情でうまく自分に胡麻化してゐる。其處が俺と全でちがふ處なんだ。」

宮崎はかう云つた、事實彼はその詩の思想を「幼稚」だなどとは少しも思つてゐなかつたのであるが、且又彼はその爲めに思はず安くない「青空」を買つて了つた程清澤の眞心に打たれ、動かされてゐるのであるが、かう批評して見て自分の批評眼の意外な鋭さに誇りと満足とを感じ、自分自身に

安堵を得たのであつた。彼はつけ足した。

「文學者が皆あんな風になつたらそれは實に危険な事だ。一番悪い傾向だ。墮落だ。」

しかしその晩彼は子供の時の夢を見た。學校の運動場で多勢の子供が遊んでゐた。清澤もその中にゐた。併し宮崎は例の如く一人除け者にされたやうに椎の木の下に一人立つて彼等の仲よく、樂し相に遊ぶのをわびしく眺めてゐた。彼は淋しがると云ふよりは自分で自分の性質に苦しんでゐた。すると突然妹が塀の間から顔を出して「兄さん」と呼んだ。彼は一人除け者にされてゐる自分の姿を妹に見られるのが厭だつたので、それに気がつかないやうに皆の處に飛んで行つて其中に加はらうとした。皆は互に合圖をするやうに眼を見交し乍ら彼を置き去りにした。「畜生！」彼はかう叫び乍ら眼をさました。

夢は現實に影響する事がある。彼は此夢を見た事を一方喜んだ。何故なら彼は此夢の不快によつて自分の淋しさと、清澤達に對する拘泥とを叱咤し乍ら征服慾に燃えて自分の仕事にかゝる事が出来ると思つたからである。そして妹が彼の交友を案じて、彼の古い友である清澤とつき合ふ事を促した時彼は云つた。

「義者は一人で起つ時最も強し——だ。文學は團結や協力で出来る家畜の仕事ではない。獅子の仕事だ。向ふから頭を下けて仲間に入つてくれとでも頼んで來たのならとも角もだ。又俺が多勢の仲間

間の勢力を借りなくちや自分に力を感じられないやうな男ならとも角もだ。そんな必要は全でない。」

「でも、どうして貴方を誘はなかつたのでせうね。「青空」を起す時に。」

「つき合つてゐなかつたからさ。彼奴等も自尊心は持つてゐる。」

彼は妹には自分の大人氣ない敵愾心や、反抗心を見せ度からなかつた。

「でも貴方方は何時かきつとお友達になつてよ。妾そんな氣がしてよ。」妹は又云つた。

「そしてお前が彼奴の細君に、伯爵夫人になるか。なり度いんだらう！」

「まあ、いやな兄様ね！」

「郵便が來たやうだ。見て來てくれ！」

彼は背立たしく起ち上つて云つた。そして妹が郵便を取りに行つた暇に「青空」を引き裂き、それを溝に投げ捨てる爲めに袂の中に入れた。二つの新しい郵便が彼に來てゐた。

一つは青年の字であり、他の一通は細い女の字であつた。

「まあ達筆ね。一寸妾に上書を見せて頂戴な。」妹は云つた。

「お前は字でその人の性質を見抜けると思つてゐるのか。人間の性質は、よく人が云ふやうに、字なんぞで分るもんぢや逆もないよ。狡猾な俗人が素朴らしく慥と不器用にかしこまつた字を書く事

もあるし、非凡な善人で随分達筆な者もある。」

女から手紙を受けとつた事は彼には之が最初ではなかつた。が、最初に手紙を寄來した女は西洋の封筒にペンで細々と月並な文句を並べてゐたのが、餘り好い感じを彼に與へなかつた上に、その「大熊勝子」と云ふ名前に彼はガツカリした。大熊は大隈よりも無邪氣であるが、戀人の名としては同じく不向きである。その女は最初には彼の作に依つて彼を尊敬してゐると云ひ、二度目には彼を戀してゐると云ひ、三度目には自分の寫眞を入れて寄來した。そして二度目迄は未だ不満乍ら持ち堪へられてゐた幻覺イラジヨシは之に依つてすっかり水の泡となつた。

「矢張り名前とそつくりだ。」

その時彼はそう云つてその寫眞を妹に見せた。

「でも兄様の處に手紙を寄來した點丈は感心だわね。」

「世の中は廣い。俺のやうな貧乏書生に眼をつける辭典な女も偶まにはゐるんだ。バルザックを扶けてゐた戀人で、ハンスカと云ふ金持ちの女がある。五萬圓位の持參金を持つて俺のハンスカにならうと思つてくれる健氣な美人が出て來る事を俺は夢に見た事がある。」

「兄さんがバルザックになりさへすりや本當に出て來るかも知れないわ。」

「さう云ふ女が出て來さへすれや俺もバルザック位にはなつてやるんだが。」

貧しい兄妹は笑つた。

併し今此新しい手紙をうけとつた時彼は只その字を見た丈で嘗て感じた事のないある異様な感動を心臓に感じ、そしてその名を見た時は彼の顔は緒くほてつてゐた。

「あら、何か落ちてよ。爲替らしいわ。」妹が云つた。

「彼方へ行つておいで！ だが見せろ。」

それは二十圓の爲替であつた。

「まあ、本當にハンスカだわね。」

「見ろ！ だが彼方へ行つてゐろ。」

彼は青年の手紙を封も切らずに机の上に放つたまゝ、表へ飛び出した。そして五六丁來ると電車に飛び乗つた。何の爲めに家を飛び出したのか自分が何をし、何をしやうとしてゐるのか、自分でも分らなかつた。只自分が何處に行かうとしてゐるか云ふ事は知つてゐた。胸には不思議な動悸が高く打つてゐた。

「まるで女を釣る爲めに俺は文學をやり、小説を書いてゐるやうだ。そして事實此慌て方はどうだ。」彼はかう思つた。そして此「見共ない色氣違ひ」のやうな自分の心を誰もが知らずにある事をむづ痒ゆく、怪訝に感じた。「誰も知りやしない。何と云ふ不思議な寛大だ。」彼はかう思ひ乍ら少し落ち

ついて又その手紙を何気なく懐から取り出して平氣らしく讀んだ。

「思ひがけなく貴方の「恥知らず」を雜誌で拜見して驚き、驚き、又おなつかしく思ひました。ど、
して妾が突然にあれを讀んで驚かずに居られませう。妾にはよく分りました。あの且と云ふのは誰
の事か——。かう云つては生意氣とお思ひになるでせうけれど、貴方のU先生に對するお心持ちや、
基督教に對するお心持ちはあの頃の妾の氣持ちその物でした。まるで自分の事を書かれてゐるやう
な氣さへして怖ろしくなつた程ですの。妾にだつて彼處に来る人達の中で、貴方丈けは一人毛色が變
つてゐらつしやん事、自づと異彩を放つてゐらつしやる事はちやんと分つて居ましたわ。けれども
まさかあの貴方があの頃そんな事を考へたり、あんな事を感じてゐらしたり、又あゝ云ふ小説を
お書きになる方だと云ふ事はどうして妾に察し得られたでせう。女の心位不思議な探り難いものは
ない。」とよく男の人は云ひますが、併し女から云へば又男の心位秘密で探り難いものはありません。
一見して見抜ける事もありますけれど。

とに角妾はあの小説を讀んだ晩は一睡も出来なかつたと云ふ事を貴方に告白致しますわ。

勿論貴方はお笑ひになるでせう。あんな小説は皆作り物だ。自分は只小説を面白くする爲めに一
寸あの且と云ふ女に興味を持つたやうに書いた迄だ。それを本當に取られては困る、と。え、妾
にもよく分つてゐます。小説家にとつて事實は只心の中の事實を現す爲めの材料に過ぎないといふ

事に。だから妾は素より貴方のお書きになつた事を或る點より以上は本當だとは思つてゐません。
あれは只小説です。藝術です。それで妾もその藝術を面白く、拜見した丈けですの。

只U先生の處での事が書かれ、善き信者になり得ない正直な告白が書かれ、又妾に似た女がモデ
ルにされてゐる處に妾はあの當時を偲び、S停車場でのあの晩の光景や、「赤い櫛をさして貴方に入
場切符を渡した」快活な人妻の姿を想ひ、あの顔色のよくない、小さい眼の光つた、人づきの悪い
青年の姿を思ひ、罪深い自分を顧みたりしたものですから、舊知のおなつかしさを以て一寸こんな
お便りをし度くなつたのです。實はあの時貴方に切符をお渡し、たと云ふ事の外には殆ど一度も口
を利いた事もない妾が厚かましくこんな舊知のやうな顔をする事をお許し下さい。併し貴方だつて
「人妻になつてゐる女」の事を随分厚かましくお書きになつたではありませんか。だから貴方は妾の
事を書き、妾を驚かしなすつた罰としては非此爲替をとつておいて下さらなくてははいけません。嘘
ばかり吐いて來た妾は、そして今猶それを止める事の出来ない弱い女の妾は、正直と、誠に對し
て罪亡ぼしのお賽錢を上げ度くなるのです。貴方の本代の足しにでもなれば妾は幸です。

妾は或る事情があつて今は當地の實家に戻つてゐますが、近い中に又大阪に歸ります。何卒お返
事を下さらないやうに。貴方にはあの停車場でお目にかつたのが飽氣ないお別れでしたのね。で
は御成功を祈ります。左様なら

官崎様

一一

モデルの女より

官崎は生れて初めて恐怖を感じたやうであつた。彼は電車の中でおののき、両手に齋汗が滲み出るのを感じた。併しその恐怖、その不安、その戦慄ほど甘く、魅惑的で、彼を牽きつけ、囚へるものも亦なかつた。それは全て燃ゆる事を欲してゐた火に油を注いだやうなものであつた。

彼は電車を降りた。何の爲めにそんな處で降りたのか分らなかつた。

外はもう灯りが彼方此方の店に點き始めてゐた。官崎はその薄闇の中に暫くつくねんと立つて、ぶる／＼と體を顫はしてゐたが、又歩き出した。そしてとある本屋の店先に立ち止まつた。すると突然にある騒ぎが彼を驚かした。一人の小僧が十五六になる蒼い顔をした貧しい少年の懷を掴まへ乍ら荒々しく其處へ引きすつて來た。

「此野郎ですよ。」と小僧は不安な凱歌を奏するやうに云つた。そして自分が不安なので猶ほ少年の罪を周圍の人々に訴へやうとする如く人の顔を媚びるやうな眼で見廻はし乍ら「こんな本を盗みやつて！おまけに泥だらけにして丁ひやつた。」かう云つてその泥だらけの本を客に見せ、そして

その少年を亭主の方に突きやつた。

少年はよろけて亭主にぶつかつた。亭主はいきなりその少年の頭をビシヤリと毆つた。そして怖ろしい眼で少年を一睨みすると、直ぐ又他の客の方を見て笑つた。

「まあ、仕方がねえや。家へ行つて金を持つて來い。大急ぎでだぞ。其本と、帽子と袴とは置いて行くんだ。預つておいてやる。」

それはある教科書であつた。

少年はよくかう云ふ場合にヒケ目のある方がするやうに、早速或る窮した智慧を搾つた。そして自分が本を盗んだ者であると云ふ事を店先きを集まつてゐる人々に知られないやうに、如何にも不自然な快活な聲を出して亭主と、調子を合はせ、亭主に嘔罵られ、叱られてゐるのではなく、會話をしてゐるのだと人々に見せやうとして、殊更打ちとけた談笑らしい芝居のうちにその窮した一場を胡麻化さうとした。併し彼が如何に臆病な少年であり、そして内心ではいかに自分の罪を悔い、おびへてゐるか云ふ事はその蒼ざめたいた／＼しい顔のうちによく現はれてゐた。

「え、直きです。直ぐ其處ですから……」

彼は着物をはたき乍ら調子よくかう云つて出て行かうとした。と、其時一人の客が奥の方から出て來て、軽くその少年の肩をたいた。

「待ち給へ。」

少年はギクリとして其客の顔を見た。その人は背が高く、少年と同じやうに蒼い顔をしてゐた。併しその顔を見ると少年は何と云ふ事なしに或る安堵を胸に感じたらしかつた。

「此本はいくら？」その客は低い聲で亭主に訊いた。

「六十五錢です。へえ、なに、よくこんな事をする小僧があるんで。」

客は本の棚を見乍ら何氣なく亭主と話しをしてゐるので傍から見ると、彼等が話しをしてゐる事は一寸分らなかつた。

「い、よ。／＼。家へ歸らなかつたつて。」客は又少年の顔を一寸見て云つた。そして何時の間にか金を出してそつと亭主に渡してゐた。

「僕が買つて此子にやつたんだ。もう何も云ふ事はない。」客はジロツと亭主の顔を見て低い力のあつた聲でドモリ乍らかう云つた。亭主は少し呆氣に取られてゐた。しかし此客の言葉には變に抵抗しにくく感じたやうに黙つてゐた。凡て之等の事は外から見るとは全で分らないやうにこつそりと、小さく敏活に行はれた。

そして亭主が「ふん、ちや持つて行きな。罰當りめ。味をしめやがつちやいけねえぜ。」かう云ひ乍ら、その本と、帽子と、袴とをその少年に投げてやつた時にはもう例の客の姿は其店には見えなかつた。

つた。

宮崎は其處を去つた。五六丁歩いてゐる中に何故か自分が無頼漢だと云ふやうな氣がしてならなかつた。

「お前は何をしてゐるのだ。」何者かからかう云つて睨められてゐるやうな氣がした。

彼はとある横丁を曲つて暗い道に入つた。彼は前を見ず、下許りを見てコツ／＼と歩いた。全身は鐵のやうに冷たく、堅くなつてゐた。ふと頭を上げた時、其處の門燈は久島と書いた標札を照してゐた。丁度或家に無心に行く者が其家その物から一種の壓迫を感じるやうに、宮崎は今此久島と云ふ大きな邸宅から一種の壓迫を感じた。其處は森嚴にして、犯すべからず、近寄るべからず、「彼女」が住むには相應はしいが、自分には足を踏み込む事の許されてゐない「人格的に生ける場所」のやうに彼には思はれた。

「丁度い、。俺はどうせ入りはしないのだ。」

彼はかう思つたが、其處を去らうとして、又戻り、その家の前を行つたり、來たりした。彼が四度目にその門の前を通つた時、一人の男が大股に後ろから彼を追い越しながらふつと彼の方に振り向いた。それは先前の本屋の「客」であつた。

宮崎はアツと思はず聲を出した。男は前を向いたが、其聲を聞くと立ち止まり、再び彼の方を振

り向いた。

「宮崎君ではありませんか。」

「さうです、貴方は清澤君でしたね。」

「さうです、暫くでしたね。」

「本當に。——先刻本屋の店で一寸貴方を見かけたが——」

「あ、。——僕も一寸ふむ。——君のものを面白く讀んでゐます。」

清澤はかう話をそらした。

「僕も貴方のものを大變面白く拜見してゐます。」

かう云つた時、宮崎は「大變」と云ふ言葉を遣つた事を悔いた。

「よかつたら其中來玉へな。君に逢ひ度い氣がしてゐたのです。僕の家は此直ぐ先きです。」

「失敬ですが、今之から直ぐ行つてはいけませんか。實は少し譯があつて、僕は落ちつけずゐるんです。」宮崎は暫く黙つてゐた後で苦笑し乍らかう云つた。「實は之から家へ歸つてもどうして、

のか分らないので。家へ歸つてからの落ちつけなさを思ふと怖ろしくて困つてゐた處なんです。」

「是非。いや、話してゐる中にもう來て了つた。之が僕の家です。」

「しかし君は迷惑ではありませんか。まさか迷惑だとも云へないでせうが。」

「迷惑どころが大いに嬉しいのですよ。善い友達を獲る事位僕らに嬉しい事は餘りない。マザーと二人切りで香氣に暮してゐるんです。之からも始終來てくれ給へ。」

「有り難ふ。」

「之は或るもの、引き合はせて俺に戀人を逢はせる代りに、知己を獲させたのだ。」宮崎は或る迷信的感情からかう思つた。

「だが之は一舉兩得になるかも知れない。清澤と再び友達となり、屢々此家に来る間に彼女に行き逢ふ事があるかも知れない。」彼は又思つた。

彼は清澤の明るい二階の書齋に上つた。

「變なものだ。遂々俺は又あれ程拘泥してゐた清澤の友達になつて了つた。而もこれ程簡単に、思ひがけない彼女の引き合はせて。だが之でまあ安全だ。」

宮崎は安泰と、不満とを感じた。併し彼はふとした偶然から清澤と再び解け、かくも無造作にその友となつた事を少しも後悔はせず、却つて非常に喜んでゐた。「矢張り善い奴と云ふものは善いものだ。俺の今迄つき合つてゐた奴等とは少しわけが違ふ。」彼はかう思つた。そして自分が今迄あれ程清澤にこだわり、敵愾心をさへ抱いてゐた愚劣なひがみを自ら笑ひ度い氣がした。

「ひさへんの處へ行くのはもう止めたんですか。」清澤が訊いた。

「どうして君は知つてゐるんです。そんな事を。——始めから行かなかつたやうなものです。あの事については實に氣がヒケてゐるんです。」

「氣がヒケる事はないでせう。あの人は僕も好きです。思想家ではないが、兎に角日本人には珍らしく間拔けな正直さと、自己に對する忠實さを持つてゐます。只もう少し聰明さがあるとなほい、のですね。その爲めに始終無駄骨を折つてゐるやうな氣がしますね。内から燃える熱もあり、眞心もあり、力も十分入つてゐるのですが、それが殆ど沙漠の焼け砂の上に水をかけるやうなやり方なので惜しい氣がしますね。もう少し自分の熱や、力を急所に注いで活かして呉れるとい、のですが、あれでは少し頑冥固陋に近くなつて了ひますからね。」

「僕はあの人の批評をする事は少し氣がヒケるのです。あの人に對する自分の態度に全く自信がないからです。しかし君の云ふ事は當つてゐます。あ、云ふ人は議論には負けないかも知れない。何と云はれても信仰で我ん張ると云へば議論にはならないから。併し議論に勝つ事は出来ませんね。思想で人を屈服させる事が出来ないから。」

「さうです。あ、云ふ人の大きな弱點は云は、人間學、つまり「自然」と云ふものに餘りに通じてゐなすぎる處にある氣がしますね。宗教家にしろ、哲學者にしろ、人間の自然性と云ふものをよく了解してゐない者にはどうも生命はない氣がします。さう云ふ人はいくら熱心でも結局自分一個の信仰で

畢つて了ふより外ない。其點多少なれ、藝術家的でなくてはならない。今後の宗教家は皆一度は自然主義を経過して、卒業しなくてはいけないと僕は思ふ。賢い宗教家は昔から皆さうでした。其處へ行くとトルストイなどは本當に偉いものです。何の點から押しても根が永遠的な深さに達してゐるので動かす事が出来ませんからね。本當の宗教家は自然主義者よりも一層深い自然の裡に生きてゐなくてはならない。そして其處に自然主義者よりも遙に高い自由と幸福とがなくてはならない。彼は只信仰が強い丈けでは足りない。矢張り大思想家でなくてはね。信仰の生れ、信仰の生きる動機が彌が上に深く、人間的でなくてはね。」

「さうです。全くです。」

「が、兎に角あ、云ふ火を持つてゐる人は日本には必要ですよ。君はUさんの處に行く事をもう断つたのですか。」

「實は氣にしてゐる乍ら未だそれをしないのです。手紙を書かうと思ふのですが、どうも背ろの扉を閉めるよりは前の扉を開けて行く事に忙しいので。ズボラにしてゐるわけではないのですが。」

二人は食事をした。宮崎は腹が減つてゐた。しかし何となく心が昂ぶり、感情が激してゐてやつと二杯をかへた丈けであつた。

「全く僕は自分に不必要な事をやつてゐたんです。何と云ふ僕は馬鹿だつたのでせう。宮崎は云つ

「無理はありません。殊に今迄の日本では。雞の雛には『オウ、トライアリス、エンレ、ユラ試みと錯誤の法則』と云ふ時代があつて、只本能的に嘴で地面を矢鱈に突つつくんです。そして十度塵や砂を突つつく中に一度本物の餌に突つつき當てるんです。つまり九度は不必要な努力をするわけです。併し其中に慣れ来ると、餌丈けを見分けて突つつくやうになると云ふ話です。僕らも初めには此『試みと錯誤の法則』を経なければならぬのです。」

「そして僕はやつと文藝と云ふ餌に突つつき當てたのです。文藝も苦しいものですね。併し文藝をやるやうになつて僕はやつと自分の家を見つけたやうな気がします。家と云ふよりは生命の糧です。餌です。僕には實の母親がない。しかし母親は文藝の仕事を通して僕を育て、呉れます。文藝がなかつたら僕は氣違ひになるか、餓死をしてさうせう。」

「まつたく日本の精神界は餓死をしか、つてゐますね。何 云ふ生き／＼さのない事でせう。だが僕らは幸にして其食を見出す道を知つてゐる。僕らはどん／＼自分でそれを食つて力強く育つて行けばいいんだ。それより他に人の内部と交渉し、善き種子を蒔く道はないのですから。さうすればだん／＼心ある者が自づと眼を覺して引き上げられて來ます。」

「現に君は僕を引き上げてくれてゐる。僕は逢ふべき者に逢つた氣がする。之れからは僕は二倍の

力と自信をもつて仕事をして行くでせう。僕を離れずゐてくれ玉へ。」

「君が離れなければ僕は離れない。自己に對する信仰が必要です。藝術や、人生に對する信仰と同じに自己に對する信仰が實に必要です。此事は僕は君に向つて殊に云ひ度いのです。吾々の内部には天才がゐる事をお互に信じませう。僕らは實に馬鹿だ。開けなくともい、扉ばかりを開けて、開けるべき扉を開ける勇氣と、自信と、根氣とがないのだ。僕らが自分の内の最も祕密にして、最も目前にある扉を開けて見玉へ。其處には驚くべき天才が眠つてゐるのだ。僕等は其獨自な天才を眠らせておいて、他の通俗なもの許りを起してゐるんだ。僕らはその事の馬鹿をよく知つてゐる。而も猶ほ馬鹿を脱し切れずゐるんだ！もつ／＼自分になりきる豪膽を持たう。僕らは立派な寶を抱き乍ら眠つてゐる。そして自分は何の寶も持たないぞとこぼしてゐる！だが何を此世で怖れ、憚る事があるんだ！僕らは確に不正な事をしてゐるんだやない。そして僕らは自分が今迄出したよりも、又自分が思つてゐるよりも百倍も貴い寶と、大きな力とを持つてゐるんだ。それは迷信ぢやない。正直な『自然』のお告げだ。それで立派な仕事が出来ない筈があるものか！而も僕らはそれを出さず自分の内に縮込め、葬らうとしてゐるんだ！本當だよ。僕らはやらないのだ。や、らうとしないのだ。出来ないのぢやない！」

清澤は興奮の餘り起つて室の中を歩き廻り、嗚喘を痙瘳的に顛はせ乍ら叫ぶやうにかう云つた。

併し宮崎の顔を再び見た時にはもうほんのりとした趣味を顔に漂はせ乍らほ、笑んでゐた。

「僕は君の言葉を生涯忘れない。宮崎は答へた。君の云つた言葉は簡單だが、しかし本當の力がある。僕は今迄其健全な力を出さうとしてはどうも純粹になり切れずに、却つて荒み勝ちでした。今でも僕はやゝもすれば荒むのです。僕は不純です。餘りに濁つてゐます。」

「自分を肯定する事も、自分に誇りを持つ事も或る處迄必要です。生きる爲めに。併しそれはより眞剣である爲めでなくてはなりません。」

「君は何故そんな事を云ふのです。宮崎が訊いた。」

「僕は先き走りをし過ぎたかも知れません。併し自分は濁つてゐるとか、矛盾だらけだとか、罪人だとか云ひ乍ら實はそれを天才的な深酷な事のやうに思つて内心得意にしてゐる人がよくあるものですから。いろいろのものがあるのはいゝが、それは一つの中心によつて統一が出来、光明に向つて全人格的に燃える力がなくてはなりません。さうすれば暗黒も一つの美しい陰影となつて光明の爲めに生きて來ます。併し暗黒だけではそれは何處迄もきたない死骸に過ぎません。世の中には別に缺點と云ふ程のものはなく、罪も犯さない、無難な人ではあるが、力がなく、火の氣のない人がゐます。反對に、随分無茶な處があり、弱い處や、キザな處や、醜い處もあるが、それにも拘らず純潔で、眞直で、力強く、内に貴い火が燃えてゐると云ふ質の人もゐます。僕はさう云ふ人が好きです。」

併しさう云ふ人は一步を誤ると困つた者になつて了ひます。元氣なのはいゝがガサツなのはいけません。粗野なものも面白いが、それはガサツから來るのではなく、内の火が有り餘つて思はず外へ破れ出るのではなくてはいけません。一番いけないのは荒むと云ふ事です。荒むと云ふ事は、何よりも怖ろしい事です。僕は自分でつくづくそれを感じてゐる。内から力が湧くのはいゝ。しかし盲目的に本能に驅られるのは危い。荒むと云ふのは凡てが亂れる始めですからね。亂れたら大軍もお仕舞だ。僕もどうかすると荒みかねない。しかし本當に嚴肅になれる人ならまあ大丈夫だが。一番大丈夫な道は謹みの中に力を湧かす事です。自分の精神と精力とを本當に大事にしなくちやいけません。内の生活が何より大事です。」

「僕は自分の中のムラ氣が怖ろしいのです。だが又追々話すとしませう。僕は少し疲れた。」

「はゝ。餘り急に興奮したからね。僕も若いものだから、君と云ふいゝ友を獲た嬉しさについ興奮して鱗舌つて了ひました。始終あんな風でもないのですが、併し本當に僕は嬉しい。僕は君を僕の仲間に紹介し度いのだがどうです。」

「僕には『仲間』はさう必要はないが、さうして僕は少し孤獨的だが、而し君の友達なら逢つて見てもいゝ。明日逢ひませう。」

さうして宮崎は其翌日例の快樂論に花が咲いた處で精澤の仲間に出つたのであつた。

「嬉しいだらう。俺は遂々彼奴の友達になつたよ。」宮崎は妹に云つた。そして自分で思つた。「どうして俺はかう妹に威張るのだらう。何と云ふ見榮坊な兄貴だ。清澤の前ではあんなに壓迫を感じてゐる癖に。」

とに角其後暫くの間、彼は全でそれを決心したかのやうに清澤を訪ねなかつた。のみならず自分が一度不在を喰はせた清澤に葉書一つ出さなかつた。尤も一度彼は清澤に手紙を書きかけた。併し自づと自分が謙遜な調子で書いてゐる事に気がついた時彼はそれで鼻をかんで了つた。

彼は依然とした牽引と、牽引される事に對する反抗とを清澤に感じてゐた。そしてその拘泥に自分で腹を立て乍ら又其事をい、事にもしてゐた。「天才は拘泥家だ。時には馬鹿々々しい程。それで彼は俗人の輩からよく小人と間違へられるのだ。」と云ふやうな考へから。

殊に「青空」の仲間との初めての會合の時の事を考へると彼はひどく不快であつた。氣が弱く、孤獨的で、修養の足りない若者が多勢の人中へ出る時、彼はその壓迫の刺戟からアがつて了ふ結果逆に社交性を現して、人一倍に噪ぐ事がよくある。そして自分の氣に咎めながらも或る逆上させた調子に驅られて、心にもない事迄も喋舌くり、慌て、自分を一座の笑ひ物となし、そして後では又馬鹿

々々しい程我が身に愛想を盡かして苦しむのである。「どうして俺はあ、自分よりも數等劣つた奴等の前で自分を侮辱する癖がある程惨めな腰抜けなのだらう。俺よりも遙に馬鹿な奴が平氣で落ちついてゐるのに。我れ乍ら呆れる許りだ。あ、何と云ふ恥晒らしな出鱈目を俺は饒舌くつた事だ。俺は快樂家で、女がほしいなぞと。大馬鹿者奴！到底此俺が奴等に解らう筈がない。」かうして彼は前よりも一層孤獨的となり、自分を誤解する者が彼等ではなく、寧ろ彼等を誤解する者が自分である事を感じる機會が來なかつたりすると僻むだ、偏屈な人間になつて了ふのであるが、其癖實は至つて人戀しがりやなのである。しかも一方では彼は清澤に愛を感じ、又感心しないわけには往かなかつた。

「大きい人物と云ふものは、人を批評的に見たり、皮肉に觀察してゐると云ふやうな容子を全で持たないものだ。彼の態度は鷹揚で、公明で父のやうに正面から手を擴げて温かく人を迎へる態度である。事實彼は決して人を批評的に見やう杯と云ふコセ／＼した意識を持つてゐない。それにしては彼はもつと善良で、又優しい。そのくせ、實は誰よりも鋭く批評的のものを洞察する。清澤には先天的にさう云ふ大いさがあるらしい。それは俺にはないものだ。尤もそれは彼奴の富裕な境遇が半分以上然らしめたものではあらうが。」

彼は清澤を偶然に訪ねた晩、歸り路にかう感じたのであつた。

もし一人の男性が、多くの女性を愛した後、或る一人の女性に逢つてその最も深い直覺に依り、「お、此人こそ我が運命の眞の、而して唯一の配遇者である！自分は彼女の配遇者たり得る程恵まれてゐる者ではないが。」と正しく感じる如き事があるものとするならば、同じやうな事は又同性間に於ける最初の知己に對しても亦實にあり得べき事である。宮崎は其晩清澤の事を思つて泣いた。彼は自分がHを尋ねつゝあつたのだと云ふ事をも一時は忘れて、眼に感謝の涙を浮べながら暗い道を歩いた。そして其晩はよく眠れなかつた。

「お前はふさいでゐるな

わが愛する妹よ。

俺が戀をしてゐると思ひ、

そしてもうお前を愛しなくなつたのだと思つて

笑へ、笑へ、笑つてくれ

それはお前の思ひちがへだ

俺は戀人をあさつた

そして知己を獲たのだ

お前がかねて俺にのぞんで来てくれたその善き友を獲たのだ

あゝ、今の俺には美しい戀人よりも

却つて此友の方が

どんなにか必要だつたらう

だが俺には戀人があるぢやないか

お前と云ふ！

心配するな

俺は嬉しくつて眠れなかつたのだ

だからお前も喜んで笑へ

わが愛する妹よ！

彼は日記にかう書いた。

一四

清澤と云ふ知己を得ると同時に、彼には今迄の交友が凡べて怖ろしく馬鹿らしく見え、醜く見え、彼等を友として交はつて來た事が自分として實に嘘であつたと云ふやうな氣がした。そしてある友が自分の妹に不眞面目な戀をしてゐる事を今迄笑ひ乍ら黙認してゐた事に憤りをさへ感じた。そ

して其友に絶交状を送つた。

月日は過ぎて夏になつた。木々の新緑はしたゝるやうなみづ／＼しさに體を戦がせ、打ちふるひ、その活き／＼とした幾多の色合ひは相撲を取つて戯れてゐる力強い男女の群のやうに互にもつれ入り組んで充實した重い息を吐き合ひ、天高く笑ひどよめいてゐるもの、やうに見えた。

宮崎は彼の家の近くで、彼と妹とが子供の時の想ひ出から「追剥の塚つば」と名づけてゐた原に來た。そしてその柵を乗り越えた。

「自由だ。自由だ！」彼は叫んだ。「何と云ふ俺達は慘めな囚人共だ。人間の作つたあらゆる律を打ち破れ！凡ての因襲と、道德的概念を蹴り飛ばせ！怯懦なる一切の拘泥を投げ捨てろ！お、自由なる自然よ！自由は力であり、生命だ！その生命こそ俺の神だ！」

彼は原の上に身を投げ倒し、青空を仰いで深い息を吐いた。

其時彼には清澤や、其仲間さへも一種の精神的囚人の如く思はれ、「輕蔑してやり度い哀れな奴等」と思はれた程であつた。

「快樂と享樂とは違ふ。快樂はい、事もあるが凡ての享樂は悪い、と彼奴はイヤに區別をつけ、云つた。それから又快樂慾を正しく御して行く事は實際に於て六ヶしいと彼奴は云つた。宮崎は清澤の言葉を思ひ出して嘲笑的に口の中でかう呟いた。「ふむ、一體自然と云ふものはさうしたものな

のだらうか？正しいと云はれる事は一體人が云ふやうに、そんなに「六ヶしい事許りなのだらうか？否、俺達は一體さう「六ヶしい」と感じる事をしてゐるだらうか？した事があるだらうか？又しやうと欲してゐるだらうか？彼奴の云つた事は畢竟「えらさうな道德的言葉の遊戯」に過ぎなくはないだらうか？それなのに、俺は輕卒にも感心したらしく彼奴の言葉に相槌を打つたのだ。又彼奴は「禁慾主義の正しい事を一方認めざるを得ない」なども云つた。何の爲めに一體そんな無用な理屈をこねてゐるやがるんだ！禁慾主義よ、中世の僧院の石窟の中にでも引つ込んでゐろ！俺はそんなものは知らぬ。知る必要は毫もないのだ。而も此俺の意氣地のない事と來たらどうだ。馬鹿者の前へ出て始終受け身になつてゐて、向ふから働きかけられて許りゐる。そして女のやうにじめ／＼と僻んで苦しむでゐる。何と云ふ情ない話だ。圖々しくならう。あらゆる物に向つてもつと能動的に高飛車に出る自信を持たう。何者をも抑へつけるやうな尊大な態度を守らう。俺にはその資格が十分にあるんだ。いじける位なら死んだ方がいゝ！」

ふと彼は二個の白いすらりとした姿が自分の方に近づいて來るのを見た。彼は荒々しく眼をこすつた。そして「かう云ふ夢のやうな事實もあるのだ。」と思ひ乍ら恍とりとその姿を見てゐた。「妹ではないか？」さうだ。それは彼の妹の道子と、その友とであつた。彼は妹達に自分を見せる爲めに半身を起して「おい！」と呼んだ。「アラ、兄さんよ。」妹は立ち止まつて、は、笑み乍らその友の方

を振り向いた。

「叱られてよ。そんな處へ入つて。」と妹が云つた。「札が立つてるぢやありませんか。」

「態ど入つてやつたんだ。」かう云つて立ち上つた時宮崎は「元氣なのはいいが、ガサツなのはいいけない。」と云つた清澤の言葉を一寸思ひ出した。

「いよく、追剥の原になつて了つたわね。石垣が出来るのよ。」妹の友が云つた。

「本當に憎らしいわ。妾達の大事な樂み場所を盗まれて了つて。妾達許りぢやないわ。誰でも此處を通る者がいい、氣持ちになれるこんな好い景色の處を自分一人で占領して、わざと高い石垣の塀で人に見せないやうに意地悪をして樂む根性を思ふと憎らしいよりも情けなくなつて了ふわ。」

「高い金を出して其景色を見る者と、只で見る者との間には石垣の隔てがなくちや割りが悪いのだらう。矢張り泥棒は本能的に牢屋の中に入る事が好きなんだ。」

彼はもう笑つてゐる妹達の傍に來てゐた。

「知つてゐらして？元山さんを。」妹は兄に訊いた。「兄さんのものを愛讀してゐらつしやるのよ。」宮崎はそれ迄チヨイ／＼顔を合せた事はあるのだが挨拶をするがバツがわるさに互に知らぬ顔をしてゐる者同士が紹介された時のやうに、顔を繕らめ乍ら少し皮肉には、笑むで、一寸頭を下けた。「私達はよく知つてゐますね。」かう云つてゐるやうに宮崎の眼は光つた。

粗の表

「何處へ行くんだ。」

「何處へも行く處なんぞありはしないわ。只ぶら／＼散歩してゐるんだわ。」妹が友の顔を見乍ら答へた。「だつて自家ではあんな狭苦しい處に阿母さんが寝てらつしやるでしょ？阿母さんはい、お天氣だから少し原の方へでも歩いて來てはどうかつて被仰つたのよ。つまりお客間へお通ししたらどうかつてね。でもそのお客間ももうお金持ちのものだわ。元山さんのお宅へ行き度いんですけれど、此方の處でもね、矢つ張り——」

「御病人でもあるのか。」

「さうぢやないのよ。でも——」

妹はその先きを云つてい、か悪いかを訊ねるやうにニツとほ、笑むで、自分よりも三つ齡上の友の顔を見た。

「お饒舌りね。黙つて、頂戴よ。」と友は答へた。

「なにせ？黙つてなくつたつてい、わ。——でもどうしてかう悪い人ばかり多い、んでせうね。」

「なんだ。何がそんなに悪いんだ。」兄が訊いた。

「悪いと云ふより貝分らないのよ。」と友が妹に答へた。

「分らないのは悪いんだわ。」と妹が云つた。「つまり善良でないからそんな分りきつた事が分らない

のだわ。ねえ、兄さん、此方は不幸なのよ。此方の姉さんがOさんと云ふお医者様に嫁いでゐらしやつたのが、一昨年、三人の小さいお子さんを残してお亡くなりになつた後で、Oさんが是非にも此方と再縁をなさり度いと云ふので、——そして此方の親御さんが又切りにそれをお勧めになるんで此方が餘儀なく其方と結婚をなさつたつて事は兄さんにも何時かお話しした事があるでしょ。——處がそのOさんは此方が好きで、是非にもほしいやうな事を云つてうまく此方を後妻に貰つたのは、實は其可哀相なお子さん達の爲めに他の女を繼母に持たせ度くなかつたからだつたのよ。——

「うむ。——」

「勿論、Oさんも此方を滿更嫌ひでもなかつたのでせう。始めにはね。」

「だから別に始めから悪い意志があつてした事ではないのよ。」と友が云つた。

「それは分らないわ。併し何方にしろ放蕩は悪いわ。Oさんの放蕩はそれはひどいので、今では此方はまるで只死んだ姉さんのお子さん達の乳母に過ぎなくなつて了つたのよ。實は此方の姉さんが、あんなに早死をなさつたのも、夫の不身持ちで苦勞をなさり過ぎた爲めらしいの。」

「どうしてそんな事が分らなかつたのかね。」宮崎は云つた。「結婚する前に。」

「そんな事、傍からさう分るもんぢやないわ。おまけにOさんは遠い處にゐらつしやるし、此方だつて始めからOさんをお嫌ひであつたわけぢやないんですものね。買ひ被つてゐらしやつたのですか

ら。」

「それで今お實家へ歸つていらつしやるのか。」

「え、此方は縁縁をなさり度いなのよ。當り前ですわ。こんな侮辱はありませんからね。さうかと云つて此方のお家でそれをお許しになる筈はないのよ。何故つてOさんはお金持ちですし、此方のお家とお医者様同士、いろ／＼な關係がおありになるからなのよ。」

「此方の親御さんは本當の親御さんなのか。」

「——いくら本當の親でもさう云ふ分らない親達もゐるものなのね。不思議な程。世間體の義理やお金の前にはね。」友が妹に云つた。「でも、誰も悪いんぢやありませんわ。つまり皆妾の馬鹿から出た錆なのよ。只妾が馬鹿なのよ。それ丈けですわ！」

「ねえ、兄さん、此方の力になつて上げて頂戴よ。本當に妾他人事ぢやない氣がするんですもの。凡ての女の運命の爲めですわ。でも貴女はお嫌？」

妹は熱誠をこめて笑ひ乍ら、自分の腕を抓るその友の顔をのぞきこんだ。

「馬鹿。俺に何が出来るんだ。考えて見ろ。」宮崎は妹の大膽な言葉に驚いて苦々しく苦笑し乍ら呟鳴つた。そして眞赤な顔をして附け足した。「此奴、馬鹿な事を云ふ奴だな！」

「だつて、兄さん、その話をひどいとは思はなかつて？」

妹はその友と争ひ乍ら猶かう云つた。

「ひどいさ。勿論！——だけど、——あ、何だらう。あの號外は！」

「本當に、あの騒がしい響き方は只事ではないらしいね。何だか怖ろしい聲ぢやありませんか。」

妹の友がかう云つた。

「動員令が下つたのだ！俺は清澤の處へ行く。」

宮崎はかう云ひ乍ら妹達と別れた。

一五

數日は過ぎた。日露戦争は始まつた。

怖るべき戦慄が稻妻のやうに凡ての國民の心臓を貫いた。政治家がその一般の戦慄を「舉國一致」と云ふものだ」と名付けて唆かす時、愚民が容易に自ら瞞かされるのは當然であつた。「舉國一致」「舉國一致」と人々は叫んだ。それは事實に於て舉國一致に近かつた。殆ど大部分の國民は皆此群衆心理の潮に捲き込まれて簡単に主戦論者となり、忠君愛國者となり、敵愾心に燃え、殺伐となり、色々の意味で興奮し、そして荒んだ。

宮崎も素より強いショックをうけた。併し宮崎の運命と此戦争と、従つて此戦争と此小説との間

には離し難い重大な關係があるのであるが、自分が此小説を書く直接の目的は他にあるのであるから、自分は其方面の事實に就いては只表面上の必要の場合以外には立ち入つて書く事を避けやうと思ふ。

或る日の午前であつた。彼は往來で父に逢つた。

「何處へ行らつしやるんです。」と彼は訊いた。

「醫者の處へ。」

「誰が——わかるいのですか。」

「お佐和がわるいからね。——」父は答へた。

お佐和と云ふのは彼の繼母で、妹の實母であつた。

「そんなにですか。」

父の眼は光つた。「お前は彼女がカナリわるい事を知らない程、或はそれを知つてゐる乍ら態と白バラれる程彼女に無情なのか。俺を憎んでゐるのか。」と詰つてゐるやうに。

父の顔を見ると宮崎の胸は急に一杯になつた。しかし黙つてゐた。そして父が行き過ぎやうとした時呼び止めた。

「僕が行つて來ませう。」

實際彼は父と一言二言を交へた時直ぐ之は自分が行く事になると思つたのであるが、一寸父に意地悪をして見度かつたのである。で、始めには「誰が悪いのか」と訊ね、次ぎには父が自分で行かうとする様子を見せる迄黙つてゐたのである。

「さうか、ではお前行つて来てくれるか。」父はかう云つた。

「勿論。——小川さんでしたね。」

「うむ。併し違いな。もつと近くに醫者はなかつたかね。」

「元山さんがあります。あの人は上手なんでせう。」

「では其處へ行つて頼んで来てくれないか。」

親子は分れた。彼は急いだ。しかし二三遍後を返返つて家に戻つて行く父の姿を見た。

「許して下さい。私は貴方をも、あの阿母さんをも愛してゐるんです。しかし私はひねくれてゐるんです。否、それよりももつと悪いんです。僕はあの阿母さんが好きであるくせに、否、實は好きな爲めに、お父さんには態と辛い駄々をこねたくなつたのです。それも實は自分の潔白を衒ふ爲めに！何故かと云へば僕は阿父さんがあの美しい繼母を貰つてくれた事をマセた子供心に感謝した事があるんです。もつと怖ろしい事迄白状すれば、僕はあの阿母さんに情慾を感じて、……夢に見た事さへあるのです。だから僕は自分の純潔を関かす爲めに、阿父さんの不貞節に腹を立て、ゐるや

うな顔をしてゐるのです。そして今僕が醫者の處に行くのは、阿母さんに対する厚意の爲めでもなく、また阿父さんに對する同情の爲め許りでもないのです。僕は何よりもあの娘に逢ひ度くて行くんです。呆れたでせう。——」

かう思つた時、彼は自分のさう云ふ方の性質を——嘗てその友に語つたやうに——父からの遺傳であらう？などとは毫も思ひ得なかつた。只自分丈けの性質のやうに感じた。彼は頭を振り、そして醫者の家に近づいた時白いバラソルをさした「妹の友」が来るのに逢つた。

彼はたじろいた。そして赤面し乍ら眩ぶしさうに眼をこすつた。

「何方へ？」彼は訊いた。

「お家へ上らうかと……道子さんはお家ですの？」彼女は訊いた。

「え、多分。——」

彼は彼女の眼が充血してゐるのを認めた。

「何か——おありになるんですか。」

彼は口の中でモグ／＼かう訊ねた。

「へえ？」彼女は彼の言葉が分らないらしくかう訊いて眼を伏せた。「どちらへ？」

「私ですか。お宅へ上らうと思つたんです。」

「何か御用がおありに……」

「母が病氣なんです。それで……」

「あ……」彼女は當惑した様子を見せた。

「何、い、んです。」と彼は云つた。

「貴女が御迷惑なら……」

「い、え、ちつとも。——それはいけませんわね。随分お悪いんですの？。でも生憎、今父は留守ですわ。——代診ではいけませんでせう？」

「——併し貴女にも何か——事があるんではありませんか。妹は心配してゐました。」

「——でも——阿母様が悪ければ妾、上りませんわ。妾の事なんぞ大した事ではありませんの。」

「大した事でない事はないでせう。——ではかうしませう。始終家へ来る醫者が其處にゐます。其處迄よかつたら」

かう云ひ乍ら彼は唾を嘔み込んだ。そして「不正な事をしない者の平然さ」を狡猾に装つてゐる自分に驚いてブルブルと體を震はした。

「妾、どうせ其處迄参りますの。」

一寸間をおいて彼女はバラソルの中で答へた。彼は赤くなつた。そして二人は二三丁無言のまゝ、

で歩いた。

「此處です。一寸待つてゐて下さい。」

小川と云ふ醫者の家の前で彼はかう云ひ乍ら中へ入ると、直ぐ出て來た。

「之で氣がすんだ。私はもう自由です。」

「貴女は直ぐ歸らなければなりませんか。」

暫くして彼は又かう訊いた。

「え、——でも……」

「歸り度くはないのですか？」

「え、——でも……」

彼は少しのぞき込むやうに彼女の方を見た。二人の眼はカチ合つた。と、彼は或る壓迫にぶつたやうにふと顔をそ向けて頭を振つた。その壓迫は一種失望に似た不快なものであつた。

「此女は俺に氣がある。併しこの女は醜い。俺は此女を戀する事は出來ない。」と彼は先づ思つた。

「厚かましい女だ。此女は純潔でない。だから俺のやうな穢れた男を好くんだ。」と次に思つた。「此女は自暴になつてゐる。それで俺を引つかける事に依つて腹癒せをしようと思つてゐる。」と次に思つた。「事によると、此女も俺に逢ひに家に来るつもりだつたのかも知れない。」

もし自分が——餘り書き度い事ではないが——或る事實を敢て書くならば、純潔とか、清淨とか云ふものに對して相當の尊敬や、愛を持つてゐる者でさへも、或る不淨な動機から、處女よりも、處女でない女を一方好むものである。不淨な情慾は處女と云ふもの、中に存する純潔さから来る「犯し難く手を觸れ難い」抵抗の感じの中よりは、處女ならざる女性の中に遙に多くの親み易さと、「女の魅力とを感じるものである。此女は既に男に依て其神聖を冒され、男の味を知つてゐる者だと云ふ意識は、かゝる暗黒な慾望にとつて、「人間と天使との間のもの」に對するやうな窮屈な羞恥や、「畏るべき魅力」などよりは遙に好ましいのである。何故なら暗黒なる意識は相手のうちに暗黒なる意識がある事を喜ぶものであり、「一度犯されたるものは犯し易い」からである。其時彼等は比較的氣樂にその對象を漬す事を考へて楽しむ事が出来る。だから彼等は云ふ。「處女は女ではない。そんなものは子供の相手だ。」と。

宮崎はさう云ふデカダンの性質を一方持つてゐる男であつた。さうして彼自身は勿論既う童貞ではなかつた。

而して今、以上の印象から「俺は此女をどうにでもする事が出来るだらう。」と云ふ結論に來た時、彼女は數段の階梯を降り下つた低い處から新たな魔力を以て彼を牽きつけた。「結局、此女がかう云ふ風である事は俺には都合がい、んだ。そして其意味に於ては此位の綺麗さが丁度一番びつたりしてゐる。」

此處迄考へると、彼は急にゾゴ／＼と體を震はし、叫び度くなつた。そしてステッキで土を蹴いた。と、女は恰も自分の背中を打たれたやうにおびえて、體を震はした。それが彼にいたゞしい感じを與へた。

「僕は事によると戦争に行かなければならない事になるかも知れないんです。」

彼はかう云つた。そしてうまく胡麻化したと思つた。

「え、？戦争に？」

「さうです。」

「まあ。——」彼女は思はずかう云つたなり、下を向いた。

「もう一遍待つてゐて下さい。一寸です。」

郵便局の前へ來た時彼はかう云つて立ち止つた。そして其中へ入つて行つた。

「僕と何處かへ往く氣はありませんか。」

陰惨な苦笑を浮かべながら彼はかう云つた。

彼女は驚いた様子で彼の方をチラリと見、そして黙つた。

「怖ろし過ぎますか？」

二人の眼は再びカチ合つた。「どうにでもして下さい。妾はもうどうなつたつてい、のです。」彼女の燃えてゐる眼はかう訴へてゐるやうに彼には思はれた。

「でも——」彼女はかう云つて又眼を伏せた。

「僕は貴女を誤らせはしないつもりです。」彼はやがて云つた。

「そんな事、思ひはしません。妾、貴方を知つてゐるつもりです。」

「僕も貴女を知つてゐるつもりです。」

「貴方は怖ろしい方。」

「——上野の停車場は其處にあります、何處へでも貴女の好きな處へ行きませう。さう遠くでなければ、否遠くてもよい。」

「でも——。妾、お金を持つてゐませんの。」

「僕が持つてゐます。今郵便局で、爲替の大金を取つて來たのです。二十圓。」

二人は三度び眼を見交した。そして不安な暗い微笑が二人の口許に微かに浮んだ。

十五分の後二人は高崎行の汽車に乗つてゐた。二人は或る寒さにおののいてゐた。しかし其陶酔の戦慄は二人を豫想以上に嬉しがらせてゐた。新春の空は窓の外に重く曇つてゐた。

「で、貴女はどうするおつもりです。」宮崎はやがて云つた。

「どうするつて……」

彼女が彼の言葉を解せない様子でかう云ひよどんだ時、そのキョトンとした眼にはそれまで彼女の眼に一度も現れる事の出来なかつた或る技巧的表情が浮んだのを彼は認めた。それは彼女が先前よりはすつと落ちついて「腹をすゑた」事を示してゐると彼には思れた。その落ちつきは無氣味であり、多少不快であり、而も魅惑的であつた。彼は頭を振つて、じつと彼女の眼を睨まうとした。と、彼女は眼を下に落し、それから窓の外を眺めた。「あの頸は美しい。」と彼は思った。

「何ですの？先刻被仰つたのは。」彼女は頸を動かさずに訊いた。

「離婚の……いや、つまり貴女の今の生活の事ですよ。」彼は答へた。そしてゾツとした。彼女はブルブルと肩を震はせた。

「妾には分りませんわ。」と彼女は指で硝子に線を描き乍ら口籠つた。

彼は落ちつかうと思つて煙草に火を點けた。

「貴方、離——縁と云ふ事は悪い事でせうか。」

急に彼女は蒼い顔をしてかう訊いた。

「併し止むを得ない場合もあるでせう。——自分の先祖代々からの運と、社會からの運を、自分が未だ眼覚めないうちに否應なしに背負はされた時、そして後でそれが自分の「死」である事に氣がつ

いた時、殊に自分がその死から脱れる事に依つて大きな犠牲者が後に残る憂ひのない時——」

「犠牲が後に残るのでしたら？」

「え？」

「宮崎は蒼くなつた。貴女は……犠牲を持つてゐるのですか。」

「い、え。」

「本統ですか。」

「——。持つかも知れませんが……」

「併し現にお子さんはないのでせう。」

「え……でも……」

宮崎は彼女の腹部を見まいとした。併し見ないわけには行かなかつた。そして少し安心した。

「しかし——人間は自分に重過ぎる不幸の荷を堪へる事は出来ませんよ。それをも堪へると云ふ者は人間の力、人間の弱さを知らないものです。殊に女は……」

「でもそれは罪ではないでせうか。」

「必ずしも罪だとは思ひませんよ。自分よりも百倍も馬鹿力のあるもの、罪を背負ひきれないのでそれを振り落したからつて何で罪な事がありませう。つまり罪とは自分の責任を逃げる事だ。だから自分の責任でない運を逃げるのは罪ではありません。道德家の間違ひは善でない事を凡て悪

だとする事です。死から逃げるのは善でも、悪でもありません。日本能です。生物の権利です。最初へ戻るのです。」

「だつて人間には元へ戻る事は出来ませんわ。たとへ出来てもきつと瘤を伴れてゐます。心にも、體にも。」

「それなら道を變へるのですね。そして自分も生き、あはよくば瘤も共に生かすのですね。そして出来るなら其處で負債を拂ふ事に努めるのですね。何方にしても死ぬ必要はありません。」

「妾はどうしたらいいのでせう。」

「道が開かれたら其處へ行くのですね。——要するに今時では女の方が一般に男よりは離縁の権利を多く持つてゐますよ。」

「貴方は怖ろしい方。」

「今は。併し貴女はさう云ふ意味で怖ろしい男が嫌ひではないでせう。」

「まあ——。貴方は少し——」

「悪魔的だと云ふのですか。え、今は少しさうかも知れませんが。併し貴女にはそれが氣に入らない事もないのでせう。今は。」

「どうせ妾は醜いのです。心も、顔も。」

「なに、僕は貴女の事よりも自分の事を云つたんです。ですが假りに僕が悪魔だとしても僕は善良な悪魔です。怖はがる事はありませんよ。」

此時多勢の出征の軍隊を乗せた汽車が彼等の汽車とすれ違つた。

「ウワー」と云ふ喚き聲が聞こえた。

死に向つての景氣をつけてゐる喚き聲の合唱。それを聞く者の顔は自づと相見交はされて、赤くなつた。其時それらの見交はされた群衆の顔にはグロテスクな、聲のない昂奮の笑ひが浮んだ。次ぎの瞬間にそれらのほてつてゐる顔は自づと俯向いて下を見た。——政事家に依つて「舉國一致の感情」と呼ばれてゐる感激の爲めに。

女は宮崎の顔を見るのを怖れてゐるらしく外を向いてゐた。宮崎は彼女の顔を見た。そしてその眼に露があるのを見た。「此女は俺を愛してゐる。」と彼は思つた。

彼は窓硝子に字を描いてゐる女の手を掴まへた。彼女はおのゝいて、彼の方を見た。併しその手は引かなかつた。一秤時二人は顔を見合した。そして淋しくほゝ笑むだ。彼女は涙の溜つてゐる自分の眼を彼に見せ度がないやうに下を向いた。

彼は女の手を握つた事は前にもあつた。併し「女性」の手を握つた事は之が始めてであつた。不思議な電氣が二人を釘づけにし、二人の全身に傳はつた。二人は物を言ふ口を封ぜられ、身動きをす

る事を抑へられた。只微かに二人の頭腦と、心臓とが働く事が出来た。

「貴女の前に道が開けたとは思ひませんか。」彼は苦笑しながら辛つと訊いた。

「貴方は——戦争に——行らつしやるやうな事はありませんわね。」

「あつたらどうします。」

「妾は——變りませんわ。——でも、さうしたら、妾はどうしませう。」

「大丈夫ですよ。多分。僕はもし戦争へ行つたつて死ぬやうな氣はしません。無論誰だつてさう思つて行くのでせうがね。——尤もたとへ死ぬに定つてゐた處で召集されたら行かないわけに行きませんからね。國民の義務だから。」

「もう止ませう。戦争の話は。」

二人は黙つた。併し彼女は又云つた。

「でも妾は此間迄、こんな氣がしてゐましたの。男の方は幸だ。戦争のやうなものに行けるから……つて。」

「今、貴女は生きてゐなくなつたのですね。」

「妾、道子さんに感謝しきれませんわ。」

「道子は貴女に何とか云ひましたか。僕の事を。」

「兄が机に向つて、一人でつくねんと寝し相にしてゐる姿を見ると妾は胸が一杯になるつて、よく被仰つて、よ。兄は本當に氣の毒な人なの。妾一人では慰めきれない氣がする、なんて。」

「貴女にも同情してゐたのでせう。それで彼奴はあんな風に僕らを紹き介はしたのですね。彼奴は同情に驅られると眼が眩む質だから。そしては後で急に怖ろしくなると、無暗に心配し出しておびえてゐるのです。——何處か僕に似てゐます。」

「本當に。——今日なんぞも貴方のお歸りがお遅いのでさぞ心配してゐらつしやるでせうね。まさか、貴方と妾とがもうこんな處に來てゐるとはお思ひにならないでせうが。——本當に、貴方はこんな處に來てゐらつていゝのでせうか？ 阿母様がお悪いのに。」

「戦争を目前に控へてゐる僕が、そして自分の一生の仕事や、生活の幸福や、平和の凡てと別れなければならぬ事になるらしい僕が、繼母の看病で迄苦しまなければならぬのですか？ 鐵砲の前に身を曝らす前に、少しは人間並に樂む事が許されてゐないのでですか？」

「もう止して下さい。そんな事、云はないで下さい！ 貴方は大丈夫ですわ。屹度、行らつしやりはしませんわ。」

「さうです。——『光りある中光りの中に歩め』だ。御覽なさい、日が照つて來ました。」

汽車は或る狂ひ出した勢ひのやうに走つてゐた。二人が熊谷の停車場に降りた時は午後一時であつた。

荒川堤の櫻はもう八分通り散つてゐた。ゆるやかに厚く流れてゐる川の面は重く光つてゐた。彼はステッキを打ちふり乍ら土手の上を歩いた。そして時々叫んだ。

「相撲を取りませうか？」

彼は子供のやうにこんな事も云つた。

「いらつしやい！ 森の方へ行きませう。僕の愛する女よ。僕は貴女と話したくなつた。貴女のわきに寝ころんで話し度くなつた。貴女の柔かい手をいじり度くなつた。あ、森の中では貴女の手はどんなに白い事だらう。貴女の頭や胸の上にいゝ、鹽梅に日光が緑の間から射して來るだらう。いろ／＼の樹木の新しい生命の芳香が貴女の體をつゝむだらう。その貴女の膝に僕は頭をうづめて哭き度くなつた。そして笑ひ度くなつた。だが、貴女は泳ぎを知つてゐますか？ 一緒に泳ぎませうか？ 誰も見てゐはしない。こんな事を云ふと全て心中に誘ふやうですね。あ、氣の毒な可愛い人よ、矢張り森の方がいゝ。人間は土の上で一番落ちつくやうに出來たものだ。『深林の中天樂洋々たり』と支那

人は云つてゐますよ。あ、僕は幸福だ。貴女はなぜそんな變な顔をしてゐるんだ。」
「こゝにゐませうよ。」彼女は顔を赧くして云つた。「何と云ふ貴方は呑氣な方でせう、怖れる事を知らない方でせう。」

「屹度さう云はれるだらうと思つてゐたんだ。はつは。可哀相な臆病者。貴女には何でも怖ろしく許り見えるんだ。全で怖れる爲めに生れて來たやうに。そして貴女を捨てられた場所から生きられる場所へ連れて行かうとする者の顔迄が貴女には怖ろしく見えるんだ。——そんならこゝにゐませう。——其代り……」

彼はかう云つて彼女の口に唇を當てた。そして十分間許り無言でゐた。

「行きませうか。彼方へ。」女は彼に凭りかゝつて下から熱い息を彼の顔に吐きかけた。「貴方に捨てられたら——どうせ妾は生きてはゐませんわ。」

そして二人は起ち上つて、薄暗い森の方へ行つた。

宮崎の母の病氣は見直した。そして又家の中位では働ける體になつた。宮崎は一寸失望した。彼女を嫌ひであるからではなく、只豫定が外れたと云ふ簡單な感じから。「死ぬる者は死ぬ」と云ふ變な殘酷な感情が彼の本能の一部にあつた。

或る晩道子の手料理で、つゝまやかな全快祝ひが家族の中で催された。道子はそれをせずにはゐられなかつた。宮崎は其處に列するのが氣がひけた。そして彼が丁度箸を取らうとした時、玄關がガラツと開いた、何故ともなく、宮崎はドキツとした。罰が來たのではないかと云ふ氣がした。而も事實、それは區役所からの召集であつた。

翌日、彼は聯隊に取られ、兵士の服を着せられた。一年間が兵營のうちに過された。何千、何萬の生命が名譽の戦死を遂げて行く一年間が。

そして其間に「彼女」は産をした。彼女の名は文子と云つた。

或る初夏の晩、新橋の汐留驛には第△聯隊の全部が集まつた。出征軍の爲めに特に設けられたブラットホームには軍隊と見送りの人々の群が電燈や、提灯や、物狂ほしいさんざめきや、革具の香ひや、酒臭い蒸せ返るやうなのぼせた喧噪のうちにガヤ／＼と渦巻き、入り亂れ、盡めてゐた。人々は此「氣を遠くさせる」狂亂の騒ぎのうちにあつて、自分の意識を失はない爲めに、平常よりも四五倍高い調子で喋り、怒鳴り、動き、笑はなければならなかつた。其處には泣きぬいた女の顔も交つてゐた。併し誰一人其處では泣いてゐる者はなかつた。否、一滴の涙さへ、誰の眼にも

見えなかつた。それとは反對に、人々は對手かまはず話しかけ、笑ひ、快活にはしやいでゐた。「お、兄弟。逢者でゐてくれな！」彼等は互にかう云はむ許りのやうに見えた。そして殺戮し、殺戮されに行く者を送つてゐると云ふ意識や、敵愾心などは全で忘れて了つてゐるかのやうに見えた。或る者は昂奮の餘り互に抱きついてゐた。丁度花を捨てやうとする者は、捨てる前にもう一度強くその香を嗅がうとするのと同じやうに、彼等のうちの無意識な四海同胞的本能や、生に對する愛着に背かざるを得ない前に、彼等は今、嘗て一度も現した事のない程の強さでそれを現し、味はうとしてゐるかのやうに。

要するに送る者も、送られる者も皆一樣に「笑ひ」を貪つてゐた。

併しそれらの深い意識を彼等は意識する事は許されなかつた。又意識する事を逃けた。と云ふのは、彼等の内奥の奥には「怖るべき虚無」が彼等を見つめてゐるらしかつた。彼はその「怪物」を見るのを避ける爲めに、殆ど皆酒に酔つてゐた。で、彼等は自分が殺戮し、殺戮されに行く者であるなどとは微塵も考へない、最も善良で、平和なものであるにも拘らず、それに對して全く無意識にはなりきれない「怪物」の爲めに或る殺伐な空気を此最後の逆上させた親睦の空気の上に漲らせずにはゐられなかつた。即ち「此二度と生きて歸つては來られないかも知れない」場所へ行く時の二つの相反した猛烈な感情が互に調子を高め合つて一種物狂ほしい快活な状態に來る時、彼等は其状

態を「國の爲に勇んで戰場へ赴く勇士の勇ましさ」と云ふ風にしか意識せず、又さうとしか意識しやうとしなかつた。此場合に現れる不思議な親睦の感情を彼等の内にある眼のつぶれた四海同胞的本能や、生に對する愛着の現れであると思ふ事は彼等には思ひも依らぬ事であり、又此上なく恥づべき事であつた。人々はロスケ／＼と云ひながら殺伐な事を云ひ合つては笑つた。併し、群衆の中を勇ましく押しわけて歩く士官達の四尺以上もある、太い軍刀を見ると人々の心はある戦慄を感じないわけには行かなかつた。士官達は又自分の佩いてゐる怖ろしい軍刀が人々に戦慄を感じさせる事に、或る興奮した戦慄と得意とを感じてゐた。

「おつそろしい劍だなあ、見ろ。」

「あれでロスケの首をチョン切るんだ。」

人々は云つた。

「いい女が何處にでもゐらあね。滿州にだつて別嬪はゐるよ。」

「綺麗な寫眞があつたら送つてくれよ。い、か。」

酒臭い兵卒や、士官達はこんな事を云つた。

そして到る處で、大つぴらに、女の話や猥らな話が高聲に聞かれた。治外法權の場所であるやうに。さうだ。彼等は軍歌を唄ひ、酒に酔ふ暇には、出来るだけ猥らな話をし、猥らな事を考へるより

外に氣の紛らしやうはないのだ。

「宮崎兵曹。又面會人だ。」

宮崎は背が高く、一般の人々よりも鼻の上丈け上へ現はれてゐるので彼を群衆のうちに見出すのは容易かつた。清澤や「青空」の仲間の二三人が其處へ導かれた時、彼のわきには彼の父母と、妹と文子とがゐた。宮崎はそれらの人と元氣よく、聲高く話をしてゐるが、清澤を見つけると自分の方からは、笑み乍ら出て来て云つた。

「よく来て呉れたね！」かう云つて宮崎は清澤達と固く手を握つて揺つた。

「行つて来るよ。元氣だから安心して、呉れ給へ。はつは！」

清澤の眼には涙が浮んだ。しかしそれは直ぐ干された。彼は宮崎の顔を見るのを怖れてゐたので、宮崎の方から思ひがけなくかうした調子で話しかけられた事を内心少からず喜びもし、安心もしたのである。そのくせ、彼は何かを云はうとして、何も云ふべき事が見出せないので困つてゐた。

「皆から宜しく。」彼はやつとかう云つた。

「有り難う！生きて歸つて来るよ。多分！ハガキをくれ給へ。」

「君の家の方も安心して、呉れ給へ。留守中の事も。僕が引きうけるから。」

「有り難う。何、家の方は安心だがね。」

宮崎はかう云つたが、清澤を父や、妹に紹介した。

「貴方の阿父さんにはいろ／＼お世話になりました。」彼の父は云つた。

「否。之からチョイ／＼伺はせて頂くかも知れません。」清澤は云つた。

「之が僕の妻だ。君に話したつけな。未だ結婚してから一週間にしかならないがね、僕は凱旋してからゆつくり結婚をしやう、——一夜の同棲もしないうちに此奴を後家にして丁ふやうな事があつてはと思つたものだからね。處がそんな水くさい、縁起の悪い事は云ふもんぢやないと云ふんで、——ハツハツ。とに角宜しく頼むよ。それから之が僕の妹だ。まあ、僕の歸つて来る迄は結婚するなと云つてゐるんだが、どうだか。——君のやうな男が見つかればな。結婚もいゝさ。さうして俺が怪我でもして歸つて來たら養つて呉れるんだ。ハツ／＼／＼！」

「集れ！」

此時號令がかつた。士官達は物凄いい剣を抜いた。喇叭が鳴り、樂隊が響いた。

「左様なら！では、左様なら！」

兵士達はかう喚いてそれ／＼熱い握手をし、抱きつき、そして各々自分の列に馳せ加はつた。そして萬歳々々の叫び聲が耳を聳する許りに響きどよめいてゐる中に兵士達は整列し、「番號」をかけ、そして列車に乗り込んだ。

「左様なら！左様なら！お達者に！萬歳。今夜は飲み明かしだ！俺の事は安心してろ。何、直き歸つてくら。金鶏動章だ。はつは。××に宜しく！皆に宜しく！」

彼方でも、此方でもこんな事を云つた。樂隊は「螢の光り」を奏でた。

「誰だ、あれや？あの、黙つてゐる奴は。」

「あれか。町の醫者だよ。或る大尉が答へた。「何とか、かんと云つて斷つてゐた奴を今日俺が無理に軍醫の服を着せて連れて來たんだ。どうも國の爲めぢや否とも云へぬからな。それで、大將、大いに膨れつ面をしてゐるんだ。ハツハ。」

數分間の後、汽笛は鳴り響いた。そして萬歳々々の叫喚のうちに汽車は動き出した。窓から半身を乗り出して帽子を振り、萬歳を叫んでゐる兵士達の姿はだん／＼闇のうちにかくれて行つた。

後に残つた見送り人達の間には猶ほしばらく昂ぶつた感激のざわめきがつゞいた。併し、彼等の眼には一様に涙があつた。興奮のうちに云ひ知れぬ怖ろしい悲哀と、虛無とがあつた。人々は暫く、つくねんと其處に立つたまゝ、笑ひもせず、語りもせず、動きもせず、幽かな響きの方を見守つた。

清澤も其處に立つてゐた。彼は一種の深い苦しみに押へつけられてゐるやうだつた。と、其時十七八の一人の見知らぬ少年が彼のわきに來た。

「清澤さん。」

彼は其少年を見下ろした。美しい少年の眼は燃えてゐた。

「君は誰だ。」

「飯島です。」

「飯島？」

「え、飯島信生です。」

清澤は頭を捻つた。しかし其少年を想ひ出さうとして考へてゐるのか、他の事を考へてゐるのか分らなかつた。

「僕は貴方よりも六つ許り下の級にゐました。」

「分りました。——誰かを見送りに來たの？」

「叔父が出征したんです。」少年は興奮してゐる様子であつた。「其中伺つてもよござんすか。」

「あゝ、來給へ。」

少年は彼に禮をして群衆の中に紛れ込んだ。清澤は猶ほしばらく其處にぼんやりしてゐた。其少年と會つた事などは全で何事でもなかつたかのやうに。

ふと、彼は宮崎の家族と、妹を想ひ出した。そして歩き出した。彼はさがした。しかしもう「彼等」の姿は見えなかつた。

中

篇

中 篇

或る人々

一四〇

吾々は今この小説の主要人物の中の一人である宮崎の姿を暫く舞臺の前面には見ない事になった。此小説を自分が書く目的は主に東京での寧ろ「平和な」出来事を「楽しみながら」書いて行く事にあるのだから、舞臺の裏——即ち此場合では滿洲の戦地——へ隠れた彼の事については間接に人々の噂や、報知によつてちよいと此話の上に紹介する丈けにしておかうと思ふ。——尤もそれは當分の間ではあるが——でない自分には下らないものを書く事になつて了ふから。

宮崎が出發した数日の後清澤は突然彼の留守宅を尋ねた。それは冷えんとした初夏の夕暮であつた。恰度人の情熱が其熾んな赤熱を過ぎてある冷靜が蘇生つた時程人間の意識が明瞭に、すつきりと秩序立つた理性的活動を始める時はないやうに、夏の焼きつくやうな炎天が漸くその熱を冷却して、あるともなき靜謐な冷やかさが大氣の中に感ぜられそめて來た一刻程萬象がくつきりと浮き出て、嚴かに自分の姿を見せる時は少い。清澤の頭は此時怖ろしくはつきりと冴えてゐた。で、空間のうちに起るとんな些細な現象も、又どんな微妙な事件も自分は見逃さないと云ふやうな氣がし

た。そのくせ、彼は自分のすがくしい胸の中に或る不安がぞこんと蠢いてゐるやうに幾度となく身を顛はせてゐた。「いやに寒くなつて來たからだ。否、俺の内には「幸福の力」が躍つてゐるからだ。」と彼は呟いた。

確かに彼は心中聊かもやましい處がない許りでなく、或る自信——即ち「出来る丈けあの家の人々に力を添へて頼りになつてやり、慰め、勵ましてやるより仕方がない。さうしてやらう。」彼は實際さう思つたのだ。——さへあるもの、やうに落ちついてゐられる事と思つてゐたのであるが、宮崎の家の前に來た時彼は何となく其中に虚心平氣で這入つて行く事が氣がひけた。

彼は二三分其處に立ちすくんで、そのよく讀めないが、彼にはよく讀めてゐる標札を態とらしく眺めながら家の中の「或る聲」に耳を傾けてゐた。家の中は寂そりとしてゐた。ふと彼は我に返つたやうに思ひきつて格千戸を開け、「御免なさい」と呼んだ。

返事はなかつた。再び彼は呼んで見たが矢張り答へはなかつた。彼は一寸胸が安らぐのを感じた。で、又格千戸を締めて外に出やうとした時奥で女の笑ひ聲が聞こえたやうな氣がした。と、彼は全く思ひがけない聲を聞いたやうに驚いて顔を赭らめ、そしては、笑むだ。再び笑ひ聲は聞こえた。その笑ひ聲——夫が戦場に行き、息子が戦場に行き、兄が戦場に行つた留守の家に聞こえる笑ひ聲——は實際彼の豫期しないものであつた。「井戸端にゐるな。」と彼は思つた。或る感謝の情を伴つた

或る人々

一四一

喜びが彼の内に躍り上つて、彼は自分の内の謹しみ深い小心な扉を態と開け放さうとするやうな氣持で再び表に出て、其處から小さい木戸の戸を開けた。

井戸端には二人の女がゐた。一人は小さい子を背負ひながら洗濯をしてゐた。もう一人は、井戸の傍に立つて掬み上げたつるべから其たらいの中に清い新鮮な水をあけてゐた。重たけに息吐いてゐる夕陽が、そでをたくし上げた彼女の赭い健康な腕と、顔と、はだけた胸と、その水との上に照り輝いてゐた。云ふ迄もなく洗濯をしてゐたのは宮崎の妻の文子で、水をあけてゐたのは妹の道子であつた。清澤は這入らうともせず、出やうともせず、數秒の間其處に突つ立つて、茫然と此「立派な」光景に見惚れてゐた。

突然或る後悔の念が彼の内に起つた。で、彼がどうして自分の姿を女達に氣取られずに引つ込めやうかと思案して、そつと足を後ろへ引かうとした時道子は彼を認めた。

「アラッ！」と彼女は叫んで、驚きと、當惑とから大きく彼を睜つたまゝ、着物を直さうともせず、立ちすくんでゐた。「何故貴方はこんな處にだしぬけに這入つていらつしやるんです。そして何故こんな處を無断で御覽になるんです。それは失禮ぢやありませんか？」其眼は、自分の禁園に侵入する者が自分の愛するものであればある程一層厳しくなる純潔な女の憤慨に充ちてゐた。とは云へ其譴責の情は彼女の眼を輝かす程執拗く燃えてゐるものでもなかつた。彼女は只困惑してゐるらしく

ボカンとしてゐた。併もそれは禮を知る男とたじろがせ、恐縮させるには猶ほ充分な威力をもつてゐた。清澤は「其輝ける威力」の前に面喰つた。あわて、「御免なさい」と謝まり度くなつた。

清澤に云はせれば、それは決して彼女が其様に羞らうべき禁制の場面ではなく、却つて一層彼女の自然な、又莊重な、驚くべき美觀なのであるが、彼女がそれを自覺せず、却つて羞じらうのは如何にも當然で、又其處に彼女の深い美がある事が清澤には感ぜられた。少くとも此場合彼女の顔に表はれた一種近寄り難い、莊重な威力はそのだしぬけに侵された羞恥に因る彼女の憤慨から來たものであり、且つその憤慨はそれ自身自分の美に對する彼女の深いたしなみを語るものであると清澤は判断した。が、同時に一層苦しい後悔の情が彼を擽つた。「何と云ふ馬鹿な事を俺はしたのか。殆んど始めての客のくせに、出入りの魚屋か何ぞのやうに、こんな勝手口にズカ／＼入つて來るなんて。何故女關から直ぐ歸つて了はなかつたのだらう。」と、彼は取り返へしのつかない醜行を犯して了つた氣がした。彼は眞赤になつて、とも角も麥藁帽を取らうとしたが、それを取り損つて地に落した。彼はカツとした。併し漸く自分を制してその帽子を拾ひ上げた時には彼の顔は怖ろしい程冷たい表情になつてゐた。そして彼は何時の間にか前掛けて手を拭ひながら自分のわきに來てゐる女を見た。それは文子であつた。

「まあ、ようこそ。お呼びになつたんで△いませうね。」

「え、御返事がなかつたので。——」

清澤は少し皮肉に見える程冷静な表情をし乍ら答へた。

「餘んまり此處で話に實が入つてゐるたものですから。……どなたか呼んでゐらつしやるやうな氣もしたのですけれど。まあどうぞお上り下さいな。」

「お留守ですか。お父さんは。」

「え、一寸家を見に……」

「お引越しになるんですか。」

「分りませんの。でも事に依りましたら……」

かう云つて文子は依然として井戸端に立つてモジ／＼してゐる道子を見やり乍ら意味あり氣に答へた。

「宮崎君からお便りはありましたか。……」かう云ひ乍ら清澤は悪い事を訊いたなと思つた。

「え、今日字品から……明日上船すると云つて來ましたの。でも大層元氣でゐるさうですの。」

清澤は苦しくなつた。自分がそれ程強く氣にしてもゐない事を無神経な、空々しい冷酷な會話に依つて徒らに此悲惨な女を悩まして、罪を犯してゐるやうな氣がした。併し實は此時彼がそれよりもつと拘泥してゐるのは、彼が一寸軽い挨拶をした丈で、文子との會話の間其方に一瞥をさへ投

けなかつた道子の事であつた。事は些細な事からヘンに行き違つた。そして清澤は道子に打ちつけた親し氣な表情を見せる代りにその存在も認めないやうな冷たい無關心な態度を見せなければならなかつた。何故あの女は此方へ來ないのだ。未だあの事をそんなに憤つてゐるのだらうか。その貧乏くさいなりを氣まり悪がつてゐるのだらうか。それとも俺を嫌ひなののだらうか。」と彼は考へてゐた。

一寸わきを通つたものですから、——どうして居らつしやるかと思つてお寄りして見たんです。又上ります。」彼はかう云つて文子に挨拶をし、それから氣がついたやうに一寸道子の方を見て軽く頭を下けた。もう直き父も歸つて來るからと云つて自分を引きとめやうとする文子に送られながら木戸の處に來た時清澤は髪の毛を長く延ばした背の低い一人の男が中をふつと覗いて帽子を振り、それからトゲ／＼しく高笑ひをし乍ら連れの者と向ふへ走つて行くのを見た。清澤は振りむいた。そして顔色を變へてゐる道子の方を文子が氣遣はし氣に見てゐるのを見た。

「何です、あれは。」清澤は文子に訊いた。

「元と宮崎のお友達だつた人達なんださうですけれど、宮崎は絶交して了つたんだ相ですの。デカダンの文士で、ごろつきですわ。」

「門見と云ふ奴でせう。知つてゐます。下等な事の珍らしく好きな奴ですよ。それが女人らしくも

見えるもんで。それが宮崎君が居なくなつたのであゝしてやつて來るのですね。それで……貴女方は此處をお引越しになるんですか。」

「それ許りでもありませんけれど……」文子がほ、笑みながら云ひ盡るやうにかう答へた時、彼女の背の上で赤ん坊が泣き出した。と、文子はさつと顔を赭らめ乍ら「日蔭け者である」其子をあやす事を憚るやうに苦し氣に清澤の顔を偷み見ると、や、安心したらしく體をゆすり、背ろに廻はした手で子供の背をはたいてゐた。清澤は眼をそらしてゐた。彼の心持ちは苦しむと云ふよりもそんな處に居る自分を憎む心持ちであつた。が子供は益々瘖高い聲を張り上げて無遠慮に其母親を困らせてゐた。清澤は逃げるやうにして其處を去つた。そして後ろに「どうぞ又入らして下さいね。清澤さん。妾達はそれは貴方を頼りにして居りますの。ねえ、道子さん」と文子の云ふ聲を聞いた時にはもう往來に出てゐた。

二

「女性を只女性としてほか見られないものは禍なる哉
それらの人には女は性慾の相手以上のものではない
すべての人々よ、男よ

一切の女性を母として見て見よ

母たるべきものとして見て見よ

君等はきつと其處に別なる姿を見るであらう

女のうちに女神のゐる事を見るであらう。

「彼女は母ではない、彼女は處女だ

しかも彼女は母だ

未だ地上の母に非る母だ。

男がその戀人を第二の母と呼ぶのは單なる男の詩情であらうか
神祕なる事實であらうか？

「俺の前に女が立つた。一人で

俺の情はその美にうごいた

しかし俺の心には雲がか、り、俺の顔はおのづと俯向いた

次ぎに俺は彼女がその子を抱くのを見た

俺の心はその神聖に涙ぐむだけだ

俺の心はすがくしくなり、俺は晴天を仰いだ。

「女性の胎には罪の子も宿るだらう

しかし母の胸に抱かれ、ば

それも神のいとし子のやうに見えて来る。

「二人の母親がゐた。

富める母親と貧しき母親とが、

富める母親はその子を膝にのせてキスしてゐたが

その子の爲めにさほど苦勞をしたやうには見えなかつた。

貧しき母親はその子を接吻する事は出来なかつた。

彼女はその子を背負つて働いてゐたから。

しかしその子の爲めに母親としてのあらゆる骨折りと苦勞を経たもの、やうに見えた。

富める母親も美しかつた。

母親らしかつた。

しかし貧しき母親の美しさは更に深かつた。

更に母親らしかつたから。

「彼女のわきに彼女がゐた。

一方は母、一方は處女。

二人の天使。

母は處女よりは更に嵩高に見えた。

處女の方には美しさがよひまさつてゐたから。

併しその神秘は？

何れおとらずだ！

年増の方は中天高く照つてゐる靜かな月のやうだつた。

しかし若い方は今のぼつたばかりのみずくしい満月のやうに

輝き、匂ひ、ほゝゑむでゐた。

「子供を抱いてゐる母親を見ると

俺は人類の姿を思ふ

美しい健康な處女を見ると俺は人類の未來を想ふ

そして俺の心は勇み立つ

祝福されてあれ

二人の天使！

「母性は虐げられてゐる

夫と、子と、姑と、貧窮とから

彼らをさうしたものは誰か

もしそれが汝であるならば、男らよ

彼等を救ひ出し得るものも亦

汝らでなければならぬ。

「男達よ、

儲けな男達よ

僕は衷心から同情をもつて君達に云ふ

僕自身に云ふやうに

決して君等の責任が多過ぎるところぼしてはいけない。

君達には確かにその力があるんだ

偉大なる力が!

君達の前には最大な「解放者」の最大な「名譽」があるんだ!

そして君達はその「名譽」の前には生命をも惜しまない勇者達なのだ

君達はそれを忘れてはいけない!

「我々は淋しがる

自分の力を出せない爲めに

否、力を出さない爲めに

さうして我々はつぶやく

俺には力がない、と。

「だが——俺は一體何處にも出てはならないのか

俺の「書齋」の外には

何たる多くの徳と不徳とが

自己を語り得ずに

垣根の中をうろついてゐることよ。

「到る處に俺は自分の行くべき世界を見る

到る處に俺は自分の開けるべき木戸を見る

俺は其處に行かすには居られない

しかも俺は其處で誰に逢つた?

憐れな他人に

そして其後ろに隠れてゐる馬鹿な啞の自分に。

俺が逢はうとした者はそんな者ではなかつたのだ

人間は確かにもう少し上等なものである筈だ！

立派なものである筈だ！

そして此俺も亦そんな惨めなものではない筈だ！

人間がそんな惨めな哀れむべきものであつたと云ふのは過去の夢であつた時が来てほしい

否、必ず來なければならぬ。

だが俺は先づ誰よりも「あの人」に逢ひたい

あの人とは誰か

彼女か？

知己か？

師か？

誰でもよい！

それが俺の獨立した深い「自己」であるならばとに角俺は先づその人に逢ひ度い！

逢はねばならぬ

戀人に逢つた者は幸だ

併し自己に逢つたものはなほ幸だ

戀人と結婚するものは幸だ

併し眞の自己と結婚するものは猶ほ幸だ

戀人と結婚する事に依つて自己と結婚し

自己と結婚する事に依つて

萬人と、自然と、永遠と、神と結婚する事になつた者こそは

最も幸福だ！

清澤がその感想のうちにこんな事を書いてゐる間に、宮崎の留守宅では文子と、道子との間に下のやうな會話が交はされてゐた。

「妾行つて來るわ。買ひ物に。」文子が云つた。

「一人で？妾をおいて？」と道子が訊いた。

「きつとさう被仰るだらうと思つてゐたのよ。道子さん。妾、——ちゃんと知つて、よ。」

「何を？」

「貴女が淋しがつて苦しむでるらつしやる事をよ。」

「貴女だつてさうぢやありませんか。又誰だつて。」

「そんなに胡魔化さなくつたつていゝわよ。妾に。本當に清澤さんはいゝ方ね。」

「まあ、文子さん。」

「妾に打ち明けて下さいよ。今度は妾が貴女の爲めに盡す番ぢやありませんか。貴女はあの方が貴女をお嫌ひだと思つてらつしやるんでしょ？」

「だつて―。それは本當ですもの。」

「そしてあの方は誰か他に好きな人があると思つて？」文子は笑ひ乍ら訊いた。

「えゝ。」

「その人はね。もしかしたら妾ぢやなくつて？」

「どうして？」

「あの方は此間妾にばかり話しかけたからよ。さうでしょ？」

「どうだか知らないわ。でも何しろ妾はお嫌ひよ。」

「貴女がちゃんとして綺麗にしてゐらつしやる處を御覽にならなかつたから？」

「そんな事はないわ。すつぽんがどんななりをしたつて矢張りすつぽんだわ。」

「いゝみやさん。戀する者は嘘ばかりつく。」つて云ふぢやありませんか。尤もその嘘の間に實は却つて眞實が光つてゐるのですけれどもね。それでも貴女は妾がかう云へば怒るか笑ふかなさるでしよ？貴女はあの方の身分の事でも考へてゐるの？でなければあの方がさう云ふ物質上の事でも問題にしてゐるとでも。つて云つたら。」

「まさか。としか云へないぢやありませんか。そんな馬鹿な事。文子さん。」

「本當にね。馬鹿な事のくせに少くとも妾達女には決して馬鹿にならない事だからなほ馬鹿々々しいんだわ。だけと妾、本當の事を云つて見ませうか。怒つてはいやよ。貴女は何故あの時あんなにひがむでぶすつ面をしてゐらしたか、そしてあれから後すつと苦しみ通してゐらつしやるか、妾にはちやんと分つて、よ。貴女はね、あの時妾と笑つてゐらしたでしよ？阿母さんの事で。そして清澤さんに貴女の大きな笑ひ聲を聞かれたとお思ひになつたんでしよ？それが大きな原因よ。さうでしよ？」

「まあどうして？妾が笑つたのが何故いけないの？」

「そら、又貴女はごまかしてらつしやるわね。」と文子は又笑ひ出した。「だつて、兄さんが戦争へ行つて、妾は妾でこんな風ですし、つまり此家では笑ひ聲なんぞ聞かれる筈はないと思つて清澤さんは來たのでしよ？處が思ひがけなくも貴女の珍らしい笑ひ聲が聞こえたのよ。それで貴女はあの人に

暢氣な、不人情な、いやな感じを與へたとお思ひになつたのでしょ？何方かと云へば貴女は普段の陰氣な、淋しい、謹慎した様をあの人に見せ度かつたのよ。清澤さんから見れば「人間はどんな運命の中で、も笑へるものだ。」と云ふ事があの時は殊に有り難い程嬉しかつたのでつい裏の木戸迄あけ入つて入らつしやる氣になつたのかも知れないのに！尤もそれは今妾が思ひついた想像よ。だつて必しもさうでなかつたとは云へないわ。あの人は普通の人ではないんですもの。處が貴女はあの時あんな風をしてらしたつたりしたもので猶ほへんに邪推して、ひがんでお了ひになつたのよ。そしてあの方がすつかり貴女に愛想をつかしたものと定め込んで了つたのよ。さうでしょ？妾の觀察は當つたでしょ？中々鋭いでしょ？は、は、は、。處が實は鋭くもなんともないのよ。だつてそれは妾自身もあの時感じた事なんですもの。妾だつて今こんなに笑つたりなんぞするのは妾の胸の中をよく知つてゐる貴女の前だからよ。他の人の前だつたら妾は暖にも笑ひ聲なんぞ出しはしないわ。だつて妾がそんなに暢氣でゐるものと思はれちや妾は堪りませんもの！只貴女つて云ふ處女は或る譯からあの時妾よりも猶ほ強くそれをお感じになつたのよ。それで貴女があんまりつんとしてゐらつしやるんであの人の氣持ちもこじれて了つたんだわ。けれどあの人が貴女を愛してゐるつて事はあの時あの人が妾にばかり話しかけてゐらしたつて事で簡単に證明出来るわ。貴女の方を一寸も向けなかつたあの固苦しいこだわり方が證明してゐるわ。それなのに貴女つてお馬鹿さんはそれであの

人をすつかり恨んでお了ひになつた。口惜しい、憎くらしい、と思つてゐらつしやる。さうしては只自分を苦しめて悶へてゐらつしやる。丁度い、わ。あの人もきつと自分が貴女に嫌はれてゐるものと思ひ込んで反抗的な詩でも作つて自分を慰めて居る事でせうからね。公平なものだわ。」
 「さうよ。妾は馬鹿よ。貴女はお利口よ。」と顔をほてらしながら道子はつつと文子に寄り添つてその手を握つた。「本當に貴女は鋭いわ。天才的だわ。只あの時一番強く妾が感じた事に貴女は當らなかつた丈で、その他の點には貴女は本當に鋭くお當てになつたわ。でも貴女が周りの點を大抵當て、下すつたので妾には漸く中心の取り残された要點が分つて來たわ。その要點と云ふのわね、何う云つたらいいでせう。つまり妾はあの時程自分を醜いと思つた事は生れて始めてだつたと云ふ事よ。いえ、それは着物や身装のせいぢやないのよ。妾と云ふ人間全體をさう感じたのよ。穴にも入り度い程妾はそれを感じたのよ。さうして妾は凡そ誰からも愛される資格のない、世にも見すばらしい、やくざものだつて事を骨の髄迄感じたのよ。だけどそんな事云つてはならない事だし、又云ひ度くもない事だわ。只確かな事實はあの人が妾の事なんぞ塵程にも眼中においてはゐらつしやらないと云ふ事よ。又眼中において下すつては妾は自分の身が縮こまる程苦しいと云ふ事よ。妾に嫌はれてゐるとあの人が思ふなんて、まあそんな馬鹿な事が！又そんな事を妾が望んでゐると貴女は思つて？妾はあの人の事なんぞ思ひはしないわ。決して！だからもう止ませうこんな俗っぽい小説み

度いな話は。口に出すのも何だか身の毛が戦立つやうだわ。お、いやだ！貴女は又笑つてゐらつしやるのね。では今度は妾が貴女に訊くわ。一體どうして貴女のやうな利口な方があんな馬鹿らしい運命に逢つて、あんな不幸な目にお逢ひになつたかを。妾にはそれが不思議でならないのよ。」

「本常に不思議だわね。妾にだつて不思議でならないわ。」文子はほ、笑みながら答へた。

「妾の心持ちや運命の経歴を本常に解る人が書いたらそれこそすばらしい長篇小説が出来る事だせう。けれどそんな話を妾は貴女に聞かせ度くはないわ。何故と云つて——、凡ての男の女性観は大抵その細君觀に他ならない。殊にその男が貞淑で、その細君を愛する事が深ければ深い程その男の女性観はその細君觀に依つて来る、益々その細君を標準として女性観を造るやうになる。だからその人の女性観を見れば、大抵その人の細君の様子が分るつて云つた人があるわね。もし此警句が穿つてゐるとすれば逆にかう云ふ事も云へるわけだわね。その女の男性観はとりも直さずその亭主觀に依るつて云ふ事も。だから妾は矢張り前の結婚に依つて自分をだしぬいた男つて云ふものに絶望してはゐるんですけれど、そして其經驗を凡ての人の場合に當て嵌め度くもなるんですけれど、矢張り貴女のやうな若い人の幸福や生命の幻をそれで踏み躪らうとは思ひませんわ。横を向いて膝漣に口を噤んでゐますわ。だつて妾は自分が馬鹿だつて云ふ事を知つてゐますもの。妾は只子供の時からあの人が好きだつたのよ。あのデカダン男の容子が何と云ふ事なしに只無性に好きだつたのよ。

よ。だから妾は姉さんに嫉妬しながら姉さんの縁談に心から賛成したのよ。妾は早熟な自分を恥ぢ、蔑み、犠牲にする事にヒステリックに亢奮してゐたのよ。絶望的に自分を苦しめ乍ら喜んでゐたのよ。そして笑ひ乍ら姉さんを送つて了つてから聲を上げて泣いたわ。姉さんに別れるのが辛い、淋しいと云つて。そしてその結婚の後であの人が不身持ちだと云ふ事を知つた時も一時は驚きましただけれど、今想ふとそれ程ひどく悲しみもしなかつたのよ。でも妾はこんな風な深酷らしい小説的な告白をするのは氣が引けるわ。貴女から愛想を盡かされるやうな氣がして怖ろしくなるわ。妾が今云つたやうな事を妾は心から恥じてゐると云ふ事を信じて下さいね。とに角姉さんの死んだ後であの縁談が妾に起つた時妾は承知してしまつたのよ。怖ろしい氣もしましたわ。けれど妾が行けばどうにかなる、きつと凡ては變つて来る、又變らなくても妾は構はないと私かに思つてもゐたのよ。そして妾があの人をだんく變へて行く事を想像しては幸福におの、いてゐたのよ。——でも姉さんが死んだ時妾は姉さんが夫の爲めに死んだと云ふよりは妾の爲めに死んだやうな氣がして、こんな事も思つてゐたわ。もし妾にあの人から縁談が起つたならば——大抵起りさうだと妾は想つてゐたの——妾はそれを承諾して罪亡ぼしに姉さんに代つてひどい目に遭つてやりませう、そして姉さんの片身の子達を母親のやうに可愛がつてやりませう——つて。妾は心からさう決心して躍るやうな氣持ちになり、さうして喜んであの人を處に行つたわ。その晩妾はあの人に云つたの。「妾は

姉さんとはちつとも似てゐませんが、そして姉さんよりはすつと醜く、て悪い女ですけれど、妾は貴方に愛してもらはなくても同じやうに貴方の爲めに盡しますわ。奴隷のやうに盡しますわ。そして乳母同様に哀れなお子さん方の爲めに盡しますわ。つて。と、あの人は妾に接吻し乍ら云つたわ。俺は正直な處、姉さんよりはむしろお前の方が好きだ。男は女に對しては趣味の廣いものだ。廣過ぎる位のものだ。だがお前は殊に俺の氣に入る質だ。まつたく俺は幸福だよ、つて。勿論それは出鱈目だつたのよ。あの人の趣味に一番適當してゐる女は妾のやうな女ぢやないつて事はあの人も自分でよく知つてゐるのですもの。尤も趣味が廣いと云ふのは本當だつたわ。妾達が結婚してから二ヶ月目にはもうあの人は遊び始めました。妾は始めにはそれを自分の内の悪魔に對する悪魔の鞭だと思つて受け流してゐました。妾は妾を嫌つて死んだ母親を泣き叫んで呼ぶ子供に頬を叩かれながら、髪の毛を引き抜かれ乍ら唇を噛みしめて、十二時になつても、一時になつても歸つて來ない夫の歸宅を暗い寢室の中で待つてゐました。そして自分を打つ子供を抱き抱えてゐる自分の姿を鏡に映しては自分に見せてゐました。けれど、そんな芝居も何時迄つゞけてゐられるでせう。グデーン／＼に酔つて歸つて來ると、碌に妾に口を利くのもいやだと云ふやうにいきなり蒲團の上に倒れると直ぐ野獸のやうにいびきをかく夫を見乍ら、妾は自分の馬鹿さと賤しさをかう迄もして嘲笑つてゐる事の是否を疑はずにゐられるでせうか。——けれど、これはみんな妾の自業自得よ。迷ひこ

知りつゝも踏み込んだ妾の盲目と、自惚れと、無智との報酬の懺悔話よ。だから妾はそれを一般の場合に當てはめる事の甚しい不當を知つてゐるわ。世の中にはあの人も善い男の人が勿論いくらもゐるでせうし、又妾よりも善良で、純潔で、賢い女の人がいくらもゐると云ふ事も今更云ふさへ厚かまし過ぎる事です。例へば貴女のやうな。さうして又誰も他人の生命の幻を踏み躪つたり、嘲笑したりする権利はありません。だつてその幻なしに妾達は生きて行く事は出来ませんからね。幻を嘲笑する事は生命を嘲笑する事ですからね。幻は生命の生命ですからね。それを嘲笑する力のあるのは唯神様が、でなければ偉い悪魔丈けですわ。」

「御免なさいよ。貴女のし度くもない話をさせて了つて。だけど本當に何と云ふ怖ろしい事ですわ。」と道子は云つた。

「まあ怖ろしいとしか云へない事だわね。其事は前から聞いて知つてはゐましたけれど、本當に結婚しない女には結婚した女のあの苦しみや、悲しみは想像も出来ない事ですわ。尤も幸福な場合にはその幸福さも同じやうに想像出来ないでせうけれどね。憎み合つてゐる夫婦の生活。少くとも女にとつてこんな怖ろしい地獄が他にあるでせうか。けれど、勿論假令總ての既婚者が口を揃へて結婚に反對し「幸福の家と信じてその中にまつしぐらに飛び込んで行く可憐な人々よ、暫くその門の前に立ち止まつて家の中の様子を冷靜にのぞいて御覽なさい。二度と出る事の出来ない蹄係にか

からないやうに用心なさい。なぞと先輩ぶつて云つた處で後から來る人達には「馬の耳に念佛」程にも聞かれないには定つてゐますわ。人間はさうしたもので、何でもやつて見る者ですからね。妾の知つてゐる人に結婚して三ヶ月目に離縁をした人がありました。その人の夫は別に道樂をしたと云ふわけでもないの。只その人は夫が他の女にも情慾を起して、自分以外の女をいくらも愛する事が出来るものだつて事を知つた丈けで飛び出してつたのよ。だからその人は世間の笑ひ者にされて、親からは家に入れないと迄云はれたのよ。本當にそれは少し極端は極端だわ。亂暴だわ。我儘過きるとか氣違ひじみてゐるとか、思ひやりがないとか、餘りに無分別だとか云つて非難されても仕方のない點もあるわ。確かに其無謀さは非常に褒めた事とは云へないでせう。もう少し自分を抑えて自分の感情に克つて夫の爲めに夫を愛してその心を少しでも善い方に向けるやうに全力を盡して後にそれをしたのなら猶ほよかつたかも知れないわ。けれどもそれは理屈ですわ。直覺は凡ての能力範圍を知つて了ふものです。少くとも妾にはその人の氣持ちがよく分るのよ。何しろその人は未だ十九にしかならない、夫の愛を信じる事の出來ない、純潔な、力無い娘なのです。そしてたとへその人がどれ程間違つてゐたにしても矢張りその人の間違ひには崇高なものがあると思ひますわ。之は心の潔純さの程度の問題です。白さの問題です。唯純潔と云ふ事よりも更に以上の清さを持つてゐる正しい人丈けが裁く事の出來る事です。妾は貴方の爲めに生き、貴方の爲めに死にます。」と

かう眞心から叫んで、一人の純潔な處女がその貴い純潔さと、肉體と共に心の操と、幸福と、生命と、運命との凡ての操を捧けて身を投げかけたその男が自分を裏切る時、その女の踏み躪られた心持ちは世にも傷ましいものぢやないでせうか。あの怖ろしい心持ちは到底男には分らないのです。何故と云つてどんな純潔な男の心でも純潔な娘の心程純潔ではなく、そして又どんなに優しい敬虔な男の心も自分の愛する一人に身を捧けた女の心程信賴的で從屬的ではないからです。その時の絶望の苦しさと、悲しみとはその運命の全く獨立性のない弱さを示すと共にその心の並々ならぬ純潔さを示すものです。眞白でない布は他の色に染められる刺戟をさう強く感じる筈はありません。そしてその絶望が餘りにひどくそのいたいけな心を顛倒させる時、その人がつい常規を逸して前後不覺な無鐵砲な事をしてつたとしてもそれは嘲る者の方が少し恥知らず過ぎるぢやありませんか。而も此貴い純潔な絶望を俗に格氣と云はれるのです。嫉妬と云はれるのです。あ、世の中に嫉妬と云ふものが一つでもなくなつたらどんなにい、でせう！けれども嫉妬にだつていろくあるわ。此方が醜くて向ふが美しい爲めに起る本當の嫉妬もあれば、向ふが醜くて此方が美しい爲めに起る嫉妬もあるわ。それは嫉妬と云ふものぢやなくつて矢張りそれも嫉妬と云はれるんだわ。けれど假令それが格氣と云ふものであつたにしろ、嫉妬と云ふ煩惱であつたにしろ、それは矢つ張り純潔な白い花ですわ。そして純潔と云ふ事はどんな無分別な、弱い、子供らしいものであつたにしろ

矢張り一つの清浄な徳ですわ。人間の花ですわ。誇りですわ。だから妾はその人の話を聞いた時自分の心に恥じるやうな気がしましたわ。妾が離縁をしないのは妾が不浄で墮落してゐるからだつて云ふ氣がしましたわ。だつてその人の夫は妾の夫から比べれば未だずつと謹しみ深いのですもの。その人が一時お友達も無くなつたと云ふ話を聞いた時妾は心から腹が立ちましたわ。だつてこんな醜い心を持つた人間許りが多い世の中はさう云ふ純潔な心の天使を未だ一人でも持つてゐる事を誇りにしてもいゝ筈ぢやありませんか。それなのに……何と云ふ反對な、馬鹿な世の中でせう。妾は態々その人を慰めに、勵ましに、汽車に乗つて信州迄行きましたわ。あゝ。それでも大抵の女は仕舞ひには赦すやうになれるものですわ。尤も男は決してどんな場合にも「赦してくれ」とは云はないものですけれどね。だつてそれを赦さなければ自分は死ぬよりないのですもの。そして何時の間にか、其處には子供と云ふ運命の楔が出来て了ひます。」

文子は身を顫はして感動してゐた。

「解つて、よ。よく解つて、よ。文子さん。」と道子も共に感動したらしく頬を赭らめた。そして奥の方では、笑むでゐるやうな黒い瞳を輝かし乍らいたはるやうな調子でそつと嫂の顔をのぞき込んだ。「貴女は本當に真心のある方だわ。親切な心の美しい方だわ。だから貴女はそんなにお綺麗なのね。」かう云ひ乍ら道子は此文子の美が果して自分の兄に本當に解つてゐるだらうか、と考へた。

けど、妾は何だか貴女のお話を伺つてゐると恐ろしくなつてよ。何だか少し聞いてゐるのに堪えないやうな重苦しい壓迫を胸に感じますわ。そして益々貴女に同情せずにはゐられなくなるわ。でも文子さん、貴女はまさか、男つて云ふものに復讐心を持つてゐらつしやるのぢやないでせう？ それや少しは持つてゐらつしやる筈ですわ。けれど復讐してやらうと云ふ意志を持つてゐらつしやりはしないでせう。まさか貴女はその爲に……。だつて、世の中には随分悪い女の人だつていくらもゐるんですものね。そして男の人がもし今貴女の被仰つたやうな事を聞いたら少し我田引水のやうに聞くでせうからね。女の愛顧最負をしてゐるやうに、女の肩を持ち過ぎてゐるやうに云ふでせうからね。」

「まあ、貴女は妾が一般の場合を云つてゐると思つてゐらつしやるの？ 妾は前にも云つた通り、只妾一個の経験から推した取り越し苦勞を饒舌つてゐるんですわ。え、妾は本當にそれが妾丈けの取り越し苦勞である事を心から望んでゐますわ。あ、妾は自分よりもずつと利口な、しつかりした貴女に向つて何と云ふ馬鹿な取越し苦勞をしてゐたのでせう。だつて、女が男に逢ふ時はどうしても女は受け身的に、寄生的になるやうに造られてゐるものです。そして其處に美しい調和もあるのだと思ひますわ。それでも妾はその人が純潔な、心の美しい人であればある程その人の結婚を祝し度くなるよりもつい怖れる心が先きに立つて了つたのです。けれどもそれは女を凡て妾のやうに馬鹿な者であると侮辱してゐた事に過ぎなかつたのですわ。妾はそれを知つてはゐるので

すけれど。」

「文子さん、妾はどんなに貴女に感謝してゐるか知れませんが。貴女の被仰る事は本當ですわ。一般的な眞理ですわ。決して貴女一個の事ぢやありませんわ。でも妾は一體どんな事をしたのでせう。」道子は又云つた。「貴女に同情して、又兄に同情して、貴女方二人を逢はせるやうにした時、妾は無分別な事をしたのでせうか？妾には分らなくなつて了ひましたわ。何だか恐ろしくなつて來ましたわ。」

「あ、道子さん、貴女は妾がさう云ふ氣持ちでゐては兄さんが氣の毒だ、妾は兄さんとの結婚に幸福を感じてゐないからこんな事を云ふと——貴女はお思ひになつたのでせう？もつと露骨に云へば、妾は只前の人に、つまり男に復讐し度い爲めに貴女の兄さんに身を任せて、腹癒せをしようとしてゐるのぢやないか？つて思つてゐらつしやるのでせう？」文子は再びほ、笑むだ。「一體貴女は妾が未だそんなに自分の事を考へてゐると思つてゐらつやるの？そんな力が妾のやうな弱いものに未だ残つてゐるものと？大ちがひよ。妾はもう自分の事なんぞ微塵も考えちやなくなつてよ。それとも貴女は妾が未だあの人を恨み乍ら憎み乍ら矢張り愛してゐるのぢやないか？つて思つて？あ、妾がどんなに兄さんの事許りを考へてゐるか？つて事を何時か證明出来る時があるかも知れない。」文子は異様にほ、笑むでゐる調子でかう云つた。「けれど、妾だつてさう幸福である筈もないぢやありませんか。折角地上に浮び上つて日の光を一目見た許りなのに、その太陽は最う生死も定かならない遠くの戦地へ行つて了つたのですもの。」

「本當にお氣の毒ですね。」と此時突然後ろから男の聲がした。其處には背の低い門見がチヨコンと立つてゐた。チヨコンと立つてはゐるたが此小男は二人の女の顔色を俄かに變じさせる丈けの危険性は持つてゐた。

三

「御めんなさい。お驚かせして済みません。いや、それよりもお驚かせした者が生憎く「私」であつて済みません。驚かすなんて事は人次第では中々甘い戯れになるもんで「おや、誰かと思つたらお人のわるい！」と云つた調子で、一寸硬くさせた人の顔を又ほ、笑みの中に崩させると云ふ面白味のある無邪氣な悪戯に過ぎないんですがね。私がやると何でも其人の顔を只蒼く硬かたばらせたきりになつて了ふんで、結局私は一々「済みません」と謝まらなくちやならないんです。不幸にして此鼠に似た私の顔が怖しく感じがわるく出來てゐるのですね。併し同じ屋根の下に住むでゐるからには鼠だつて偶まには人間に顔を合はさない譯には行きません。貴女は鼠が大お嫌ひでしたわ。いや、それは清澤さんでしたわ。間違ひました。ですが此ずらりと並んだ無數の人家の中には平均十四宛位の

鼠が一軒毎に棲んでゐるんだと思ふと一寸無氣味ぢやありませんか。え、鼠は何處へでもくつついて行きますよ。貴女方が何處へ引つ越されたつて鼠から離れるわけには行きません。それは人間の運命ですからね。それはさうと私は今一寸お宅へお寄りして見たのです。實は御承知でせうが、今夜A館で音樂會があるんで、私は其切符を貴女に差し上げやうと思つたんです。戦死者の遺族慰問の寄附音樂會です。多分貴女方はお入でになりますまいね。けれど私は運動して此切符を二枚手に入れる事が出来たんです。中々いゝ音樂會なんです。私の眼の前で之を裂いてお捨てになつたつて構ひません。さうすれやせめて記念にもなり、刺戟にもなるいゝ^{しやち}栗が出来ると云ふもんです。とに角一寸でも貴女方のお手にそれを握らせれば私は光榮に思つて満足するんです。尤ももう一つ神田の青年會館で今夜演說會があるさうですよ。貴女方は今大分結婚について名論卓説を吐いてお居でのやうでした。その演說會でも「戦争と女子」とか「如何なる場合にも於ける女子の道」とか云ふ題で名士の話があると云ふ事ですよ。名士と云つたつて必しも下らない者は限りませんからね。何か貴女方にとつて参考になる事が聞けるかも知れませんよ。それに今夜の辯士は一寸毛色が變つてゐると云ふ話です。つまり餘り大した名士ぢやないんです。何とか云ふ低能の女崇拜者があつたね。「永久に女を戀してゐる」思想家とか理想家とか云はれてゐる男ですよ。その男も何か喋舌ると云ふ話です。まあ、何方でもお氣に召した方にお入でになつたらいいでせう。たまには氣晴

らしにそんな處にお出になるのもいゝですよ。餘り家の中に許りとち籠つて心配許りしてゐるぢやちやお體に障りますよ。あゝ、それから貴女が先刻詰らない人の言葉だつたとか云つて男の女性觀が大抵その細君觀に依る事を話しておるでゝしたね。あれは私の言つた事ですよ。はは、それでは又。」

門見はかう云つて二枚の青い切符を文子と道子とに渡し、そして呆然と顔を見合はせてゐる二人を後に残して何處へか去つて了つた。

四

二人が家に歸つた時、文子の處に一通の手紙が清潔から來てゐた。封を切ると音樂會のプログラムと一緒に白い切符が二枚現はれた。

「先日は失禮しました。非禮な事をして後で深く後悔しました。私の無作法をお容し下さい。悪氣でしたのではなかつたのです。今夜音樂會があるさうですから切符とプログラムをお送りして見ます。こんなもので一時でも貴女方のお淋しさを紛らす事が出来れば私は幸福です。私も連れがあつたらベートオエンを聴きに行つて見やうかと思つてゐます。尤も今夜は青年會館に演說會もあるさうです。詰らないものでせうが、或る人の話丈は一寸聴いて見てもいいと云ふ氣もしてゐます。

併し行くかどうかは分りません。厚かましいやうですが、お引越しになつたら御住所を知らせて頂ければ幸ひに思ひます。貴女方の上に平安がある事を心から祈つてゐます。

清澤貞二郎

二人の女は迷つた。何方にも行くまいと二人は定めた。併し二人はお互に「貴女行つて入らつしやいな。」貴女こそ行らした方がいゝ、わなぞと云ひ合つた。そこに父が来て

「二人で行つてお入で。行く方がいゝ。」と云つた。行つて入らつしやいな。是非。宵の中位妾にだつて子供は見えてゐられますから。」と母も云つた。

二人は演説會に行く事にした。其事は門見の計劃であつたやうに、又清澤の計劃でもあつた。清澤も門見と共に彼等がきらびやかな音樂會には行き度くも行き度がるまいと云ふ事を、そしてもし行くならば、身装に氣のおけない、演説會の方に行くであらうと云ふ事を知つてゐた。

其事に清澤は多少氣が咎めてゐた。それでもし自分を誘ひに誰か來なかつたならば自分は何方へも行くまい。誰か來たならば其人の行き度がる方に行く事にしやう、行くも行かないも其人の意向に任せやう。元とく、何方へもさう強いて行き度いのではない。何方かと云へば音樂會の方に行き度いが、遠くからでも「彼女」の姿を見られる方に行つた方がいゝには定まつてゐる。——清澤は落ちつかない氣持ちで當てもなく友を待つてゐた。夕方の六時になつたが誰も來なかつた。演説會は六時半から、音樂會は七時から始まるのだ。六時半を少し過ぎた時彼はふらりと一人家を出て了つ

た。夏の夜の快い冷氣が衝動的な氣持ちになつてゐる彼の全身をぞくぞくと顫はせた。彼は太息を吐き、星の空を仰ぎ、緊張した元氣な足取りで電車に飛び乗り、そして演説會場へ行つた。其時は七時一寸過ぎであつた。

五

演説會は既に始まつてゐた。聴衆の大多數は女であつたが、その数は割に少かつたので、後から入つて來る聴衆は素より、誰が來てゐるかと思ふ事を見分ける事も六ヶしくはなかつた。

清澤は二階の一番前の席に腰をおろした。演壇には高根と云ふ男が立つて「時節はづれの話」と云ふ題目で何かを喋舌つてゐた。清澤は此演説を「まあ、聽いて見てもいゝ、つもりで來たのである。併し彼は直ぐ眼をわきにそらして自分の周圍を見、後ろを見、又階下の座席をすつと見廻はした。餘り自分のキヨロノしてゐる容子に少し「氣がひけた」程であつた。併し何處にも彼女達の姿は見えなかつた。多分來ないのだらう。音樂會には無論行くまい。それとももう引越して了つてあの手紙を見なかつたのだらうか。まさか、俺があんな物を送つた事を氣障に思つてもるまいと思ふが——こんな事を彼は考えてゐた。が、何時しか彼は辯士の低い、が、底力のある聲の方に氣を引かれて其方に注意をむけた。

高根氏の演説は最早半分以上を畢つた處であるらしかつた。時間の割りから見ると元とく短い話なのであらう。彼は四十才位の中肉中背の男で、神經質ではあるが、その神經はトゲトゲしく表に現はれず内に抑制されてゐると云つたやうな、一言で云へばカナリ修養を積むだ人間である事が一見して分つた。そのくせ何處となくみづ／＼しい初ぶな感じがあつて、如何にも苦勞をした人間と云ふ風にも見えなかつた。彼自らも「私は苦勞と云ふものを知らない子供だ」と云つてゐた。

清澤は彼の著書を數年前からわりに讀んでゐた。高根氏は文士ではなかつた。宗教家と云ふのもなかつたが、いろ／＼の方面に渡つて感想や、評論を書いてゐた。そして自分では其方の才がないと云つて文學の筆を執らなかつたが、文學や、美術を愛し、深く尊重してゐた。一番彼が好きなのは孔子で、「孔子の味は特別だ」と毎も云つてゐたが、又トルストイが好きで、同時にエマソンや、カーライルや、ラスキンや、ゲーテ等を愛讀してゐた。そして彼の主張する處は平凡で獨創に缺けてゐると云はれてゐたが、——何故なら彼はその性質から穩健で、公明で、寛容で、忠實で、謹嚴であつたから——どのやうな平凡や、「幼稚さ」の中にも熱烈な誠實と、本氣さが籠つてゐた。「私は毎も分りきつた事しか云はない、と人々は云ふ。實際私は分りきつた事以外の事は云へない人間だ。又私は云はうとも思はない。私は何よりも公明な眞實と、健全を愛する。只私にはその分りきつた事が彼等よりも未だ少しは本當に分つてゐると云ふ點で私の非難者と違ふのみだ。分り

きつた事の眞の價値と、意義を本當に分つてゐる人の前には私は跪く。私の非難者の中に果して幾人さう云ふ人がゐるか、私は逢ひ度いものだ。」彼はいつかかう云つた事がある。

とも角清澤は彼の書くものに好意を持つてゐた。素より多少、殊に文藝の方にかけては意見の違ふ處もあつたが、「とに角彼奴は本物だ。」と云つてほめてゐた。そして一度は高根氏が餘りに世間から努めて冷嘲の的になつた時、雑誌の上で彼を辯護した。それ以來二三度手紙を往復した事もあつた。しかし「低能」呼ばはりをされ乍らも、そして冷嘲され乍らも、高根氏は次第に或る勢力を得、小さい乍ら一方の權威者となり、その非難者からも内々怖れられるやうになつた。「彼奴は何の特色もない、餘りに平凡だと云ふ點で認められて來た。物好きな世間では何事も特色になれる。そして特色でさへあれば——唯深い特色を除く外は——世間から一時は持て囃される。色魔も一の特色であり、低能も一の特色であり、下等も一の特色であり、無特色も亦一の特色になる。」變つたものが面白い。間すたり者はないものだ。其時彼はかう云はれた。それと同時に彼については何一つ公けに言ふ者が無くなつた。人々は彼の侮り難い不可抗力を知つた時、申し合はせたやうに彼を默殺し、無視と、沈黙と、忘却との裡に葬り去らうとするやうになつた。

清澤は今初めて高根氏を見たのである。

「要するに私は諸姉の純潔さを尊敬する者であります。」と高根氏は前の言葉をうけて云つた。「諸姉の中には不幸にして純潔と云ふ形容にそれ程そぐはない方も居られるかも知れない。けれども概して云へば諸姉はその運命や、教育上からして男子よりは單純で、小供らしく、道德的虛榮心杯と云ふものも持たず、心の黒い人も相當に居ない事もないが、それでも畢竟するに無邪氣である。悪い意識を持つてゐてもそれを娛しむ事が或る種の男子程意識的でない。貴女方は善かれ、悪かれ本能的である。従つて又随分純潔な人も多い。只注意すべき事は、純潔といふ事は我儘な心に附く時は美德とならずに却つて、その幸福を傷けるものになると云ふ事です。純潔と云ふ事は確かに貴い花です。罪を罪とし、醜きを醜きとなし、穢れを穢れとなし、恥を恥となし、不正を不正となし、虚偽を虚偽とし、悪を悪として映すものは此純潔と云ふ神聖な鏡です。従つて又美を美となし、眞を眞となし、善を善となし、人間が此世で受けうべき純粹な喜びや、幸福や、又神聖な悲哀を神から授かるのは一に此清らかな鏡の中に於てあるからであります。そして眞理や、星や、あらゆる神の榮光がその光りを投げるのは實に此曇りなき鏡の上にあるからであります。故に此純潔と云ふ美德は當然それ自身に或る高い幸福を授けられてゐるものです。けれども、此美德も、餘りに小さい自我主義

と云ふ貪慾な婆と共に棲む時には、却つて其鏡を持つてゐる爲めに他人の美德や、價値を映す代りに、缺點や、汚點を映し過ぎるやうになる。喜びを映す代りに、苦痛を映すやうになる。希望を映す代りに不満や失望を映すやうになる。引いてはそれを責め、咎める心が起る。其事も強ち悪い事ではない。喜びを見るのは、虚偽を見ると云ふ事は極く悪い事であるから。併し眞實を見、そして其處に深い理解と、同情を惹き起すに超した事はない。純潔であるのは、が、狹隘である必要はない。度量が小さいのは、事ではない。小供は純潔です。併し小供が人間の理想である程人間は情けないものでは素よりない。もし自分が純潔である爲めに他人が不純潔であり、穢れてゐる事のみが眼について絶えずそれに依つて不快や、憎惡を燃やしてゐると云ふのみならば純潔と云ふ事は却つて不幸の種子である。破壊と、亂の種子になる丈けである。孔子は誠めてゐます。「人にして不仁を惡む事甚しきは亂なり」と。人の醜に氣がつくのは、併し同情を失つてはいけない。自分に寛で、他人に嚴酷になつてはいけない。反省を鈍らしてはいけない。容赦と云ふ事が出来なくてはいけない。ドストエフスキーは「女は宥すと云ふ事を決してしないものだ」と或る處で或る人物に云はせてゐます。私は敢へて諸姉の前に此女の美德を實に深く理解してゐる人の言葉を參考に引かうと思ひます。純潔であつても感じが鈍いとか、情熱に乏しいとか云ふ場合には未だ無難です。併し純潔にして神經が過敏であり、過剰の熱情を伴ふ場合にはそれは危険なものとなり勝ちです。

熱烈な純潔は動もすれば人間に無理な要求をし勝ちなものです。我儘になり、人を責める事には、やむを得ず。何事にも「度」と云ふ事が保てなくなり、その氣持ちは急に零度の下るかと思へば直ちに沸騰點に昇ると云ふやうに針小棒大的になり、抽象に走り、常に疑心暗鬼を産み、斯くて次第に禮の埒を破り勝ちなものです。私は本來はごく善良な優しい人で、又純潔な、涙もろい婦人であり乍ら變に荒んでゐて自棄氣味で、反抗的で、心が荒つぽく、手におへない婦人をどうかすると見かけます。ヒステリーと云ふのでせう。さう云ふ人の感じはいたゞしいものではあるが、決して好いものではない。自分の勝手許りを考へて感謝と云ふ事を知らない女は實に醜いものです。それはその婦人が純潔と云ふ事よりも一層高尚な、凡ての人間の前に謙遜である心を失ひ、禮に對する謹しみ深い神経を失ひ、女性の奥床しさを失ひ、自制に富んだ靜かな寛容の心を失ひ、同情心を失つた爲めなのです。その人の心には絶えず煩悶と、怨恨と、猜疑と、不平不満と、憎悪と、怖ろしい反抗心と、絶望と、我慾との地獄の焔が燃えてゐる許りなのです。そしてさう云ふ暗い煩悶は次第に火の手を擴けて一個人に對してはなくなり、遂には人生と、全人類に對しての怨みとなり、反抗となり、憎悪となり、絶望とさへなつて身を亡ぼし、人を不幸にするのです。而してその元はと云へば多くは純潔な心が熱烈なエゴイズムと一緒になつたからなのであります。」

高根氏が此處迄語つた時清澤は二人の白地の單衣を着た女が階下の自分の眞下の處に來て座つた

のを見た。それが「彼女達」である事は直ぐ分つた。しかし二人が座つた時、二人の姿は清澤からは上體を前に差し伸ばすのでなければ覗き見られない事になつた。清澤の顔は一寸緒らむた。そして彼は二三分間は自分の胸の動悸に妨げられて演説の先きに耳を傾ける事が出来なかつた。

「其處で純潔と云ふ事よりも一層高尚な二つの美德を貴び、養はれる事を私は切に諸姉に希望し度く思ふのです。即ち理解と、思ひやりです。男には叡智。女には慈愛。」と云ふ言葉がありますが、少くとも女子には思ひやりと理解力が必要です。その他の徳は此二つの、實は一つと云つてもいい、徳に従つて來るものです。理解と思ひやりとが一つになつた時、それを慈愛と云ひます。そして此廣い慈愛が諸姉の心の中に眼覺めた時、純潔は更に進んで清淨となるのです。此清淨こそ諸姉には最も似つかはしいものなのであります。丁度男が唯勇氣がある許りではいけないやうに、婦人は又純潔である許りではいけません。諸姉は一層の向上欲を以つて此愛すべき芽生へを尊敬すべき立派な樹木に生長させなくてはなりません。泣き言や、反抗心の代りに、自分の幸福な運命を進んで迎へ、自分の幸福を進んで取る丈の義しい勇氣を持たなくてはいけません。そして男子に對しても只要求的な態度や、盲目的に受け身的な、依頼的な態度からもう一步進んだ、しつかりした、健けな態度を取つて行かれるやうにならなくてはなりません。天真な處女の純潔さは寛大な母親の清淨さにならなくてはなりません。貴女方は男に許り餘りに多く要求し過ぎ、頼り過ぎてはいけま

せん。信頼しつゝ、信頼の美德を守りつゝ、而も自分の足で希臘の立像のやうに美しく立つてゐなくはなりません。婦人にはこゝんでゐる美しさと、立つてゐる美しさとの兩方面が備つてゐるべきです。彼女は跪いてゐるマリア・マゲダレナであると同時に厳かに立つてゐるバルラス・アテーネでなくてはなりません。もつと自身自身に美德を要求して、男も亦憐れなものである事を知らなくてははいけません。そして自分の仕事や、生活に疲れ、苦しむでゐる男達に泣き言や、怨み言許りを聞かせないやうにならなくてははいけません。男女お互に助け合ひ、天與の特色と美を發揮し合ひ、同情し合ひ、宥し合つて圓滿な幸福に到らなくてはなりません。

そして相手を責め、怨む事に依つてよりも猶自分を美しくする事に依つて、宥す事によつて、忍耐に依つて、又もしその人を責めるにしても、憎悪や、怨みに依つては無く、温い同情に依つて、親切に柔和に注意を與へるやうにし、お互に不幸や、缺點の根を除き合ひ、且つそれが出来るやうに善くなれるやうに、そしてあはよくばその不幸や窮乏の中にも感謝を見出す事を怠らないやうに心掛けて行かれる事が大事です。斯く要求する事は實際に於て中々六ヶしい場合も多いでせう。宥すと云ふ事の非常に困難な時もあるでせう。同情したり、宥したりする事は貴女方の力に餘つてゐる事のやうに見へる時もあるでせう。

無理はありません。男子は今迄確かに貴女方に對してよくありませんでした。そして今でもなほ。

貴女方の多くが不幸である事は實際無理はないのです。自棄になられるのも無理はないのです。しかし貴女方が餘りに男を責めすぎる時男はかう云ふでせう。

「あ、確かに俺達は随分君等を不幸な目にも遣はせたよ。幸福な目にも遣はせた事があるのだが。そして君達を不幸な目に遣はせたやうに俺達自身をも亦それに遣はせたのだが。それや本當に悪かつた。俺達もそれは認める。だから俺達は君等がと角自分の肩を持ち過ぎて僕等に愚痴をこぼし度くなる事を咎めやうとは思はない。君達は弱いんだからその位のハンディキャップはつけてやつてもいい。花も持たせてやらう。だが君達が本當に憐れなものだ、人間は憐れなものだ、性慾は怖るべきものだ、煩惱は恐るべきものだ、操は尊まるべきものだ、男女はお互に斯うし合はなくてはならない、貞淑を尊び、本分を守り、活かし、神の爲めに、同胞の爲めに忍耐強く働かなくてはならない、其處に調和と、平和と、幸福が獲らるべきものだ」と云ふ事を本當に知つて人間に教えた者は君達の間から出たか、俺達の間から出たか、君達の間から釋迦が出たか、基督が出た事があるか。」と。勿論之は凡そ馬鹿な言ひ草である事は諸姉にも容易にお判りでせう。そんな人達が女子の間に、女子として現はれなかつたとしても女性は矢張り偉大なのです。立派なものなのです。女子の偉大さはその意識にあるのではなく、美にあるからであります。優秀な個人の力にあるのではなく、女性としての、又母性としての力の中にあるからであります。あらゆる運命の中に咲く貴女方の中の

意識されざる背景的な忍従の力や、美德や、人類の生存や、調和や、幸福にとつて實に必要な其才能と。微笑みと、涙との中にあるからであります。さう云ふ世界の前景に立つ偉大な英雄が諸姉の苦しむ長い不安な胎内から生れ、貴女方の幾千の隠れたる涙や、眞夜中の子守唄や、苦勞や、感謝の中に養はれ育てられながら、而もその母たり、養育者たる最大の恩人は常に背景に隠れて、偉大になり行く我子の生長を星の蔭から見て無上の嬉し涙に暮れてゐる。此悲壯な運命に、そしてその絶大な不可思議な力に偉大と云ふ名を冠する事が果して不當でありませうか。

けれども此悲壯は今の有り様では少し酷に過ぎてゐるとしか思へません。何萬何億と云ふ犠牲者がたえず其處から生れるのです。悲壯も度を過ぎれば悲惨になります。けれども、吾々の願望としてはカナリに悲壯な場合に於てすらどうか貴女方の美を保ち、更に進んでそれを輝かす機會を見逃されないやうに祈り度いのです。美は死ぬものではありません。貴女方がその美を保存して居られる限り如何なる運命も貴女方からそれを奪ふ事は出来ないのです。それこそ諸姉の眞の、そして唯一の所有です。運命は善良な婦人からその愛兒を奪ひ、夫を奪ひ、幸福をさへ奪ふ事も出来る。併し美を奪ふ事は出来ない。美は貴女方の生命で、貴女方にとつては美は即ち善、即ち正義に他ならないのであります。然らばその美とは何か？　こまやかな思ひやりです。察しのい、優しさです。社會の和合とか、和樂とか云ふものに對する細やかな心づかひです。泣いてゐる人をもほ、笑ませる

善良な才能です。氣の利いた上品な社交的なユーモアです。同時に家庭的な温い慈けの心です。機嫌のい、美しい主婦としての氣持のい、人との應接ぶりや、持てなし方です。裝飾の才能です。如何なる場合にも一程の禮の埒に對する微細な心づかひです。そしてよく働く事です。貴女方が此等の貴い才能を持たない時、貴女方は如以に善良で、働き手であつても充分に美しくある事は出来ない。此等の才能や、心がけは他人の心の中に喜びや、愛や、高尚な心を咲かせる神秘的な種子であり、花であり、極樂鳥です。此等の美德は貴女方の羽衣であつて、貴女方がそれを身にまとう時、貴女方はその羽衣によつて此世のうちを舞ひ翔ける地上の天人となるのです。

此羽衣はもし本當に貴女方の身についてゐるならば、貴女方を自由に、のびくとさせやうとも、決して貴女方を窮窮に束縛したり、固くしたり、幽鬱にしたり、いじけさせたりする氣遣ひはない。貴女方はそれによつて常に明るい活き／＼とした、素直な心持ちで居り、たとへ或る一人を獨占し度いと云ふ貴女方の運命にとつて必要な感情が起つても、その爲に理性や、同情の眼が眩まらず、却つて其處から實際的な、一層本能的な慈愛心を養はれ、引き出すやうになり、孤獨的な、僻んだエゴイストにならず、自分の神経を謹しむ、自分の神経よりは他人のそれを重んじ、もし人を憎むにしてもその運命を察し、又想像力によつて、常に他人の場合に我身を置いて考へ、人に無理な要求をせず、苛酷にならず、そして何處かに憐れみの心を起す隙間を見出すやうにならるであ

りませう。不愉快に思へる人間でも夜其人が淋し氣な姿で寢床に入る姿を想像したりして見ればその人も亦淋しい憐れな此世の住人である事を感じる事が出来るものです。そして諸姉は又其羽衣によつて凡ては萬人共有の財寶であり、幸福である事を忘れず、何物も自分一個のものでなく、又自分が社會的な者である事を忘れず、そして何にも増して人間が凡て憐れな弱い者である事を忘れず、此世では一切の事が耐へ合ひであり、慰め合ひであり、働き合ひであり、喜ばせ合ひであるべき事をよく知られるでませう。お互に其心を小石のやうにして絶へず他人の非を責め合ひ、怨み合ひ、小さい自利を奪ひ合つてゐたなら人間男女の間は永劫の恐るべき争闘となり、虐殺となつて、人類は必然自滅するより他はありません。

之を要するに私は諸姉が餘りに厭世的でない事を望むのです。男子に對しては女子をその一般のヒステリーと厭世とから解放するやうに、女子の顔からも少しあの曇りを取つて、女子の最も大事な美德の一である快活さを充分に發揮せしめるやうに、そして女子がもつと其理解力や、同情心を養成出来るやうに、善良に、賢くなれるやうに修養の時間を與へるやうに心掛ける事を望むと共に、女子に對しては一層の寛大と、自制と、感謝の心と、柔和さと、穩健な勇氣とを望み度いのです。女子は男子の偉大と並んで美しく、立派でなくてはならない。快活で、晴やかでなくてはならない。釋尊は偉大であるが、その釋尊の饑渴に山羊の乳を献けてその餓死から救つた村女ナンダバラの姿

は實に莊重で又美しい限りではありませんか。

同情と、理解。慈愛と賢明。及び正しい日々の勞働。私は現に此三つの根本の美德を兼ね備えた美しい婦人を見た事があります。又優れた藝術には往々それが現はれてゐます。ダ・ビンチの「モナ・リザ」を見る時私は女性の理想を見るやうな氣がします。あの高さ、あの深さ、あの静けさ、あの落ちつき、あの威嚴、あの美しさ、あのミスチックな不思議な明るさ。そしてあの無限な味。

私はよく女性崇拜者とか讚美者とか云はれてゐます。凡て崇拜したり、讚美したりする事は今時では輕蔑さるべき事と云ふ流行になつてゐるからであります。讚美の代りに誹謗、崇拜の代りに輕蔑。それが深酷であり、利口であるとされてゐる。だが輕蔑や、誹謗は決して人間を幸福にはしない。又高尚にもしない。その反對である。で、私は此嘲笑を甘んじ度いと思ふ。が、その實私とても女子の中には随分困つた人もある事を決して知らないのではない。悪人と云ふ者は此世に居ない者だと思はうとしても其人の事を考へると「否、矢張り悪人もゐる。悪人と云ふものは居ないものだとする必要はない。」とどうしても思はざるを得ないやうな婦人をも私は知つてゐる。上の者には嫉妬を、同格の者には見榮を張り、下の者には輕蔑をしかなし得ないやうな人も貴女方の中には居る事がある。絶えず人の悪口を云ふ事を快樂となし、誰かを憎まずには暮らされないやうな不幸な病人も貴女方の中には居る事もある。又私は知つてゐる。貴女方は男子も及ばないやうな鋭い直覺力

を持つて居られる事がよくあるが、貴女方はその優秀なる武器の爲めに往々それを使ひそこなつて、事を誤り、身を傷つけ、もう少し深く知ればいくらでも厚意も持て、許す事も出来、同情する事も出来るやうな人をも直ぐ悪いとか、悪人だとか定め込んで了ふ。そして人がもし貴女方に就いて何か有益な事を云ふ時にも、直ぐ「あの人は私に當てこすつてゐる」とか、「私の悪口をしてゐる」とか云ふ風に許りとつて、その言葉の中に貴女方にとつて少からず有益な教訓がある場合にも、最早それを振り向きもしないと云つたやうな弊もある。諸姉は善くも悪くも概念的になり易い。獨立の思索は諸姉の領土ではないから、或る思想の影響をうける時は諸姉は當然概念的になる筈である。又貴女方は詰らない事に神經質で鬱ぎやで、ひがみ易い。一言にして云へば貴女方は概して氣の持ちやうが拙い。否、寧ろ私は女子の一般の弱點に就いては私の誹謗者などよりも却つて多くいろいろ知つてゐるかも知れない。だが、私は今夜貴女方を責めたり、教訓したりしに此處に來たのではない。のみならず私にはそんな資格も、力もない事を私はよく知つてゐる。私は只貴女方を勵ましに此處に立つたのだ。貴女方が實は貴女方が思つて居られるよりも更に立派なものであり、天與の健全な美を充分に發揮されたならば随分偉大な力を持つて居られるものである事を今更らしく云ひ度くて茲に來たのである。諸姉は私に詰られるであらう。貴方は今人間は憐れなものだと云はれたではないか。貴方の云ふ事は矛盾しては居ないか、と。左様。それは眞理である。人間は憐れ

なものであり、同時に立派なものなのである。その精神と、本分との方面から見れば立派なものであり、偉大なものであり、物質的な一面から見れば憐れなものなのである。そしてその人間の本分が生かされた處には幸福があり、物質が人間を壓迫してゐる處には悲惨がある。併し吾々はその本質と、力とに於て、決して物質に負けるものではない。吾々がもつと吾々の中の貴いものを生かして賢くなり、協同的になり、勤勉になりさへすれば吾々は此慘めさに立派に打ち克つ事が出来る。従つて私が諸姉に希望した處の以上の事は決して皆無理な要求ではない。何故なら諸姉は美しく、ある事が出来るのである。而して私の意見を一言に約めれば、諸姉が此世に對し、又萬人に對しての職分を盡されるには諸姉は唯美であればよい。諸姉の本領は畢竟美である事に存する。その美を益々磨き、深く輝かされる事にあると云ふのです。何故と云ふに貴女方の此世に於ける貴重な使命は、象徴的な意味に於て「哺乳」にある許りでなく、又平和のとりなし役にある許りでもなく、實に此世の生活を飾ると云ふ處に存するからであります。然り、諸姉は裝飾する人々である。自然は男子達が建てる家を諸姉が飾る事を欲してゐる。そして諸姉にその能力を與へたのです。最悪の場合でない限り、諸姉は如何なる境遇の中に在つても、自己の美を保守する事に依つて、その家を飾る事が出来ない筈はない。裝飾は美の結果であり、現はれである。賢明な婦人とは女子の本領が即ちその美に存する事を知つてゐる人に他ならない。愚昧な婦人とは絶えず美を殺し、美を外れてゐる

婦人に外ならない。美は諸姉の鹽であり、道徳であり、美を失へば諸姉は何でもない。私は此本分を諸姉に今更に知つて頂き度くて茲に立つたのであります。

此戦争の最中に於て、私は聊か時節外れの事を饒舌つたかも知れませんが、併し私は非常に不完全ながら、自分の餘りに無權威な事に深く恥ぢながら、又私の云ふ事の凡て常套な「分りきつた」事に過ぎない事を知り乍らかゝる痴けた亂世に於ては一層必要である女子の如何なる場合に於ても永久の本分である道について私の一面からの卑見を聊か述べ度かつたのであります。私の陳腐な、退屈な話を諸姉が辛捧強く聞き畢る事を許され、そしてもし私の千言中の一言なりともを諸姉の内どの様な隅にでも留めおいて下されば私は満足なのであります。」

七

かう云つて高根氏は演壇を降りた。高根氏の顔は其時赭くなつてゐたが、それは興奮の爲めと云ふよりも羞恥の爲めであつた。何でも彼は饒舌つて了ふと同時に急に自分の無權威と、力の不足とにひどく恥しく感じたものらしい。(少くとも清澤はさう察した。)喝采は僅かであつた。聴衆の中には此僅かな拍手に居睡りから覺まされて慌て、眼をこすつてゐる者もあつた。

清澤はもう其處にゐる用はないと思つて立ち上り、そして階下を見た。併し二人の女は何かを囁

きながら座にじつとしてゐて立ちさうな容子もなかつた。清澤は高根氏に一寸面會し度い氣がした。彼の演説を面白く、嬉しく聞いた旨を傳へ度い氣もした。併し「彼女」の動勢が氣になつた。一寸の間に逃げられさうな氣がした。が、直ぐ「女を竈の前から去らしめよ」と云ふ變な題で次の演説が始まつた。戦時中の女工達も夫や子供の飯を焚く爲めに工場から家に歸らなければならぬ。それは女の「徒勞」の一の非文明的な馬鹿らしさである。吾々はパンのやうな食料を製造して女をその竈の前から去らせ、國家や、社會の爲めに文明的に働けるやうにさせなくてはならない。と云つたやうな議論であつた。

清澤は十分許りその「經濟的」な話を聽いてゐたが遂に聽いてゐるのに堪えられなくなつて席を起ち階下へ降りた。とに角階下の出口の處に居れば歸りの彼女達に逢へると思つたのである。併し階下に来て彼女達の席の方を見ると彼女達の姿は見へなかつた。彼はあらゆる席を見廻はし、出口を見、便所へ行く道で二三分待つた。併し彼女達はもう歸つた事が分つた。彼は苛々した容子で再び出口に來ると其處に門見が立つてゐた。

「おつれですか。」と門見は卑しくほ、笑みながら訊いた。

「あの二人の御婦人ではありませんか。あの方達なら今しがたお歸りになりましたよ。」後の話は皆こんなものです」と僕が申し上げたものですからね。お子さんのことがお氣になつたのでせ

清澤は苦笑した。そして睨むやうな眼付きで一寸此「凱歌を舉げてゐる」小男を見おろした。彼は涼しい外へ出て忙し氣に四邊を見廻はした。併し眼の前を電車が走つてゐるのみで人影は見えなかつた。

「世の中にはいろんな變な奴があるものだ。土龍とらごのやうに日光を避ける事によつて生きてゐる奴もあれば、蟹のやうに横に匍ふ事に依つて生きてゐる奴もある。」

が、其時「失敬」と云ひ乍ら後ろから彼の肩を敲く者があつた。振り向くとそれは飯島信生であつた。

「貴方だらうと思つたら矢張りさうだつた。」と信生は嬉しさに云つた。

清澤は電燈の光りに依つて此青年の顔を見た。そしてその美しさに驚いた。

「失敬。君も演説會にゐたんですか。」清澤は心から喜ばし氣な調子で訊ねた。

「え、。出口の處で貴方の後ろ姿を見ました。此間から貴方の家に行き度いと思ひ、手紙も出し度いと思つたんですが、番地が分らなかつたものですから。」

二人は互の番地を知らせ合つた後で、高根氏の演説について話をした。と、其事が二人を所謂贅澤と云ふ事と外面の美との關係やその程度、更に又それ等と道德との關係についての話題に導い

た。清澤は人類の全體的經濟と云ふ廣い、永久的な立ち場から、それについて感想を述べてからかう云つた。

「何しろ文明が進めば衣食住もそれにつれて進むのは必然の結果で、馬鹿な贅澤をしてゐる文明人があるからと云つて質朴な生活を營む未開人が文明人よりもえらいと云ふ事になつてはたまりませんからね。云ふ迄もなく野蠻人の質朴は道德的な意識からではなく、能力や趣味が未開だからに過ぎないのですからね。立派な建築や、美術的に出來た公園や、庭や、趣味の進んだ道具や、料理や、高價な衣裳や裝飾品などと云ふものは矢張り文明人の産物として誇るべきものであつて、それらの物は必ず一方に一層高尚な學術や、美術や、道德的思想や、發見を有する文明人に依つてなければ産み出されないものなのですからね。僕は高根さんに同感です。人間は趣味と云ふもの無しには暮らされない者であつて、只實用や、常識的な經濟や、低級な正義ばかりで生きてゐられる程、殺風景な、お粗末な代物ではないのです。幸にして。只如何なる見地から見ても人類の本質的な經濟に應じてゐると云ふ説明のつかないもの、又教養ある精神や、進んだ趣味が生きる上に、又樂しむ上に役に立たないやうな、従つて又望みもしないやうな本當の贅物はそれらの無駄な贅物を造る事に依つて、もつと人類の生活や、平和や、喜びや、健康や、進歩にとつて必要なものを造る事に用ひらるべき人類の貴重なエネルギーを失はなければならない事だからよくないのです。人間は早く